THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿六年　第八號

第二百六十九號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大野洒竹先生、沼波瓊音先生校訂◎菊判上製頗美本函入正價壹圓五拾錢 特價金壹圓廿錢 送料拾貳錢

最新刊

芭蕉句選年考 上巻

俳を學ぶ者芭蕉を知らざるべからず。芭蕉を知らむと欲する者芭蕉句選年考を見ざるべからず。斯書は石河積翠園の心血を注ぎたる大著、芭蕉發句註釋の最詳細なるものなり。しかも世未だ版本無し。爰に洒竹文庫所藏數本を校合し始めて版本として江湖に頒つ。

大歡迎忽三版特價締切 本月十五日限

米國トロー氏原著 文學士水島耕一郎先生譯

森林生活

◎四六判凡六百頁上製頗美本函入正價壹圓廿錢 特價金壹圓 送料拾貳錢

本書は煩雜にして虚僞なる現代生活に背き森林に遯れて簡易生活を實行せし哲學者の感想錄也

天覽臺覽、岡谷繁實翁著 袖珍 **名將言行錄** 全拾册各册 六拾錢 送料六錢

同上 **續名將言行錄** 菊判上製美本函入 壹圓五拾錢 送料十二錢

千勝義重先生校訂 **和譯蒙求** 三六判美本 九拾錢 送料六錢

内藤鳴雪翁題 寒川鼠骨先生著 四六判洋裝 **贈答俳句集** 五拾錢 送料六錢

再版 大隈伯、秋元子、三宅博士序 岡谷翁著 **日本全史** 拾五册特價 見本進呈 全壹圓五十錢 送料拾二錢

東京市本郷區森川町 振替一九四六七番 **文成社** 圖書目錄無代進呈

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

本書一度出で丶評壇大に振ふ

學者大家は長文の評論を發表し新聞雜誌は擧りて内容を語れり!!!

王堂 田中喜一先生著●●●好評嘖々●●●

書齋より街頭に

金縁洋布製
菊判頗美本
紙數五百餘頁
金壹圓八十錢
送料十二錢

最近の二著

此書は王堂先生がその獨自の實驗理想主義の立場より現代文明の根本問題に一大鐵案を下せるもの也●實驗理想主義は輓近歐米思想界を風靡せるプラグマチズムに出で丶更らに之を醇化せるもの也●實驗理想主義は學徒の理想を擁して志士の實行を期するもの也實驗理想主義は哲人主義也頑迷なる權威と輕佻の革命に反抗するもの也●哲學は空疎なる談理に沒し文藝は頽唐せる享樂に墮して共に人生の歸趣と相關するなきもののみなる時に當り此書出づ蓋し偶然ならざる也

ゴルキイ作

お轉婆

文學士 吉田雨耳譯　金九十錢　送料八錢

此一篇は著者が自覺に腦まされ居る現代人に對する嘲笑である。そして筆端の艷麗で一絲亂れない發展の工合は抑揚頓挫伏線の妙を極めて居るこれ自然主義の作物としては甚だ異趣である

東京市京橋南槇町十八　廣文堂　振替東京四六八四

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

海軍少佐石原忠俊
陸軍大尉本間德次郎
共著

侍從武官男爵山根陸軍大佐所藏泰西名畫數葉入
工學博士辰巳機關大監模寫風景畫三色版數葉入

ネルソンとナポレオン

新刊

菊版四百五十頁總布上製頗美本函入振かな付

定價一圓二十錢 郵税十二錢

不出世の大英雄ナポレオンは空前絶後の戰略家にしてネルソン亦古今獨歩の水師提督たり此兩者の出づるや殆ど時を同うし先天的に互に讐敵たるべき運命を擔へるに似たり而も其英佛を中心として全歐洲に萬丈の波瀾を捲き來る所眞に駭心驚魄に耐へざらしむ本書の著者石原本間の兩氏は歷史の造詣深く我國武人中稀に見るの詞藻を有すと稱せらるゝ而して今や共に筆を揮つて彼の兩雄を描く著者と題材と相俟つて更に一毫の贅を加ふ可らず

武人より見たる海陸兩將の評傳

福本日南著

全一册

三五版上製頗美本函入總六號かな付約一千貳百頁寫眞數十葉入

携帶至便

袖珍 元祿快擧錄

定價一圓二十錢 郵税八錢

增訂 面目一新

千古の快擧たる赤穗義士復讎は時の古今を問はず國の内外を論ぜず人の齊しく仰ぎ見て生ける龜鑑となすものなり本書は文壇の雄豪日南先生の刻苦多年天下を周遊して材料を蒐集し奔放なる文字を遣りて一氣に之が顚末を叙述せるもの蓋し二百年來第一等の義士傳にして近來稀に見るの快著たり發賣以來好評嘖々版を重ぬること十數に及び昨春忝くも天覽の榮を荷ふに至れり今讀者の便を謀りて之を縮刷し所々大修正を加へ別に三章を添加して其不備を補へり

版元 東京市本郷區本郷一丁目七 電話下谷五八〇番 振替一二〇五五番 株式會社 啓成社

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

清風颯颯涼味横溢

文章世界

八月一日發行 **第拾壹號** 正價廿錢 郵税二錢

□文人分布系統圖（四國の文人） 孫悟空

■當今の文章家（田山花袋 金子筑水）月旦 天王星

□文壇人國記（裏日本の文人） 黑頭巾

■夏目漱石氏の小品 水野葉舟

◉短篇小説 田山花袋

◉新文章論 島村抱月

●露國の夏 八杉貞利

●佛國の夏 齋藤與里

●米國の夏 田村松魚

■**文界十傑投票募集**

新著五種

●正宗白鳥氏の「微光」……徳田秋聲

●北原白秋氏の「おもひで」……窪田空穂

●姉崎正治氏の「意志と現識としての世界」安倍能成

●人見東明氏の「夜の舞踏」……相馬御風

●秋田雨雀氏の「幻影と夜曲」……片上伸

▽わが生ひ立ち 佐々木信綱

▽紀行文家月旦 M M生

▽文範數項

山の 海の 湖の 川の 町の **印象**

徳田秋江 遲塚麗水 吉江孤雁 前田晁 田山花袋

東京本町 **博文館**

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

血湧き肉躍る死士の傳記也

報知新聞記者 鹿島淑男君著（新刊出來）

幕末史傳 近藤勇

幕末の歴史を彩れる新選組の隊長
男子中の眞男子たる近藤勇の傳記
青年諸君に薦むべき剛健なる讀物

洋裝美本 ◎定價四拾五錢・郵稅六錢◎

近藤勇！その名を聞くもの、誰か、虎徹の長刀を横へて比叡颪寒き京の都を濶歩せし意氣虹の如き關東武士の面影を髣髴し來らざらんや。勤王と佐幕と攘夷と、調和し得べからざる此三つの主義を抱きて自ら悶へ、遂に已むに已まれぬ武士の意氣地は、徳川氏の運命と終始せしめ了はんぬ。人を斬ることそも幾干ぞ。薩の健兒にも長の志士にも、彼の名は唯恐怖なりき。猛勇の中に機智あり、標悍の中に熱血あり、彼の生涯は不祥なる血の歴史にして、亦麗はしき任俠の歴史也。あゝ近藤勇！幕末の天下に鬼神の如くに怖れられたる新選組の隊長近藤勇！その面目と眞生涯とは此一卷の中に收め盡くされたり。武士的讀物に渇せる剛健なる青年諸君、何ぞ迅かに來りて此書を繙かざる。

東京神田駿河臺 **東京國民書院** 振替東京三千九番

注文殺到依て
更に五千部限

特價提供

裝幀の高雅優
美は天下無比

最新の畫集文粹
試驗後の最新讀物
歸省者の最好土產

高濱虛子輯
橋口五葉裝幀

さしゑ

三十六畫伯の最も新らしき試み
新樣式模範的繪畫二百十餘圖
二十八文士の寫生文、俳體詩、小說等名篇佳什二百數十頁

菊版四百五十餘頁
裝幀頗斬新美麗
天金箱入美裝
繪畫石版木版二百十餘圖着色畫共

畫伯				文士			
默語	柏亭	與里	千帆	子規	不折	露石	靜處
爲山	芋錢	青楓	朱冠	漱石	鼠骨	蘿月	拙夢
不折	五葉	千甕	樂堂	鳴雪	臼川	虛吼	蒼苔
不倒	百穗	月村	石鼎	虛子	露月	三重吉	格堂
象堂	與平	古泉	伊甫	文泉子	左千夫	藪柑子	彌子
外十六名				外八名			

特價金一圓八拾錢
正價二圓三拾錢
送料十二錢
內地外廿錢

東京堂支配人曰クドコガ善イカ分リマセン新奇ナ變ッタモノデスカラ最初見込ガ立タズ賣出シテ見テ驚キマシタ製本ガ間ニ合ハズ困リマシタガ人氣ニ投ズルト云フハ豪イモノデス云々此破天荒の景況こそ舊想を打破し新思想の奔騰にして本書の眞價を證して餘りあり

發行 東京本郷彌生町二 振替東京四一〇〇 光華堂 ｜ 賣捌 東京 東京堂 大阪 盛文館 吉岡

中央公論

秋期大附錄號豫告

從來十月一日を以て發行したる「秋期大附錄號」は今年より九月一日を以て發行することゝせり。附錄として寄稿を依賴せる名家は

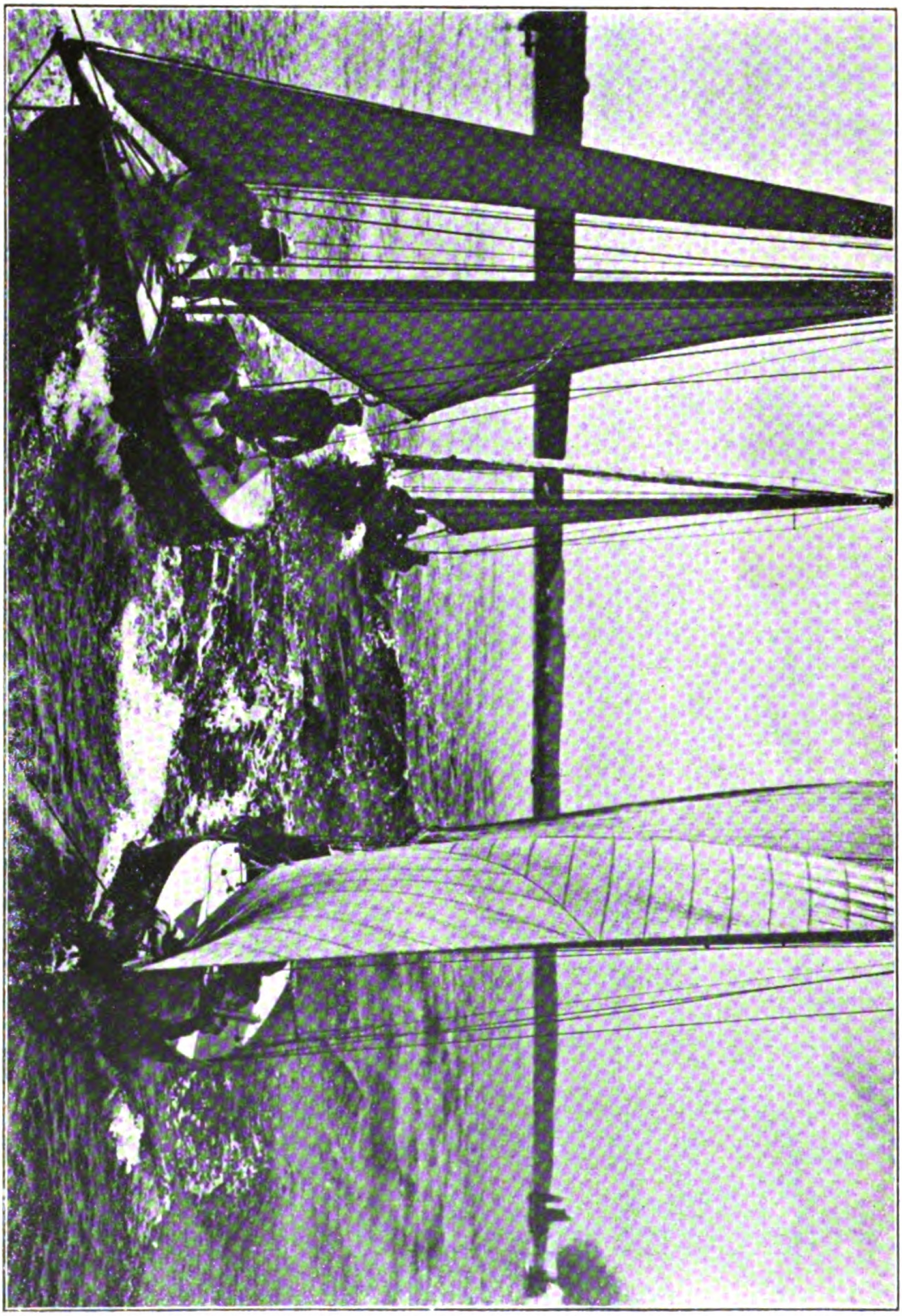
島崎藤村　小栗風葉
正宗白鳥　鈴木三重吉
田山花袋　眞山青果

等にして「論文」「說苑」及び「人物評論」にも第一流の人の筆に成る嶄新にして有益なる文字を滿載すべし。辛亥文壇後半期の光彩は、乞ふ之を本號にて見よ。

中央公論第二十六年第八號目次

「涼」十題

▲詞藻



中央公論



第二十六年
第八號
第二百六十九號

我の最高政治轉換の機

(一)

日英同盟及び條約改正成る

日英同盟は改訂せられ、同時に七月を以て期限とせる列國との諸條約は多く改訂せられ、然らざるものも當分最惠國待遇を得るとして、以て本條約の成立を待つの歩びとなりたるは、何人も慶賀せざるを得ざる所なるべし

吾人は此の機會に於て、我が日本の最高政治の方針を一轉するの必要あるとを唱へて、切に江湖君子の教を請はんと欲す

（二）

外務省は告示第四號を以て、明治二十七年七月十六日調印の日英通商航海條約、同年十二月調印の日伊通商航海條約、明治二十八年七月十六日調印の日英追加條約及附屬稅目、同年十月十九日調印の日丁通商航海條約、明治二十九年四月四日調印の日獨通商航海條約及び領事職務條約、同年五月二日調印の日瑞諸通商航海條約、同年六月二十二日調印の日白通商航海條約、同年九月八日調印の日蘭通商航海條約、同年十一月十日調印の日瑞修好居住通商條約、同年十二月二十二日調印の日白領事職務條約、明治三十年一月二日調印の日西修好通商條約、同年一月二十六日調印の日葡通商航海條約、明治三十一年十二月二十六日調印の日獨追加約定及び附屬關稅目、明治三十三年四月二十六日調印の日英死亡者の財產保護に關する條約、及び明治三十九年一月三十一日調印の日加修好通商航海條約は、明治四十三年七月十九日外務省告示第四號及び明治四十四年一月十九日外務省告示第一號の通、帝國政府より各締約國政府に對し發したる廢棄通告の結果、何れも本月十六日を以て終了せり、明治十一年十二月の日英難破船費用償還約定は、本年四月三日英國駐劄特命全權大使加藤高明と、英國外務大臣サー、エドワード、グレーとの間に行はれたる公文交換の結果、本月十六日を以て終了せり、又明治二十七年十一月二十二日調印の日本通商航海條約は、本年二月二十一日調印の日米通商航海條約の實施と同時に、本月十七日より失効せりと公示したり

是れ日米を最先に、日英、日佛、日獨、日諸の諸條約改正、並びに日瑞、日蘭、日丁、日加、日白、日伊間の

暫定取極の成立したる結果にして、此の暫定取極が本條約に代るの日は、即ち我が條約改正の全部成立したる時とす

前回の條約改正は主として法權を回復したりしに止まり、稅權は依然として之を收むる能はざりしが、今や之をも併せ得て、玆に完全なる改正を遂行し得たるは、國民の相慶して而して相祝する所たり、但だ稅權回復と共に、輸入稅率を引上げ、法外なる關稅を課したるは、心あるもの丶顰蹙する所なるも、稅權を我が手に收めて、名實共に完全なる獨立を得たるとは、義素より慶せざるを得ざる也、况んや輸入稅率を引下げんとせば、我れ自由に之を能くし得るをや

（三）

日英同盟は我が外交上の最要關鍵にして、又實に最高政治の由て發する所の源泉たり、更に適切にいへば、國家の榮辱、國民の安危の繫る所にして、國家國民の倶に運命を賭して全力を注ぐべき所のものとす、隨つて其の改訂に對しても、之を批判するに一點浮誇輕薄の所あるべからず、吾人は我が國の評論家中、動もすれば不眞面目のものあるを看て、先づ第一に之を戒めざるを得ざる也

此の同盟條約の改訂を考慮するに方つて、最も便なるは新舊兩條文を對照するに在り、試みに之を精讀せよ

新日英協約

協約前文

日本國政府及大不列顚國政府は千九百五年八月十二日の日英協約締結以來事態に重大なる變遷ありたるに顧み該協約を改訂し以て其の變遷に適應せしむるは全局の靜寧安固に資すべきことを信じ前記協約に代はり之と同しく

（イ）東亞及印度の地域に於ける全局の平和を確保すること

（ロ）淸帝國の獨立及領土保全竝淸國に於ける列國の商工業に對する機會均等主義を確實にし以て淸國に於ける列國の共通利益を維持すること

（ハ）東亞及印度の地域に於ける兩締盟國の領土權を保持し竝該地域に於ける兩締盟國の特殊利益を防護すること

を目的とする左の條欵を約定せり

第一條

日本國又は大不列顚國に於て本協約前文に記述せる權利及利益の中何れか危殆に迫るものあるを認むるときは兩國政府は相互に充分に且隔意なく通告し其の侵迫せられたる權利又は利益を擁護せむが爲に執るへき措置を協同に考量すへし

第二條

兩締盟國の一方が挑發することなくして一國若は數國より攻擊を受けたるに因り又は一國若は數國の侵略的行動に因り該締盟國に於て本協約前文に記述せる其の領土權又は特殊利益を防護せむが爲交戰するに至りたるときは前記の攻擊又は侵略的行動か何れの地に於て發生するを問はす他の一方の締盟國は直に來りて其の同盟國に援助を與へ協同戰鬪に當り講和も亦双方合意の上に於て之を爲すへし

第三條

兩締盟國は孰れも他の一方と協議を經すして他國に本協約前文に記述せる目的を害すへき別約を爲さゝるへきことを約定す

第四條

兩締盟國の一方か第三國と總括的仲裁裁判條約を締結したる場合には本協約は該仲裁裁判條約の有效に存續する限右第三國と交戰するの義務を前記締盟國に負はしむることなかるへし

第五條

兩締盟國の一方か本協約中に規定する場合に際し他の一方に兵力的援助を與ふへき條件及該援助の實行方法は兩締盟國陸海軍當局者に於て協定すへく又該當局者は相互利害の問題に關し相互に充分に且隔意なく隨時協議すへし

第六條

本協約は調印の日より直に實施し十年間效力を有す

右十年の終了に至る十二月前に兩締盟國の孰れよりも本協約を廢棄するの意思を通告せさるときは本協約は兩締盟國の一方の廢棄の意思を表示したる當日より一年の終了に至る迄引續き效力を有す然れとも若右終了期日に至り同盟國の一方か現に交戰中なるときは本同盟は講和の成立に至る迄當然繼續すへし

右證據として下名は各其の政府の委任を受け本協約に署名す

千九百十一年七月十三日倫敦に於て本書二通を作る

大不列顛國駐劄日本國皇帝陛下の特命全權大使　加藤高明　印

大不列顛國皇帝陛下の外務大臣　イー、グレー　印

舊日英協約全文

日本國政府及大不列顛國政府は一千九百二年一月卅日兩國政府間に締結せる協約に代ふるに新約款を以てせむことを希望し

(イ) 東亞及印度の地域に於ける全局の平和を確保すること

(ロ) 清帝國の獨立及領土保全並清國に於ける列國の商工業に對する機會均等主義を確實にし以て清國に於ける列國の共通利益を維持すること

(ハ) 東亞及印度の地域に於ける兩締盟國の領土權を保持し並該地域に於ける兩締盟國の特殊利益を防護することを目的とする左の各條を約定せり

第一條

日本國又は大不列顛國に於て本協約前文に記述せる權利及利益の中何れか危殆に迫るものあるを認むるときは兩國政府は相互に充分に且隔意なく通告し其の侵犯せらたる權利又は利益を擁護せむが爲に執るべき措置を協同に考量すべし

第二條

兩締盟國の一方が挑發することなくして一國若は數國より攻撃を受けたるに因り又は一國若は數國の侵略的行爲に因り該締盟國に於て本協約前文に記述せる其の領土權又は特殊利益を防護せむが爲交戰するに至りたるときは前記の攻撃又は侵略的行動の何れの地に於て發生するを問はず他の一方の締盟國は直に來りて其の同盟國に援助を與へ協同戰鬪に當り講和も亦双方合意の上に於て之を爲すべし

第三條

日本國は韓國に於て政事上軍事上及經濟上の卓絕なる利益を有するを以て大不列顛國は日本國が該利益を擁護增進せむが爲正當且必要と認むる指導監理及保護の措置を韓國に於て執るの權利を承認す但し該措置は常に列國の商工業に對する機會均等主義に反せざることを要す

第四條

大不列顛國は印度國境の安全に繫る一切の事項に關し特殊利益を有するを以て日本國は前記國境の附近に於て大不列顛國が其の印度領地を擁護せむが爲必要と認むる措置を執るの權利を承認す

第五條

兩締盟國は孰れも他の一方と協議を經ずして他國と本協約前文に記述せる目的を害すべき別約を爲さゞるべきことを約定す

第六條

現時の日露戰爭に對しては大不列顚國は引續き嚴正中立を維持し若他の一國若は數國が日本國に對して交戰に加はるときは大不列顚國は來りて日本國に援助を與へ協同戰鬪に當り講和も亦双方合意の上に於て之を爲すべし

第七條

兩締盟國の一方が協約中に規定する場合に際し他の一方に兵力的援助を與ふべき條件及該援助の實行方法は兩締盟國陸海軍當局者に於て協定すべく又該當局者は相互利害の問題に關し双互に充分に且隔意なく隨時協議すべし

第八條

本協約は第六條の規定と抵觸せざる限調印の日より直に實施し十個年間効力を有す

右十個年の終了に至る十二個月前に兩締盟國の孰れよりも本協約を廢棄するの意思を通告せざるときは本協約は兩締盟國の一方が廢棄の意見を表示したる當日より一個年の終了に至る迄引續き効力を有す然れども若右終了期日に至り同盟國の一方が現に交戰中なるときは本同盟は講和の成立に至る迄當然繼續すべし

右證據として下名は各其の政府の委任を受け本協約に記名調印するものなり

一千九百五年八月十二日倫敦に於て本書二通を製る

大不列顚國駐劄日本國皇帝陛下の特命全權公使　林　董　印

大不列顚國皇帝陛下の外務大臣　ランスダウン　印

韓國已に全然我が有に歸し、且つ日露戰爭終結せる以上、舊協約の第三條と第六條とは全く無要也、隨つて本協約全部に渉りて改訂の要ありしや言を俟たず、吾人の領解する所によれば、此の改訂交渉は、實に今春吾人の尙ほ綿衣を重ぬる頃より倫敦に於て開始せられしが如し

新協約第四條に就ては、世間の論議區々なるが如し、蓋し英米兩國間に概括的仲裁々判條約の將さに成立せんとするは事實なるが故に、他年若し日米間に開戰を見るも、日本は此の協約に由て英國の援助を得る能はざること勿論とす、是れ世上に多少の異論ある要點とす

然れども思へ、英國は能く米國と戰ひ得るや如何、他年萬一日米戰爭ありと假定せよ、英國は斷乎として日本と協同戰鬪に當り得るや如何、斯る場合には、第一に英領たる加奈陀は其の土壤相接せる米國と戰はざる可らず、即ち當の相手たる日本が遠く米國と戰ふよりも、先づ近く加奈陀の英軍と米國と相戰はざるべからず、是れ英國の能く堪ゆる所なるや否や、且つ英國全體の利害より視るも、米領比律賓に近き香港、新嘉坡、印度等が米國と相鬩爭することも、英國の必らず不利とする所ならざる可らず、況んや英米兩國は、人種、言語、文字を同くするに止まらず、其の經濟關係また幾んど相叛く可らざる地位にあるをや、故に日英同盟に第四條の除外例なきも、日米戰爭中、日本が英國の援助を期するは幾んど期す可らざるを期する也、日本にして苟くも米國と戰ふ意思あらば、何ぞ英國の援助を恃む可んや故に新協約第四條は、事實に於て我れに寸分の損益だもあらず、之を憂とするは寧ろ短見のみ

第四條を以て、英米仲裁條約の成立を承認したるは、寧ろ我が日本が米國に對する交誼を增進するものにして、米國は勿論、英國の好感情を誘起するの深きや言を俟たさらん、思ふに我が國もまた英國と歩調を齊しくして、竟に米國と概括的仲裁々判條約を締結するに至るべき乎、若し然らば是れ日英米の連鎖をして益々鞏固ならしむる所以也、日米開戰の如き不祥且つ愚劣なる不安の情意を一掃する所以也

明治卅五年以來再度日英同盟を訂したる英國の當局は、共に保守黨内閣にして、親露主義と稱せらるる自由黨内閣に至りては、却つて日英同盟を悅ばずと猜せられ、甚だしきは則ち英領殖民地の或るものは、切に日英同盟を好まずとさへ評せられたりしに、今や自由黨内閣に於て更に同盟を申ねて其の期限

を延長したるに止まらず、殖民地首相會議も亦日英同盟を歡迎するの事情明白となりしは、同盟の根帶をして益々堅實ならしむる所以にして、而して又世界少くも東亞の平和をして、益々安全ならしむる所以ならずや

（四）

吾人は此の機會に於て、我が最高政治の方針を平和の一點に定めて、鋭意邁進することを主張せんと欲す

惟ふに我が國の論者の多數は、主として平和を希望するよりも、寧ろ多く戰時をのみ考量したりしか如し、第一には清國と戰はんことを期し、第二には露國と一戰を期して、兩つながら其の計畫を過まらざりき、今やまた汲々として軍備擴張に鋭意す、其の心また何れかと一戰を期する乎、少くも戰ひの避くべからざることを豫期するものゝ如し

吾人の見を以てすれば、今や露國は日本と再戰する志あらず、假令之あるも容易に實行する能はざる也、彼れが今現に西伯利亞のみに五十四萬の大軍を駐屯せしめ、更らに歐露の軍隊を移送して、常時百萬の大兵を備ふるといふに視、且つ黑龍江鐵道を完成して其の歐露との輸送力を倍加せんとし、且つ浦鹽斯徳の要塞を殆んど根本的に修補する等に視るに、其の意恰かも日本に對して復讐戰を企つるものに似たり、然れども英國が嚴正中立を守れる三十七八年の當時ならば知らず、英國自から日本と協同戰鬪に當らんとする今日、露國豈日英兩國を敵として戰ふを得んや、陸上に於てこそ能く日本と相下らざる

を得べけれ、バルチック海面に於ても、浦鹽斯德方面に於ても、共に日英聯合艦隊の攻擊を免かれざらん、或は獨逸の來り援くるを庶幾する者ある乎、斯る場合は世界を化して戰亂の巷と爲すもの也、露國如何に野心に富めるも、豈之を敢てせんや、或は日米戰爭を夢想する者あり、然れども兩國相戰ふも勝敗を決するに至らず、隨つて一切の事を解決し得ざるのみならず、米國に於ける排日氣勢の如き更に益々之を增進するに止まらんとす、是れ無用に生靈を傷害するもの也、無益に民力を疲憊せしむるもの也、罪惡寧ろ之より大なるあらんや(本誌第二十六年第四號參看)

露國戰はず、米國ともまた戰ふ必要なくんば、我れは抑も何を標準として軍備に汲々たるべきぞ

彼の仲裁々判を以て單に國際間の法律問題を解決するに止まるものと做すこと勿れ、國家の名譽、利益をも擧げて仲裁々判に附すること、必らずしも不可能とすべからず、曾て天空飛行を不可能事としたりしより今は幾年ぞや、然かも飛航機の發明益々進みて底止する所なきを視よ、今より五十年百年の後は、恐らくは人間の天空を航すること、猶ほ今日海洋を航するが如くなるべき乎、仲裁々判もまた斯の如きのみ、仲裁々判にして能く至公至正、嚴格に義を秉り理を盡して是非を剖たば、國家何ぞ多く之に違はんや、國家にして苟くも權略又は强力を以て他の權利々益を侵犯し、己れ獨り利勢を壟斷するの志を懷かば已む、然らざる以上、竟に仲裁々判によつて紛爭を決するを便且つ正とするに至るや知るべき也、

或は曰く、英米の間には素より法律上の爭議發生することあらんも、容易に政事上の紛爭を惹起する

懸念あらず、唯だ日米間に於ては然る能はず、幾多の政事問題を有するを奈何せん、彼の米國內に於ける日本移民の排斥は其の一也、米國が南滿洲に於ける日本の利權を排斥し、殊に滿洲鐵道を中立とせんと提議せしが如きは其の二也、之を仲裁々判に附せんとするも、其の結果果して能く我が國民を首肯せしむるに足るや否や、米國にして若し意地惡く南滿洲より日本を驅逐せんと欲し、遼東半島租借期限盡き、南滿洲鐵道買收の期日至るを待ちて、清國政府を指嗾して之を日本に迫らしめ、己れまた此の間に突入して紛爭を捲起し、其の裁定を仲裁々判に仰ぐが如き場合とならば如何、凡そ此等の事情を想像するに、米國より日本に働き掛くべき政治問題は多きも、日本より米國に然かすべきものは幾んど一としてこれあらざるにあらずや、即ち英米仲裁々判條約の成立するが如く、日米間の仲裁々判條約また容易に成立すべしと做すは短見に過ぐと

然れども日米兩國にして眞に仲裁々判條約を成立せしめて、以て双互に平和康安を享受する誠意あらば、調攝の餘裕は十二分にあり、滿洲に於ける商工業の機會均等主義を切實ならしむる外、米國をして日本の南滿洲に於ける特殊の地位を承認すると、猶ほ英國の如くならしむるは其の一也、仲裁々判の範疇を限定し、其の領土權の及ぶ所に止まらしむるは其の二也、凡そ日米間にも仲裁々判條約の如きものを締結せんと欲せば、双方に隔意なく、充分の誠心を以て先づ滿洲問題の如き芥蔕を存せしむ可らず、必らずや相親和する誠意を以て事に當らざるべからず

米國政事家中には、日本の滿洲に於て懷く野心大にして、恰かも彼の明治三十七年以前の露國の如く、

封家長蛇の勢ひを成すものと誤解する者少からざるに似たり、是れ日本の行動一二妥當を缺くの結果のみに止まらず、又實に米人猜忌の致す所ならずんばあらず、去れば日本にして隔意なく滿洲に對する志望を打明け、且つ露國との戰爭に依て獲たりし特殊利權の外は、之を壟斷するの野心なきを明かにせば、米國政事家もまた釋然として我が心事を諒とする所あるべき乎、我が日本は既に朝鮮を領有せり、朝鮮の平和を支持するに足る以上、豈多きを滿洲に求めんや、有體に吾人の本心を打明けていへば、滿洲に於て我れは現狀を維持すれば足れり、現に我が手にあるものを有利に運用して、其の天與の利源を開發して以て人類のためにすれば足れり、向後の志す所は南進にあり、南方淸國及び南洋諸島に向つて我が商工業上の利益を開拓するに在り、侵略的壟斷的行動は、斷じて欲する所にあらざる也

我れ苟くも誠意を披攊せば、米國また奚んぞ渙然氷釋する所莫からんや、斯くして日米間にもまた仲裁々判條約を成立せしめば、玆に純乎たる日英米の提携成るべく、其の提携に由て世界の平和に貢獻すること偉大なるものあるべし、吾人は我が政事家及び識者が、此の方針を以て國民を指導し啓沃せんことを切望す

(五)

今や陸海軍擴張問題は、內閣最難最大の案件にして、總て其の必要を認めながらも、財源なきがために互に懊惱し煩悶するが如し、斯る問題に對して最高政治の基礎より判斷するとを爲さず、僅かに財源なしといふが如き低卑の見地より之を解決せんとするは、政事家として寧ろ不見識ならざらんや

吾人は茲に條約改正の事功略々成り、殊に日英同盟の更訂せられて、更らに向ふ十個年間繼續せらるに至り、然かも英米間の概括的仲裁々判條約成立を承認するに至れるを機として、我が最高政治の方針を平和の一點に轉向し、我れまた進みて米國と仲裁々判條約を訂せんとを望む、軍備擴張問題の如き、應さに堂々として此の大方針より決定すべきのみ

思へ、維新以降、西南役に於て先づ流血の慘を敢てし、次て清國及び露國と大戰し、未だ四十年ならざるに既に十幾萬の生靈を鋒鏑に殪し、十幾億の巨資を糜したりしにあらずや、幸ひに列國との條約改正成りて國光完く發揚し、日英同盟の更訂に由て國威益々高きを加ふ、宏謨正さに成る、之より一轉して平和の建設に鋭意するは、豈天地の化育を賛襄する所以ならずや、

南は臺灣を併せ、北は樺太の一半を領有し、竟に二千年來の懸案たりし朝鮮を併合す、謙は益を享け滿は損を招く、亢龍の悔あるを思はゞ、識者深く心するを要す、唯だ清國の前途最も寒心すべしと雖も、世界の大勢、列國の均衡は之を奈何ともすべからず、苟くも形勢の變に處して當然の措置を謬らず、享受すべきを享受すれば則ち足る、乃ち英米と提携し、露佛獨と妥協して、事を平和の間に定むるは、事の最も妙なるものならずや、軍備素より弛む可らず、縮少の如き殆んど思ひも寄らずと雖も、平和の大方針に進まず、却つて益々國民に重き負擔を強ゆるが如きは、經世家の執らざる所とす、國家の位地高くんば、外交の識また高からざる可らず、眼を最高政治に着くるもの、此の際大に悟る所なかる可らざる也

電車市有後の電燈市營論

（一）

歷史あり、又興味多かりし電車市有は、咄嗟の間に成立したり、吾人は聊か其の逕路を一瞥するも無要ならずと信ず、此の問題に就て、吾人が最も公平無私の見を支持して其の叙述と評論とを缺かざりしことは、世上の齊しく認知する所なるべければ也

六月廿七日尾崎東京市長は内相官邸に招かれ到りしに、平田内相、後藤遞相列坐の上、市にして電車を買收し經營するの志望あらば、左記の條件を以て政府之を認許すべきことを内示したりき

第一　買收價格及買收法

一、買收價格は明治四十二年五月卅日に於ける買收價格を市公債五分利付若干と假定して之に爾後買收の日に至る迄の建設費並に貯藏品の價格を加へたる額を最高限度とする事

二、會社所有の現金は引繼がざる事

三、買收代價は相當換算に依り現金を以て支拂ふものとす現金交付の時期は買收の日より一ケ年以内とし現金交付の日までは買收金額に年五朱の利を附するものとす

第二　特別會計

一、電氣及之に關聯する事業經營の爲め市一般の會計と分離して特別會計を設置すべき事

第三　市有後の組織並經營

一、市有後の組織並經營に就き具體的草案を以て綱領を定め提出する事

茲に於て市參事會は本月五日、電車並びに其の兼營事業の一切を市に買收するとを可決し、市長と會社と假契約を締結せり、此の契約によれば、本年五月卅一日の現在の財産目錄に於ける建設費、貯藏物品及工場勘定を合せ、金六千四百十六萬五千五百十八圓とす（會社の株式拂込金は四千三百五十萬圓）、但し會社の有する銀行預金八百一萬餘圓、有價證券百七十一萬三千餘圓、未收入金九萬五千圓、假拂金二千餘圓、現在金八萬五千餘圓、別途積立金八十九萬餘圓、準備積立金百十萬餘圓、合計千百九十一萬四千餘圓は會社株主の所有に歸すべし

東京市會は七月八九兩日開會し、右買收費中より廿五萬圓（加工費五十萬圓の半減）を節減して之を可決したり

市民中には素より反對者少からず、殊に新聞社等主となりて、屢々市民大會を開きたるも、竟に市有を阻止するを得ざりき

（二）

試みに電車を市營としての損得を計算するに、買收價格を公債に換算したる金額六千六百八十四萬圓と、市有後五ヶ年間に布設すべき未成線建設費一千六百七十萬圓とを合計すれば、八千三百五十四萬圓にして、是は總て外債に由るべく、而して其の利率五分とすれば、此の利息のみも、毎年四百十七萬七千圓に達すべし、若し又現在の線路、電線、車輛等に十分なる改良を加へんか、其の費額少くも一千萬圓を要すべくして、之をも外債に仰ぐとせば、其の支拂ふべき年利のみも四百六十七萬七千圓の巨額に達

すべし

然るに電車の收入如何といへば、最近の決算報告によるに、一ヶ年三百四十萬圓に過ぎず、但だ未成線完成の曉、既成線と同一歩合の收入ありとすれば、其の純益百八十萬圓強（尾崎市長は市郡兩部に跨る未成線八十哩に對し、一日の收入一哩百三十八圓五十六錢、營業費六十八圓に過ぎずとせり、故に之を基礎として算出せる也）にして、相合して五百二十萬圓となる、此の内より年利四百六十七萬圓を支拂へば、殘る所五十三萬圓に過ぎず、唯だ市營とすれば七十萬圓の税金を納付するに及ばざるが故に、之を合せて百二十三萬圓の剩金あるも、爾後の改良費其の他の準備積立金をも要するが故に、結局乘車賃を値上げするにあらざれば、幾んど公債元金を償還するに由なからんとす、市の理事者が向ふ三十年間に元利償還の成算ありと稱するが如きは全く虚僞也、然らずんば無計算也

（三）

現在の電車乘客は一億八九千萬人内外なり、未成線完成の後、假りに之を三億人とし、乘車賃一錢を値上げせば、一ヶ年優に三百萬圓を得べく、公債元金の如き、約二十年間にして完濟し得、然れども市が多くの反對論を排して市有を斷行したるには、乘車賃を引上げざるヿを以て最大條件としたりしが故に、此の一事如何にするも實行すべからず、必らずや他に利益を求めて以て公債元金償還の資源と爲さゞるべからず

吾人の私見を以てすれば、電車の副業たる電燈を市營と爲し、差向き東鐵電燈の經營を繼續するを可

とす、蓋し歐米先進國の實例を以てするも、將た我が國の例よりするも、電車は決して利益多きものにあらず、寧ろ其の副業たる電燈を兼營するを利とす、電燈の利益を以て電車の利益の少きを補ふを妙とす、電燈は本來甚だ有利にして、一の都會に於て三千燈を點せば、優に一割の配當を爲し得へしと稱せらる、況んや水力電氣を以て、極めて廉價に電力の供給を受け得らるゝをや

（四）

尾崎東京市長の説によれば、市は電車買收と共に東鐵の電燈部をも引繼ぎ、向ふ五ヶ年内に市部十五萬八千燈、郡部四萬二千燈、合計二十萬燈を完成し、其の點燈料市部は十燭光六十錢、郡部は四十錢宛として、其の建設費六百三十八萬圓は、向ふ十六ヶ年間に元利を完濟し得べしといへり

然れども東鐵電燈部は、明四十五年九月までに百萬燈（外に門燈十五萬燈あり）を建設する方針を以て、現に三十萬燈以上四十萬燈近くの豫約者を得たりといはずや、市は之を繼承して何等の差閊ありや、何等の損失ありや、若し差閊もなく、損失もなしとすれば、市は之を繼承して百萬燈經營を完成するを當然とせすや、何ぞ況んや之に由りて電車市有に要する公債の元金を償却すべき資源を得るに於てをや

今吾人の調査せし東鐵電燈部の經營豫額を玆に抄記すべし、是れは吾人の手を以て更らに責任ある電氣學者、技術家の查定を經たるもの也

東鐵電燈部は、定額燈を十燭に換算して五十萬燈とす、即ち實數は十燭二十五萬燈、五燭五十萬燈、

計七十五萬燈を以て十燭五十萬燈と算定し、外に從量燈を五十萬燈として、合計百萬燈に達する也、別に門燈十五萬燈あり、點燈料は十燭一ヶ月六十錢（尾崎市長既に六十錢と公言す勢ひ之に從はざる可らず）五燭四十錢、門燈二十五錢とす

更らに支出を算するに、十燭一燈の電力費一ヶ年三圓六十錢、補修營業費五十錢、税金九十錢、電球取替費六十錢（毎年三回宛）減損補塡卅六錢（一燈當り建設費十八圓として五十年償却の見込）賣掛代金損失五錢、計六圓一錢なるを以て、收入七圓二十錢を差引きて一圓十九錢の純益とす

之を標準として算出するに、從量燈は十燭一燈に付、支出月額卅一錢、年額三圓七十二錢、收入月額三十七錢五厘、年額四圓五十錢にして、差引純益七十八錢とす

五燭燈は支出月額二十五錢五厘、年額三圓六錢、收入月額四十錢、年額四圓八十錢にして、差引一圓七十四錢の純益とす

更に大體の收支計算を擧れば左の如し

收入

一金百八十萬圓　定額十燭二十五萬燈
　但し一燈月六十錢、年七圓二十錢

一金二百四十萬圓　定額五燭五十萬燈
　但し一燈月四十錢、年四圓八十錢

一金二百二十五萬圓　從量燈五十萬燈
　但し一燈月三十七錢、年四圓五十錢

一金四十五萬圓　　門燈十五萬燈

但し一燈月二十五錢、年三圓

一金十八萬圓　　晝間動力三十馬力

但し月五圓、年六十圓

合計金七百八萬圓

支出

一金二百十三萬三千二百五十六圓　　電力費

但し十燭廿五万燈分所要電力最大八千七百五十キロ

五燭五十万燈分所要電力最大一万キロ

從量五十万燈分所要電力最大四千三百七十キロ（四分ノ一點火ト見テ此燈數十二万五千一燈當り三十五ワット）

門燈十五万燈分所要電力最大二万三千八百七十五キロ

以上計二万三千八百七十五キロ外に線路内の消失外二割五分と見て總計三万千八百三十三キロ

此の負荷率四五と見て一日二十四時間に對し十時間八分とし此の割合より前記算出に基き計算すれば一日の使用量約三十四万三千七百九十六キロ、此の年計一億二千五百四十八万五千六百八十六キロにして一キロ一錢七厘の計算なり

一金九十二萬圓　　税金

但し十燭換算百万燈、外に門燈換算二万千四百燈、計百二万千四百燈分（一燈九十錢）

一金七十二萬圓　　電球費

但定額燈七十五萬燈分年三個宛として二百二十五萬個、一個廿錢として四十五万圓

從量燈五十万個、年一個半宛として七十五万個代十五万圓

門燈十五万燈、年二個宛として三十万個代、一個四十錢宛十二万圓

一金九萬圓　　電線路及需用家工事維持費

但資本金千八百万圓の二千分の一

一金五十萬圓　營業費

但し一燈當り五十錢と見込百万燈

一金六萬二千四百圓　配電所費

但し變壓所七ケ所の經費月額五百圓宛、六配電所月額二百八十圓宛

一金五十萬圓　減損償却

一金九萬六千三百二十八圓　豫備費

計　五百二萬五千圓

差引　二百五萬五千圓也　純益

即ち電燈經營を兼ぬれば、其の純益少くも毎年二百萬圓を超ゆ、之を以て市公債償却資源とせば、洵に甚だ妙ならずや、市理事者は何故に百萬燈計畫を實行せざるや、恐らくは未だ其の計數の委しきを知らざるならん、吾人故に煩瑣を厭はず、記して以て市理事者並びに世人に告ぐ、世人の多くもまた恐らくは市理事者と齊しく此の收支損得を知悉せざるべし

（五）

東京市が電燈を兼營せば、東鐵買收費の外、新たに一千六百萬圓の資本を投ぜざるべからず、東鐵電燈部は曩きに二千五百萬圓の資本を以て百萬燈計畫を立てたりしが、後に査定して一千八百萬圓としたりき、蓋し電線其の他の諸器械を獨逸より廉價に購入するの便宜を得て、其の建設費を殆んど半減近くに査定し得たりし結果とす、而して此の内約二百萬圓は既出費として市に引繼ぎたるが故に、市が百萬

燈計畫を遂行するため、新たに要すべき資本は一千六百萬圓にて可なるなり

此の一千六百萬圓を外債に仰ぐとせば、九十五圓手取として一千六百八十萬圓なるべし、而して其の五分利は八十四萬圓也、然れども電燈を市營とすれば、九十二萬圓の税金は不用にして、電燈の純益は實際二百九十七萬五千圓となり、此の内より八十四萬圓の利子を控除するも、尙ほ二百十三萬五千圓の純益あり、少くも毎年二百萬圓宛を擧げて市公債償還資源に振向くるを得

電車買收、未成線布設費を始め、改良費一千萬圓、並びに電燈兼營費一千六百八十萬圓を外債に仰ぐとせば、其の合計一億一千三十四萬圓に達すべし、然れども利益多き電燈をさへ兼營すれば、僅に四十年内外にて之を償却し得、若し此の兼營を廢し、若くは尾崎市長の言の如くすれば、電車買收に要する市公債は、全く償還の見込あらず、茲に於てか電燈兼營は、市に取て全く欠く可らざる必須事業たる也、電車を市有とせざれば則ち已む、苟くも市有とせば、電燈、殊に百萬燈の經營必らず實行せざる可らざる也

且つ電燈兼營に由て、市民の利を享くるとも亦頗ぶる大也、東京電燈は現に十燭燈一圓の月額を收め、彼の安田一派の創立せる新電燈會社も、一燈七十五錢を標榜せり、然るに之を市營とせんか、僅かに六十錢にて可なり、東京電燈も、新電燈も、勢ひ之と同程度まで引下げたるべからず、果して然らば、市民の利を享くる何ぞ甚だ小ならんや

普通に石油ランプは一臺毎月六十錢を要すとせらる、然るにランプと匹すべき、否其れ以上の光力を

する五燭電燈は、月額四十錢にして石油ランプより五割方安く、又石油門燈は終夜三十六錢なるに、電燈とすれば二十五錢にて足るといふ、市民の利を享くる何ぞ甚だ少ならんや、危險且つ面倒なるランプを全廢して、市内到る處に電燈を點するを得ば、市中啻だに不明域を現出するに止まらず、火災の禍もまた著るしく減ずべし、是れ亦東京市が電燈、殊に百萬燈計畫を實行するに由て得べき效果とす

市が電燈を兼營せば、東京電燈又は新電燈會社との競爭を難んずるものあり、然れども競爭の難さは其の點燈料金の引下にあり、市の繼承せんとする所は、幾んば最善を盡したるものにして、他は到底是れ以下に引下ぐる能はざる也、即ち競爭せんと欲するも得ざるのみ、競爭を難しとするは、畢竟するに杞人の憂に過ぎず

公論

我國民性に就て

法學博士　戸田海市

一

我國民性は古來社會團體に對して沒我的なりと云ふことに反對する意見を見ると、其多くは主義沒我の別を利己利他の別と同視するから起つて居る。余輩の主我沒我と稱するは個人が自己存在の價値を定むるに、之を自己自身の内に求めると、之を共同團體の内に求め、即ち團體の一分子として自己存在の價値を認めるとの、何れの傾向が強きやと云ふことてあり、決して利己利他と同意義てはない。例へば日本人は兎角依賴心の強き弊がある。然るに此依賴心なるものは多くの場合には他人の力に由て自から利せんとする利己心てあるが、同時に這は主我性よりも沒我性の特徴と見るが正當てあらう。日本人が世間の毀譽褒貶に一喜一憂することの甚しいのも、多くの場合には名譽を欲する利己心の作用と見ることが出來るが、同時に這は主我性よりも寧ろ沒我性の特徴と見るべきは曾て論じた所てある

主我主義の一大特徵は人格觀念や權利思想の發達することてあるが、我國には古來權利思想の甚だ缺乏して居ることは明白な事實てある。此思想が發達すれば一面には個人獨特の性格技能が發展し易きと同時に、他面には社會の規律が自働的に整ひ、所謂公德や商業

道德が進歩し、總て多數人の共同生活に於て自然に秩序が付き易いのである。然るに我國には此思想の極めて幼稚な爲め、共同生活の規律が亂れ易く、共同自治の制度が行はれ難く、常に團體主宰者の干渉を必要とするのである。是れ實に我國に於ける各種の共同團體が君主制的となる大原因である。日本人が動もすれば亂雜なる小鬩合を爲し、有力な主宰者のない場合には共同團體の規律の亂れ易いのは、日本人の沒我ならざるを示すものだと取る論者もあるが、余輩は彼我社會組織の差を論ずるに方つて、特に此の如き事柄をば沒我より起る結果と斷定したのである。若し各個人互に其領域を嚴守して妄りに之が侵害を許さないならば、亂雜なる小衝突は餘り起らない。其代りには深刻なる大衝突の起ることを避け難いのである。又權利思想と同じく正義や眞理を尊ふと云ふ思想も、沒我の內よりも寧ろ主我の內に發達し易いことは曾て論した如くであるが、西洋では權利と云ふ詞は正義と云ふ詞と同一である。然るに我國に於ては國利民福とか公利公益とか云ふことを離れて正義の爲めに戰ふとか、眞理の爲めに眞理を愛するとか云ふ氣分は古來缺乏し、從つて學問の研究も幼稚であつた。是亦我沒我性に原因する所大なりと信ずる。今日言論界の有樣を見ても、理屈を理屈として其當否を爭はず、直ちに忠奸正邪と云ふが如き公利公益上の標準より之を判斷せんとする、此の如きは主我よりも寧ろ沒我に伴ひ易き弊害と云はねばならぬ

論者或は西洋と日本とを對比して其間に主我沒我の別あることを拒み、第一に西洋各國民必しも皆主我的ならず、第二に日本人は總ての點に於て沒我的ならずと主張する。成程西洋各國にも主我的傾向に强弱の別あるは疑なき事實である。例へば英人は佛獨人よりも甚だ主我的なりと云ふが如きは、多く異論のなき所であらう。併し乍ら英佛獨等の何れを採て我國に比較して見ても、其間に存する差の大なることは、決して西洋各國間の差の如きものでなく、大體彼を主我とし我を沒我と見ざるを得ない。西洋各國の社會は程度に强弱

の差こそあれ、一般に主我性に根源する所の人格及權利思想に由て共同生活を處理し、其共同の方法としては多く共同自治の形を採ると同時に、一面には曾て論じた如く主我主義より出發した階級戰の激烈なるに反し、我社會の組織は亦曾て論じた如く何れも沒我の特徵を帶びたものである。

成程西洋の社會にも幾多の沒我的傾向が發動して居るが、這は畢竟主我より出發した相對的の沒我なることとは、恰も我國に於て見る所の幾多の主我的傾向が、一般に沒我より出發した相對的の主我なると同じである。一例を擧ぐれは輓近西洋に於て大なる勢力となつた社會主義的思想は、在來の個人主義に極力反對して團體主義を主張するのを見ると、如何にも沒我的傾向が強くなつたやうであるが、其實社會主義維持者たる下層階級の思想は、階級の異同を眼中に置かずして社會全體の公益を本位とする眞正の沒我ではなくして、特に下層階級の利害を眼目とする階級主義であり、此階級主義は時勢の必要上よりして從來の單純なる個人本位の代りに階級本位の形式を採つたのであつて、其根本の精神は依然主我主義であることは曾て詳論した。左ればこそ絕對個人本位たる無政府主義と極端の團體本位と見へる社會主義とが、同類意識を有して互に相提携することが出來、學者も亦此兩者を廣義に於ける社會主義中の種別と見做すのである。社會主義の目的は不都合な現在社會制度より根本的に個人を解放して、之を價値ある個人たらしめんとするのであつて、此目的を達する手段として沒我的色彩を帶ふること少なからざる團體主義を採へしと云ふのである。現代の無產者階級か階級戰を開始せんとする初期に在ては、孤立せる個人は何事をも爲すを得ざるに反し、團結せる群集は如何なる事をも成し得べしとの感を生し、切りに團結の必要を說て犧牲的獻身的精神を鼓舞し、一時は非常なる沒我的傾向を示すやうに見へたが、此の沒我なるものは前に述べた如く階級的なるが上に、個人の自主自由の憧憬は常に其奧底に伏在して居た。而して愈其團結運動が強大となつて着々成功し、一般勞

働者の地位が高まるに從つて、是まで奥底に潜伏して居た個人本位が益表面に現はれるやうになつた。特に從來團結が成立するは何事も意の儘ならざるなしとの信條も團結成立後次第に其の事實と一致せざることが明かとなるに從つて、勢力を減ずるに至つた。此例に由て明かなるが如く本來主我的傾向の強き西洋では、幾多の沒我的精神が活動して居るやうに見へても、常に主我より出發して又結局は主我に復歸するのである

次に一派の論者は我國民が種々の點に於て沒我性を現はすとは云へ、一面には主我の特徴をも少なからず示して居るから、之を稱して一概に沒我的なりと論するは不當であると主張する。併し此反對論は前に述た如く或は主我沒我の別を利己利他の別と混同したり、或は沒我の特徴と見るべきを主我の夫れと信じ、若くは後に論するが如く其主我的なる點は沒我より出發した主我即ち沒我的主我なることに注意せぬから起るのである。無論我國にも時に由り所に由りて沒我傾向に波瀾消長はあるが、大體沒我を以て貫いたものと見ねばならぬ。若しも論者の云ふが如く日本人は皇室に對すれば沒我となるが其他に對しては主我となり、一朝事ある時は沒我となれども平素は然らずと云ふが如く、慣習的便宜的に、場合に應じて或は主我主義を採り、或は沒我主義を採ることが出來るものであつたならば、本來此兩主義の何れも我國に於ては人心を支配する根源となる程の勢力はなく、從つて吾々も此點に關する研究に左程力瘤を入れる必要はないであらう。併し余輩は此兩主義を決して斯の如く輕いものとは信じない。世人も亦此點の可否の議論に非常の力瘤を入れるのを見ると、余輩と同じく之を輕視して居ないのであらう。一派の論者は一朝事ある時は大に沒我的精神を發揮し、平素は主我主義を採るへしと云ふが如き、臨機應變的の説を主張し、主義一貫とか內部統一とか云ふが如き要求は、閑人無用の穿鑿と見做すやうであるが、人生の意義を深刻に探求する現代に在て、此の如き主義に由り安心立命するを得ざる者は獨り余輩のみに止まらぬてあらう

二

主我沒我何れが可なるやの問題は到底理論の上では判斷が出來ない。理想的に完成すれば、双方共に立派なもので、且つ其結果は同一に歸着するのであるが、不完全な間は、双方共に種々の弊害が起る。其何れを採るが利多くして弊少なきやは各國民の性質に由ることとて、理論上一概に斷定することは出來ないと信ずる。故に余輩は初めより此の兩主義の可否を斷ずることを避けた。只だ從來西洋學説の勢力の下に在る我學界に於ては、一概に主我を可とし沒我を非とするの傾があるから、余輩は成るべく種々の方面より沒我の長所を指摘することに努めたのである。多くの論者は沒我を以て幼稚な主義とし、人類が進歩すれば當然主我化すると信ずるやうであるが、余輩は此點に同意することが出來ぬ。論者は我國に於ても維新以來漸次に家族制度や其他の舊來の團體制度が崩壊し、個人が此の如き團體の權威に反抗するに至つた事實を擧げて、是れ即ち進歩するに從つて主我化するの證なりと見るやうであるが、一面には維新以來忠君愛國思想の強烈に勃興したのを初め、新たに必要となつた社會組織に對して盛んに沒我的精神が發現しつゝある。沒我的の國民たりとて、必要の存せざる團體に盲從するものではない。沒我性が發達して慣習的より意識的となり、感情的より理智的となり、消極的より積極的となるに從ふて、不要有害となれば團體に反抗することも益強くなると同時に、必要有益と認めたる團體の爲めに盡瘁することも益大となるのである

世間或は現今の經濟組織が進歩すれば人類は當然主我的とならざるを得ないと云ふ一種の唯物觀を主張する者もある。唯物觀なるものの當否は暫く舍て論せず、現代の經濟組織の進歩は一面人をして主我的ならしむるが如く見へるが、他面には之をして沒我的ならしめる力もあつて、其の何れが強いかと云ふことは判斷が出來ない。一面舊式の家族團體や職業的地方的政治的團體は次第に崩れるが、他面には大なる社會團體との交通互助は日に益密となり、從つて個人の一擧一動が

社會より制約せられ、財産の如きは次第に公共團體の手に移るものが多くなり、各個人は益有機的に社會團體に結び付けられ、其有機體の一分子としての地位は益明白となるのである。特に昔時一般の產業は幼稚なる小規模の組織で經營せられて居たから、社會人口の大なる部分は皆獨立企業主たる地位を有し、自己の利益の爲めに活動したのである。然るに經濟の進步に伴ふて舊來の中小企業は倒れ、之に代つて少數なる大企業が成立し、又一面には鐵道國有電氣業市有等の如き公共團體の事業も非常に增加し、之が爲め人口の五六割以上は無產勞働者階級となつて、他人の事業の爲めに働くべき地位に立ち、又社會組織の中堅となりて思想界を左右すべき中等社會なるものも、以前の如く獨立なる中小企業主は非常に減じて、官吏會社員等の從屬的地位を有し、他人の事業の爲めに努力することを生命とする階級が重なる部分を占めるやうになつた。此經濟事情より斷定して將來の社會には沒我性か益强大となると云ふ說を立てる者も多い、特に在來の個人主義に反對する所の社會主義者の中には此說が最も多い。然し這は一概に判斷は出來ぬ。本來主我的な國民に在ては從來の偏狹なる小主我が進步して次第に高等なる社會我に向ひ、又本來沒我的な國民に在ては、その沒我が意識的理智的積極的に進步すると云ふが如く、國民固有の根本性自身が次第に進步すると云ふ見方が正當であらう（實業之日本第十四卷第十號參照）

㊂彼我社會の間に於て主義沒我の別あるは、決して今日に初まつたのではなくて古來より然るのである。古代に於て西洋の政治經濟等の組織が我國の夫れに比して著しく主我の徵候を示す所以を說明して、或學者は我民族が遊牧時代を經ずして直ちに農耕時代に入り、夙に團集生活を爲したに反し、西洋では久しく遊牧の生活を營み、從つて各個人が分散移動して團體の力が之れに及ばなかつたからであると論ずる。成程西洋に久しく遊牧時代が續き、現に今日も西洋の農業は飼畜が重要な部分を占めて居るに反し、我國には夙に農耕の開けたのは事實であるやうだが、只だ此の如き經濟

事情より彼我國民性の差を説明し得るやは疑問である。更に中世封建時代に入つて彼我の社會組織の間に主我没我の差の著しかつたことは曾て論じたが、尚ほ彼我の武士道を比較しても同一の結果に達するのではあるまいか。我國に於て武士が弱きを助くると云ふは、西洋の武士が婦人の保護に努めたのと、精神に於て相似た所があり。又双方ともに武勇を尊んだのも略ぼ相類する。只た彼に在ては主我性の背景を有すと認むべき正義、又は當時正義と多く同一に採られた所の宗教上の信條の爲めに戰ふとに甚だ重きを置きしに反し、我に在ては領主と領國の爲めに身命を捧けて忠義を盡すと云ふ、没我思想の働きに最も重きを置たことが、彼我武士道の最も著しき相違てはあるまいか。併し武士道に關することは未だ余輩の研究の及ばざる所であるから、玆には單に疑問として存して置きたい

　更に近世に入つて西洋ては人格及權利の思想は鮮明確强大となつて來たが、併し一面には主我主義より出發した經濟的階級戰の弊害も相伴ふて起つた。例之は産業革命に伴ふて生した勞働者階級の勢力が尚ほ微弱てあつた間は、資本家階級が極力之を壓迫して、到底吾人の想像し兼ねる悲慘の狀況に之を陷れ、所謂初期無産者的悲劇を到る處に呈したが、勞働者階級の勢力の加はるに從つて激烈な反抗運動が起つて來た。特に主我的傾向の最大な英國に於ては、初期無産者の慘狀が最も甚しかつたと同時に、勢力の加はりたる今日の勞働者階級は、大陸諸國に於けるが如く空漠たる社會主義的の政治運動に由らず、同盟罷工と云ふ現實的の破壞手段に訴へて非常に經濟界を震動せしめて居る。英國ては强大な同盟罷工が餘りに跋扈する爲め、英國の商工業は着々外國競爭業の爲めに地歩を奪はれつゝある。此事實は無論勞働者階級にも知れ渡つたことてあるが、彼等は一國の工業の盛衰問題よりも、自己の階級的利害の問題が一層重大であると云ふ階級戰の思想に沒頭して居るのである。現に昨今も故らに國王戴冠式の時期を撰び、國民が海上交通を最も必要とする機會を捉へ、船員の大々的同盟罷工を起し、現内閣の

極力實行に努めつゝある種々の社會改策の如きも、單に勞働者間に望蜀の念を強むるに過ぎぬのではないかと、人をして嘆せしむるが如き弊害を生じて居る。既に論した如く主我主義に免れ難き弊害は社會的勢力の分裂軋轢であつて、英國は世界中に植民地を有つて居ても、其植民地は皆分離的傾向が強く、其の全然獨立するは單に時間の問題に過ぎずと見做されて居る位であるから、大國であり乍ら國際競爭上の勢力は弱い。然るに我國の近時の有樣は如何と見るに、立憲政を立て、自治制を布き、親子夫婦の間までも權利義務の關係を定むると云ふが如く、外形的の制度を西洋と同一にし、特に英獨の如く封建の餘習を法制の上に存せず、全然之を一掃するの勇斷を爲したのであるが、而も事實に於ては人格及權利の思想は見るべき進歩を爲さず、若し幾分たりとも其の進歩ありとすれば、夫は何れも曾て論じた如く公利公益上各自の本分を盡す爲めであると云ふ、沒我より出發した主我であることを發見するのである。併し之と同時に産業革命の行はれつつある今日、何等の勞働者保護の制度なく、又實際勞働者の大部分は婦女幼者より成つて、無地位の甚だ薄弱なるに係はらず、曾て西洋に於て起つた樣な初期無産者的の慘劇は殆んと現はれず、又勞働者間に何等見るべき反抗運動の起り得ざるに係らず、不完全ながらも工場法さへ成立したのである

三

此の如く彼我の間に主我沒我の差は古來より存するのであつて、到底之を根本より一變することは出來ないと信ずる。政治上の制度の如き外形的のものに付ては、革命を起して一朝に之を改造することが出來ぬではないが、古來よりの國民心理と云ふが如き事柄は根本より之を變更することは出來ぬ。我國民の沒我性は矢張り沒我として次第に完全となると云ふが如く、固有性夫れ自身の發展（エヴォリユーション）することは出來るが、之を一抛して根本より西洋流の主我主義とする革命（レヴォリユーション）は出來ないと信ずる。然らば此沒我主義をば如何にして時勢に適するが如く

發展せしめ得るやが今日最も大切なる問題である。凡そ今日急務と稱せらるゝものは多くあるが、沒我の短所を歐米の主我の長所に由て補ふことほど急なるものはない。這は單に余輩一個の所信ではなく、國家の方針としても夙に斯く定まつて居る。即ち個人に獨立平等の人格を認めて其間の關係を權利義務として處理し。立憲政や自治制を布き、其他種々の組合團體の發達を助けて共同自治を獎勵して居るのは其證據である。而して從來多くの學者が西洋文明を採用するの方針として、之を西洋流其儘に取り容れんと企てたから、今日の如き不結果に了つたのである。沒我的傾向の强き我國に於て、個人の權利利益の主張は夫れ自身に道德的の行爲であると說明しても、我國民は衷心斯く感ずることは出來ない。我國民に取つては今尙ほ人格や權利の主張は夫れ自身には殆んと嚴肅な道德的意義を有して居ない。故に豫て論じた如く我國で人格や權利の思想を取り容れるには、今の世に在ては個人の人格權利を尊重するとは、公利公益の命する所であると云ふ主意を廣く國民一般の間に透徹せしむるの方針を採り、我國民の沒我性を根據として之を消化すると云ふことにすれば、此に初めて權利利益の主張が我國民に對し嚴格なる道德的意義を有し、從つて其主張も之に對する尊重も共に健全に發達するであらう。否な現に今日幾分發達して居る人格權利の思想は此の如き沒我より出發したる主我である。然るに今ま西洋流の學說に由て此の如き相對的の主我思想は不當である、是非西洋流に個人を本位として萬事之れより出發すべしと論ずるのは、獨り効力のない斗りでなく、却て我國民に人格權利の思想の發達することを妨げる結果となるのである

此の如く沒我より出發して相對的の主我主義を採ることが、我國に於て健全有効に西洋思想を攝取するの方法である。此方法こそ西洋流其儘の輸入よりも我國では一層西洋思想に忠實なる所以であり、同時に西洋思想に伴ひ易き短所を避けることが出來る。余輩が沒我を主張するのを見て、世間には余輩を以て時勢に不

適當となれる舊慣故格を何處までも維持又は復活すべしと主張する保守論者と同類なりと直斷する者もあるが、其實余輩は實際我國に於て可能有効なる歐化主義を主張するのであるから、最も強く復古主義には反對するのである。復古主義に付ては經濟政策上より年來反對して居るのであるが、如上の誤解は恰も余輩が我國民經濟發達の方針として、從來の西洋技術の直寫模倣主義に反し、固有産業の進歩に重きを置くへしと論するのを見て、直ちに余輩を舊式の中小企業維持を主張する復古論者の一人と誤認すると同樣てある。若し我國にして麵麭と肉を食ひ、洋裝して洋館に住ひ、其外生活上萬事西洋と同一となることが出來れは、西洋技術を其儘模倣して我か萬般の需用を充たし、經濟を發達せしむることか出來るてあらうが、實際我國民は獨特の生活慣習を有して居るから、今日の如く歐米の技術を其儘模倣しては、僅かに電氣や瓦斯や紡績の如き小數工業のみ現代的面目を具へるに止まり、到底も我經濟の眞正の發展は望まれない。故に何より先きに酒味噌醬油家具家財等、一切の固有産業を現代的の大企業とするに、西洋技術の原則を我か特有の産業に應用するの工夫を爲すへしと云ふのてある。故に此方針を實行するは在來の中小企業は大部分倒れて現代的の大企業が之れに代はる結果となるから、今日の如き直寫模倣主義よりも遙かに強く復古主義に反對するのてある。要するに余輩は物質的精神的兩方面に於て飽くまて進歩主義を主張するのであるが、只た一般進歩主義者が何事も西洋其儘に模倣改造せんとするのを無効又は有害なりとし、日本特有の事情に基ける進歩主義を取るへしと云ふのてある

世人は往々革命と云へは危險であるが、復古と云へは只た因循なものゝ如く信するやうてあるが、其實兩者共に社會の自然の進運に反する强制を加うるものてあるから、其性質は等しく破壞的と云はねはならぬ。又其効果に付て見ても兩者共に其目的を達する能はすして、徒らに社會力を消耗するに止まる。只た復古は過去の歴史に葬られた狀態に向ひ、革命は未た存せさ

る新狀態に向ふの差あるのみてある。一體此の如き極端な思想は互に因となり果となつて勢力を得るものてある。故に革命思想か起つたから、之を牽制するか爲めに反對の復古主義を盛んにすると云ふか如きは全然失敗の政策てある。此事は輓近の獨逸墺太利等の經濟政策を見れば明かてある。一面に復古主義が盛んになれは、他面に革命主義は益跋扈する。假令へ一時は此の如き牽制策か效を奏するやうに見へても、久しからすして激烈なる反動が必らす起つて來る。故に極端な思想の跋扈を制するの方策は、反對の極端を以て之に向ふのてはなくて、穩健中正な思想を發達せしむるの外はない（拙著工業經濟第十章第一節參照）尙ほ今日の復古論者は根本の精神と外形とを混同するの過誤に陷り易いやうてある。例へば維新の際に在來の武士道こそ唯一眞正の大和魂てあると信じ、大和魂を是非とも保存せねはならぬと云ふ見地から、武士道を產んだ封建制度の廢止に反對したならは、到底大和魂を發揮して長足の進歩を爲し、我國をして世界强國に伍せしむることは出來なかつたてあらう。國民性を發達せしめんとすれは、時勢に必要となつた新なる形式を採用して盛んに國民性を活動せしめねはならね。若しも時勢に不適當となつた舊き形式を之れに强ゆるときは、其活動を止めて之を萎縮衰退せしめるのてある。此の如きを稱して自殺的政策と云ふへきてある

四

終りに臨んて一言注意したきは、余が是まて國家と云ふことに重要の意義を附したことに付き反對する多數の人々は、我國に於ける國家問題の意義に付き余輩と見解を異にする點なきにあらすやと云ふことてある。西洋て國家と云へは大なる白人世界の內に於ける小區分たるに過ぎない。從來白人世界は政治的宗敎力の力に由て屢統一せられ。今日も各國民個人間の交通出入は頻繁自由てあり、特に米國其他の新開地に行て各白人國民は大なる白人共同社會を作りつゝある。然るに我國民は古來異人種との接觸か少なくて常に獨立したのみならす、世界的に膨脹發展するの運に向つた

今日に於ては、世界到る處に於て天與の富源に富める白人先占地より排斥せられ、白人國相互に認むる移住膨脹の權利を獨り我國民に對しては拒絕せらるゝに至つた。世界人類の共用に屬すへき公海上の海獸漁獵權の制限と云ひ、我國の當然の利權範圍たるへき滿洲に關する四國借款と云ひ、共に人種的偏見を脫したる公平の精神より出たものと云ひ得へきやは疑問てあらう。加之我國民は常に己れを低ふして白人世界の利權を尊重するの態度を採るに反し、白人國よりは常に平和を攪亂するか如き挑發的態度を採つて居る。實に吾人は今や白人世界の包圍攻擊に陷り、其包圍線は日に益緊縮せられつゝある。吾々は最早や人間到る處青山在りと稱することは出來なくなつた。今日地球上僅かに五千餘萬を算ふるに過ぎさる大和民族は、此の如き包圍の內に在て果して能く八千萬となり、一億となり、人類發達上有力なる貢獻を爲すの民族となり得るやは大なる疑問てある。斯く八方より包圍せられては、我國の經濟か發達せすして生活難の日に甚しくなり、遂に國民の元氣の沈衰を來たさゝるを得ない。由來個體としてよりも國體として强き日本人か、此の如くして人口の膨脹を妨けらるゝの苦痛は甚大てある

此の如く西洋て國家問題と云へは大なる白人世界に於ける小問題てあるとしても、我國に於ける國家問題なるものは同時に重大なる人種問題てある。彼我國家問題に此の如き差別あるを見ずして、彼の國家思想を其儘直譯的に我國の議論に應用したり、又は今日白人の世界的人道的思想と稱するものは、其實支那人の中華思想に相類し、未た全く白人世界間に限られたる偏狹の域を脫し得さるものなるを知らす、之を以て人種の異同を認めさる眞正の世界思想の如く誤解し、無條件に彼等の世界平和主義と稱するものゝ實行に贊成するか如きは甚た危險てある。主我主義を採ると沒我主義を採るとを問はす、我國に於て對外關係上國家問題を論するに方ては、常に其が同時に人種問題てあるの事實を忘れてはならぬ(法學志林牧野博士紀念號掲載拙稿國家問題と人種問題參照)

本年一月より四月の「太陽」に於て公けにした我國

民性の研究に對し、其後談話に手紙に演説に論文に、種々の示教啓發を蒙つたことは深く感謝する所である。總て此等の批評に對する意見は、曾て京都日出新聞記者の請に應して話したのが、五月八日より十日の同紙上に掲載せられたのであるが、本誌に對する文責の督促急なるに會ふて、此に再び略ぼ同樣の趣意を述へることにした

教育の内的改良の唯一方法

山本良吉

松本(文)博士は昨年高等學校入學受驗者の成績について文部省が調べた材料を基礎とし、我國中等教育の現狀を批評せられた。博士が發表せられた事實を、卒然見たり聞いたりすると、いかにも異樣な感じがするが、さてあれについて最も驚くものは、大抵は中等教育に緣故の少い人々であつて、多少其内情に通じたものは當り前の事として別に怪しいとは思はない。況や中等教育者自身はさも豫期した結果が見はれたものゝ樣に考へ、たゞ又かとうなづく位に過ぎない。世人は中等教育者の責任とか何とか騷ぎ立てるとも、中等教育者自身はあの事實に對して何等の責任を感じない。凡そ責任の念は、本心から自己の行爲であると認める事に對してのみ起るべきものである、器械的運動や反對運動に對しては何等責任の念が起るべきでない。今の教育者は丁度絶えず外部の力に左右せられて動かされ居る感じをもつて居る。その日々學校でして居る事を、決して全部自己の本心から出た事とは考へない。軍隊では上官の命令に從つて爲した動作に對しては、彼、

令者には責任がない事となつて居る。教育界にはかゝる規定はないが、責任の性質上さうなくてはならない。平生は器械的に働きながら、其結果について責任を負へといふ、これは無理な注文といふものである。

松本博士の擧げられた點は、主に教授に關する事柄であつたから、便宜上中等教育の教授に關する方面について言つて見るならば、凡そ教授の原則として、授ける事柄はすべて生徒が消化し得べきものと豫定しなければならない。消化の出來ない事柄を教授すべきでないことは明瞭である。然るに今中等教師が實際に教授して居る事柄には、其量に於て、質に於て、生徒がどうしても消化し得ないものがいくらもある。教師は明に夫を知つて居り、それを外部に對して發表することを少しも恥とは考へない、而も尚其教授を廢止することが出來ない。畢竟中等教育は生徒の內的必要に應じた事柄より以外の事物を授けねばならぬ事となつて居る、かゝる事柄に對して教師がどうして責任をもてやうか。

一體學校の教案とか要目とかいふものは、すべて生徒の內的要求から發しなくてはならぬことは明かである。而も其內的要求といふものは一寸測定に困難であり、たゞ長い經驗で自然に判つて來るのみである。我國の樣に長い中等教育に經驗のない國が、卒然中等教育を始めやうとするには、取るべき途はたゞ一つ、歐米先進國の制度を翻譯的に取り込むのみである。これは獨り中等教育に限つたことでない。我國學制全部そうであり、廣く言へば我國法制全部そうである。明治の法律と我國民性との扞格は近頃漸々學者の注意する所となつた。獨り法制のみならず、社會の新事業といはるゝものは皆此流義で出來て居る。明治の四十年はたゞ擧國一致して歐米の翻譯に從事した時代とも見られる、之を體裁善く言ひ表すと、先進文明の吸收時代であつた。しかし一社會が他の社會の經驗を其儘吸收するには、之に必然伴ふ所の形式がある、夫を一言で悉せば形式的である、表面的である、淺薄である、ごまかしてあるといふ事に歸着する。明治の文明はどの

方面を見ても此傾向をもつて居り、此弊を受けて居る。敎育も勿論此弊を受けて居る、中等敎育も決して之に對して除外例を要求しない。

某々の學科が某々時間授けて某々の事項を了れよといふ。敎師は一意其規定を遵奉して之を實行する。之を實行しなければ職務に不忠實となる。忠實な敎師は一生懸命に規定の實行の爲に盡くす、而もその盡くすは單に合法の爲であつて、生徒を善くする爲ではない。どの組にも相當の優等生もあれば劣等生もある。敎師は其中の一人でも二人でも明りさへすれば夫で任務を盡したものと考へて、ずん／＼進む。進まなければ規定の實行を滿足(！)にすることが出來ない。即ち規定の實行といふのは、單に形式的である、表面的、申譯的である、何等の主義がない。自分は此ういふ事を言ふのは決して中等敎師を非難する爲ではない、實に之に同情する餘りからである。自分は十年斗り敎授を監督する位置に居つた。大抵の敎師は、その敎へた事が何程生徒に反應あるべきかは餘り考へない、役目としてだゞ敎科を通過するばかり、夫を改良せよと勸めても、敎師自身の力では其改良を實行し得ない事情がある爲に、常に殘念には思ひながらも其儘に目を眠つた。

敎授の方面のみでも斯うである、況やかゝる敎授が訓練上に及ぼす影響については論ずるまでもない。正直に言へば今の敎師には自分の敎授が生徒の品性に如何なる影響を及ぼすかを考へる人は極めて少い。考へる餘裕がないと言はうか、必要がないと言はうか。夫が即ち形式的活動に必ず伴ふべき淺薄、表面的といふものである。形式的活動に慣れた我社會は、亦深い品性問題などには餘り注意しないで、その要求する所の德も亦極めて形式的表面的であり勝ちである。某々ありふれた德の名を以て來て、夫さへ意識的に持つて居れば、夫で現代の善人と言はれるかの如くに考へて居るらしい。而して夫等形式的性質又は德を養ふに亦極めて形式的方法を強ひ、何だか人間を人形視して居るのではあるまいかと考へられる節も往々なきにしもあ

らずである。夫て中等敎育の內容が更に充實しやうとは一寸考へにくいのである。

內容の不充實は明治社會の通性として種々の方面に見はれて居る。四十年の飜譯的吸入主義の結果、今ては製造工業などには大分歐米の發明品が使用せられる。あちこの會社にもこゝの工場にも石炭の煙は上り、機關の音は聞える。然るに不思議な事には、其使用せられて居る機械は多く歐米其儘の式であつて、その製出する物品も亦歐米風の生活に適するものを主とする。我國民の日常生活に必要な物品はまだ一向に新工學の御蔭を被つて居ない。下駄の表にセルロイドは用ひられるが、下駄其物は尙手で以て削られる。一尺斗りの木の片二つが一圓もする。捺染式の染方は段々採用せられるが、かすりの染方は多くは依然舊式によつて居る。歐米工學の知識を我社會の實用に適應する事はまだ一般的に考へられないのみならず、學者の中には大會社の機關については講義するが、日用の竈の改良を設計するのは俗な仕事と心得るものさへある。新知識新學問はたゞ社會の表面のみに採用されて、贅澤を進め生活難を增すことはあるが、國民の眞の要求を滿たすには尙前途遼遠である。此意見は京都大學の戶田博士が最も熱心に而して一貫して說かれる所であるが、之と同じ事實が敎育界にも見えるのであつて、其結果が中等敎育の內容不充實となつて見はれ來るのである。

さらばどうして中等敎育の內容を充實せしむべきであるか。問題は單純である、敎師をして、敎育は自分の仕事であると思はせる、此外には何等の方法もなく又其必要もない。敎育の對象は生徒である、生徒の知情を進め品性を高め固める外には敎育の目的はないのてある。敎師は自ら全責任を以て之に當り、種々の硏究を遂げ、種々の方法を試み、實際に生徒を取り扱ひ行く上から止むを得ず自然に湧き出る方法、之が卽ち眞の自發的方法であつて、此る方法が積つて其の國民的敎育が確立するのである。然るに實驗せられる生徒も、實驗する敎師も、各特異の個性をもつて居るから、

其間に案出せられる方法も決して一樣には行かない。其一樣に行かない種々の方法が併行して研究せられる所、そこから眞の進歩が來るのである。もし社會の要求が餘に抑迫的であつて、一から十まで一定の型に入れなければ止まぬ樣であるならば、個性的の方法は到底試みることが出來ない。其結果、現今の形式的方法の外へは一歩も出ることが出來なくなる。內容からいへば飜譯的に、併し順序よりいへば創作的に諸規定を考案するものは、常に其案が試驗せらるべき性質のものてあつて、何等確定したものではないことに注意し、聊にても其實行を强ひる樣な態度を取つてはならない。改良する爲に出して見た案が、絕えず改良を要するのは勿論である、而して夫を改良するものは、たゞ實地に當つて夫を試みたものだけてなくてはならない。實地に當つたものの意見は如何に立案者の意見と異るとも、兎に角一部の眞を含んだものとして是認しなければならない。是が眞の日本敎育の死活問題てある。社會が此態度を取らないて、飜譯的案の强行を要求し、又は夫て滿足して居る間は、眞に我國の要求に應ずべき日本敎育は終に發生は出來ない。

敎育視察の任に當られる方々は、敎育法令が如何に完全に實行せられるかを視るよりも、其實行の結果がどうてあるかに注意して欲しい。夫が本當に出來れば、今度の樣な高等學校入學試驗の成績が表はれても、少しも驚くには値らない。あれは中學校內ては十年も前から明り切つた事てあり、あれを少しても良くしたいと思つて、少數の敎育實際家が今まて種々の意見を發表したのである。視察の方法は規定の實行者に注意するよりも、規定より多少ても異つた方向に進まうとする學校に注意し、夫を禁遏する代りに其發育を指導加勢して欲しい。新傾向の發展には往々熱があつて思慮が足りない、從つて周到なる考察に於て缺くる所がある、夫等の點に注意を與へるのが實に視察の方々の最も大切な任務てある。規定が實行せられるか否か、下級の吏員二三名を派したらば直ぐ明ることてある。敎育視察は本來今少し根本的て敎育的てなくてはなら

ぬ。學校を選奬するにも亦此る方針を加味し、眞に敎育の爲を思ひ、規定に死守するよりも生徒即ち國民の眞の利益を計らんと勉める者に對して、特に深く注意を拂つて欲しい。地方官などが無闇に統一を希望し、各學校の個性發達を妨げる樣な態度に出づる場合には、敎育當局者は嚴に夫を否認し、常に敎育者の味方となつて欲しい。敎育の發展は微力な敎育者だけではとても遂行はできない。

然るに此日本的敎育を確立するに多少妨害とも感ぜらるゝは、上述翻譯的勢力の外に尙一つの勢力がある、夫は敎育其物から見ると同じく外道的であつて、名をつければ、學者的勢力とでもいふべきものである。是は他の方面にもあるかは知らぬが、他の方面では無用又は有害な意見といふものは大抵久しからぬ中に其眞價を明らさまに暴露するが爲に、自然陶汰を受けて消え行くのが常であるが、敎育界では無用も有害もさう容易く早くは證明せられぬ爲に、往々不正當に勢力を保つのである。例へば中學校の敎授要目といふものについて見ても、實際敎育者の立場からは到底實行したくないものが、立派に規定せられることがある。敎育上からは其必要はどうしても說明が出來ない。そこで原因を探ると。案外にも一二の學者が我佛尊しの主意から激しい意見立てをした結果であるなどの風說が傳はることもある。自分はこゝで要目の內容について論ずる考はないが、要目などいふものは全然中等敎育者自身が作るべきものである。中等敎育者以外に誰が中等敎育の內容が明るか。其立案の際、學者一人や二人は加へることもよからうが、最終の判斷を下し得るものはたゞ中等敎育者のみでなければならず、又外に誰もあり得ないのである。專門敎室內に閉ぢ籠つて自分の專門しか注意しない人に、どうして敎授要目編成といふ樣な大任が托せられるか。我敎育の內的發達を遂げる爲には、種々の意見は之を聽く必要は勿論ある、而しながら之を聽く人は敎育者自身でなくてはならない、敎育者自身から最終の判斷者たる位置を奪つた方法は、すべて敎育の內的發達を阻害する。

自分等は翻譯的勢力も學者的勢力も共に教育の進歩の必要素であることは決して否認しないが、同時に之れを改良し整理して始めて眞の日本教育が出來るのであり、而して此大任は全然教育者自身の双肩にかゝつて居るのであることを何處までも主張する。社會が教育に注意し之を指導するのは如何にも結構であるが、其指導の熱心が一定の度を超えると、抑迫となり干渉となり教育其者の自滅か枯死となるのである。指導といふのは當事者をして自己理想を認めしめ其爲に盡すの努力心を興起せしめる意味である。理想其物を指導者が與へ、かく／＼の工合に努力せよと迫るに至つては、人形釣りが自分で舞臺へ飛び出したと同樣、斯うなると被指導者はたゞ其指導に一任し、之に盲從し盲動するのみである。指導に宜しきを得ぬ事があつても、之を改良せねばならぬといふ努力心は出ない。自分は他人の指導の下に從ふのみで、事の是非は關知する所にあらずとすましこむは當然である。現今教育界の内情を見ると、いつも此感に堪へない。かゝる精神狀態にある者に向つて、其成績の良否を論じても何等の痛痒を感じ樣筈がない。自分は中等教育界内に十年も居つて、界内のものゝ進取力研究的態度の少いのに絶えず不滿の念を抱いたが、教育者だつて馬鹿ばかり居るわけでもなく、自分の爲して居る事の成績の分らぬ人ばかりではないのに、此の狀態を脱し得ぬのは、結局指導の方法其多きを占めると斷定せざるを得ざるに至つた。人を信ぜぬ會計法はたゞ表面を塗抹する方法を教へると同じく、人を信ぜぬ教育法規は、たゞ形式を整頓して置くことのみを教へる。其結果は一寸した高等學校の入學試驗にも見はれるが、併し眞に見はるのはまだ／＼畏ろしい方面であつて、而も人知れず見はれるのである。

世人は絶えず今の教育を受けたものが間に合はぬとか實際的知識をもたぬと非難する。夫は幾分事實であらう、而も其原因は何處にあるか。間に合ふ人を造るものはたゞ間に合つた人である、實際的知識はたゞ實際的知識をもつた人の授ける所である。自己以外の意

志の指導の下に盲動すべく餘儀なくせられて居る者に向つて、間に合へよ、實際的知識をもてよと要求するのは、果して正當であらうか。中等學校が遊民を造るといふのは隨分聞えた非難である、而し教育に對する社會の態度が全然一變しなければ、遊民の數を減ずるのは困難である。

本年の高等學校入學試驗も近づいた。昨年と同一の現象はまた今年も現れるであらう。事實は最大の掲示である。教育界が心中深く含んで言ひ得ない事を、事實は無遠慮に發表する。（四四、七、二）

日英新協約を評す

法學博士　戸水寛人

日本と英吉利と初めて同盟した當時に於ては、日本も之によつて利益を得、英吉利も亦之によつて利益を得た。即ち當時露西亞は朝鮮に於て跋扈して居つたが、日本は英吉利と同盟した爲めに幾分之を抑へ附けることを得たのみならず、日露戰爭も實は日英同盟のあるが爲めに出來たのである。假りに日英同盟が無いとすれば、日本の當局者は到底日露戰爭を初め得なかつたらうと思ふ。

英吉利も亦日英同盟が出來ると共に、ヤングハスバンド大佐をして兵を率ゐて西藏に入らしめた。若しも日英同盟が出來なかつたならば、かゝる大膽なる行動は取り得なかつたに相違ない。加之、當時印度の防備が不完全なるが爲めに、英吉利人は非常に此事を心配して居つたが、日英同盟が出來たによつて、初めて枕を高くして眠ることが出來た。印度の境界についていへば、露西亞は北から印度を攻撃することは困難であ

るが、西北の境界から攻め入ることは甚しき難事てはない。露西亞は此攻撃の事については苦心慘憺、これまていろ〳〵の準備をした。其一端を擧ぐれば、中央亞細亞の一ステーションたるメルブには印度攻撃の材料を澤山に備へて居る。且つ又鐵道の軌道なども貯蓄してあると噂せられて居る。中央亞細亞を旅行する人に之を見せることは露西亞が絶對に嫌ひ、又自國人にも自由に此處に入ることを許さぬから委しい事は分らぬが、兎に角前に述べた樣な準備をして居ることは想像せられる。一旦事ある時は之を取り出して、メルブからヘラット。ヘラットからカンダハル。カンダハルから印度のクエッタを攻める方略らしい。兵卒武器及び糧食等を送るについては中央亞細亞鐵道のみては不完全てあるから、西比利亞鐵道をも應用する。即ち西比利亞の一ステーションたるオレンブルグから、中央亞細亞の一ステーションたるターシュケンドまての連絡線を計畫した。此線の延長凡そ一千二百哩で、日露戰爭中之を敷設した。之れは必ずしも戰爭の目的のみて敷設したものてはない。あの近傍ては綿を澤山に產出するが、其結果穀物の生產が尠く、若し飢饉てもあれば人民が困る。だから萬一の凶作に備ふるといふ理由もあらう。けれども若し事があつたならば、必ず此鐵道を利用してモスコーの兵を中央亞細亞に送り出すだらうと思ふ。斯くの如くして露西亞が送り得る所の兵卒の總數は、精確には明言することが出來ぬが、日露戰爭の際に絶東に送つた兵數よりも多いといふ事は想像し得らるゝ。斯くの如くなれば、英吉利が印度の境界を防禦するには、非常の困難を感ずる譯である。だから絶東に勢威ある日本の如き國と同盟したといふ事は、英吉利の大なる幸福であつた。

今日に於ては、日露戰爭が已に終つたが、然し印度の防禦については左まて變更したのてはない。南亞戰爭に大功のあつたロード、キチエナー將軍が先年印度に行て防備に心を勞したが、只器械的の防備を盛んにした丈けて、其外に兵力を增したのてはない。だから防備に困難なるは昔日と大差なしてある。それて今日、

日英同盟を更らに繼續するの條約を結んだのは英吉利にとつて非常の利益である。

然らば日本にとつて如何なる利益があるかといへば、日本が露西亞と戰ふ時に、英吉利は日本を助くる義務があるから、絶東の平和を維持するには多少の利益はあるが、今回の條約に第四條を挿入したるが爲めに、日本が米國と戰爭をする場合には、英吉利は日本を助くることがない。勿論第四條がなくて、此前と同じ條約が繼續して居るとしても、米國が實際日本と戰ふた場合に於て、米國と言語人種の同じき英吉利が、日本を助くるや否やは疑はしい。然し今回第四條を挿入した爲めに、英吉利が日本を助けざることはいよいよ明かとなつた。斯く論ずれば、今回の條約は實質に於て昔日と異らないやうに見えるけれども、輓近に於ては米國は日本に對して友愛の情を示して居らぬから、日英同盟の効果が昔日よりも非常に薄くなつた。だから之によつて絶東の平和は多少維持が出來るにしても、日本の利益より論じたならば、日本は更らに露西亞と親密にする方が得策だらうと思ふ。斯くの如くすれば絶東の平和が益々維持が出來るのみならず、若し萬々一絶東に事が生ずるとすれば、絶東に於て露西亞の力を借ることが出來る。例へば關東州は元、廿五箇年の約束を以て露西亞が借りた。日本は其權利を受け繼いで來たのであるが、當初露西亞が借入れた時からは已に十三年を經過し、餘す所僅かに十二年である。其期限が到達せんとするに當つては、支那は必らず日本に向て其返還を迫るに相違ない。さうして其尻押しをするものは恐らく米國であらう。日本人は大決心を以て日本の主張を貫かなければならぬ。此際に日本の爲めに力を盡すものありとすれば、そは恐らくは英吉利にあらずして露西亞であらう。今日に於ても滿洲に於て日本と利害を同じうするものは露西亞であつて他の國ではない。日本は一度は露西亞と戰爭をしたが、今後は益々露西亞と親善して、成るべくは日英同盟の必要のない所まで漕ぎ附けたいものである。(完)

貴族院の將來

子爵 秋元興朝

政治界の事は、將來を豫測することがなか〱困難である。機によつて變じ、事あれば移り、轉瞬の間往々意想外の形勢を現出することがあるから、如何なる識者と雖も、充分なる自信を以て、政治界の將來を斷言することは殆んど不可能であるといつても差支あるまい。貴社が今、貴族院の將來といふ問題を掲げて、吾輩の意見をお尋ねになつても、將來は分らぬとお答するの外はない。殊に吾々共の談話會は、今度の二爵議員選擧に於て失敗して居る。所謂敗軍の將は兵を談らずであるから、旁々斯る問題を議したくないが、然し折角のお尋ねであるから、貴族院に對して平常懷抱する卑見を述べて、責を塞がうと思ふ。

一體、今の貴族院はよくない、是非改革しなくてはならぬと、我々も隨分聲を大にして新聞や雜誌に意見を掲げた事もあるが、實をいふと、貴族院のよくないといふのは消極的であつて積極的でない。今の貴族院の惡るい處は何かといはれても、さう際立つて惡るいといふ事は別にないかも知れぬ。だから今直ぐ之を改革しなければ天下に大害を釀すといふ譯ではない。例へば今の貴族院の病は虎列剌とかペストとかいふ性質のものにあらずして、肺病か胃病の如きものである。だから今直ぐに手當をしなければ死んで了ふといふ性質の病ではないが。之を久しきに亘つて放任して置けば、終には如何なる名醫も治する能はざる大患となるのである。で、吾々は徐ろに之を改革して行かうとの理想を抱いて居る。

吾々が今度の選擧て失敗したのは、無論吾々の遣り方にまづい所もあつたが、主因は大勢が非だといふ事

にある。今の一般の貴族は貴族院といふもの丶、本當の責務を知つて居ない。吾々が意見を述べて同志たらんことを勸誘すれば、「貴說には誠に贊成だが、然し投票はあちらにする」といふやうな挨拶をする。天下にこんな馬鹿げた事があるものでない。「君等の說には贊成出來ぬから投票は御免蒙る」といふのなら理屈が分る。が、「說は贊成だが、投票は出來ぬ」といふのは何事であるか。實に矛盾極つた話である。のみならず今の貴族院の人には主義政見を以て政界に立たうといふ人がない。今の尙友會の如きは純然たる政黨でありながら、貴族院に政黨を樹つるのがよくないと唱へて居る。これも實に可笑しな話で、吾々は貴族院も政黨によつて事を決すべきものと思ふ。彼等が往々二院制度を設けたる所以は貴族院をして政黨化せしめざる爲めである。二院縱斷して政事を行へば、其專橫蓋し測るべからざるものあらうなど丶いつて居るが、是れ實に俗論に媚ぶる輕浮なる議論と思ふ。苟も立憲政治を行ふからには、多數人民の意見を基礎とする政黨によつて議決するのは理の當然である。人往々善政でさへあればよいといふが、善政は封建制の下でも、專制君主の下でも、或は共和制の下でも出來る。然しながら我國の如き立憲國に於ては立憲的善政でなければなるまいと思ふ。英國の如きは上下兩院制でありながら上院の權限が我國の貴族院に比して甚だ小である。僅かに下院をして反省して再議せしむる丈けの權能しかない。のみならず今度の上院改革では一層上院の權能が削減せられたのである。然るに我國の貴族院は之と異り豫算の修正權を有して居るから、或意味に於ては衆議院に勝る位の權能を有して居る。夫れ故に貴族院と一般國民との利害關係は英國に比して遙かに〱密接である。之れ吾々が貴族院の問題を以て、極めて重要の問題とし、貴族院の改革を以て決して等閑に附すべからざる國家問題と做す所以である。

今の尙友會の人は、口を開けば「政黨は理にあらずして勢也」といふて居る。然らば貴族院が政黨化しても、其れが勢であるからには理否を論ずることが出來

ぬ譯てある。若し彼等が「政黨は勢にあらずして理也」といふ前提から出立して貴族院の政黨化を難ずるならば、少くも論理は一貫して居る。が、勢なりとしながら、彼是れいふのは非常に間違つた事と思ふ。彼等が今度の選擧に臨むにしても、「人物本位」といふ事を標榜して居る。吾々の談話會は元、社交團體であつて政社でない。何故なればまだ談話會では主義政綱を天下に發表してゐないから、政社とはいふことが出來ぬ。て止むを得ず吾々は「人物本位」としたのであるが、前にもいつた如く尙友會は純然たる政黨である。然るにも拘らず人物本位といふ事は甚だ謂れなきこととてある。一體今の貴族中、人物といふべき人物は幾人あるか。若し貴族の中に大政治家ありや大經綸家ありやと問ふたならば恐らくは一人もないと答へざるを得まい。然しそんな六つかしい事を言はずに普通の人物を求めてもさう澤山はない。先づ尙友會では廿名位、談話會では十名位のもので、人物本位を以てすれば、七十の子爵議員の中廿名位しか得られぬ事となる。他は皆碌々たる連中で到底お話にならない。だから人物本位などいはずに矢張り主義政綱を明かに掲げて、それに合した人を選出すべきものと思ふ。

元來貴族といふものは多くは保守的になり易いものであるが、今の貴族院は、なんでも時の政府に贊成して行くといふ傾がある。政府を助けて其政策を行はしめるといへば、名は甚だ立派なやうであるが、實は此中に非常な危險分子を含んで居ると思ふ。如何なる政府でも政策でも助けるといふ事になれば、若し時の政府政策にしてよくないものがあつた時にも之を助けるといふ事が出て來る。のみならず立憲政治の基礎となるべき國民思想と往々背馳する場合を生ずる。之れ最も憂ふべき事である。吾々はどこまでも我國の政治をして立憲的ならしめたい。貴族院をして主義政見を有する政黨のものたらしめたい。さうなれば主義政見の一致する政府の政策は助けて、反對するものとは戰ふといふ事になる。之が本當の立憲國の貴族院であらうと思ふ。兎に角貴族院が現在のまゝでいけぬといふ事は斷言して憚らぬ所である。（完）



十五日旅

倫敦 石生

五月の一日から十五日まで内地旅行をやつた。「行方定めぬ旅なれば」だと暢氣なんだが、僅か百八十圓餘りの金を懐にして、牛津大學、ケニワアス古城、沙翁生誕地、チエスタアの舊市、「英國湖水地方」、「蘇國湖水地方」、バアアンスの小家、エヂンバラ、アボツフオオド、カウバアス、ハウス、バンヤンの小家、劍橋大學と、切詰めた豫定行路を巡遊しやうといふのだから、忙しくもあり、苦しくもあつた。

○五月一日。十一時五十五分パヂントン發――汽車――一時四十分オクスフオオド下車。同地宿泊。日本晴の上天氣。

聞きしに違はず、牛津は軒並大學だと言つてよろし

い。僕が一夜の宿と定めたキングス、アアムスといふホテルの前のカザリン町を下へ下ると、左側はハアトフォルド、コレヂとオオル、ソオルス、コレヂとて塞いて居る。次の同じ道筋の、グロオヴ町も右側はオリエル、コレヂとコルプス、クリスチナ、コレヂで大半を占めて居る。そして後者の向側にメルトン、コレヂがあり、コルプス、クリスチナ大學の後背にクライスト、チヤアチ、コレヂがあり、そのイライスト、チヤアチ大學の眞向にペムブロオク、コレヂがある。東京帝國大學の校舍校舍が、煉瓦造石造の町家續きになつて居るのだと想像すればよい。尤もどのコレヂも、東京大學の校舍よりか、遙か美しく遙か古るく、遙か大きいことは無論だ。

一町四方はあらう、一面の緑の芝短かく刈られて砥の如く平らな方庭を中央に、宏壯な石造二階建のクライスト、チヤアチ大學の校舍の東南隅から、張り擴げた蝙蝠傘の形の石造の天井を仰ぎ見ながら、石階を上つて二階の食堂へ入つて見る。

幅六間半、長さ十九間、高さ八間の、支柱無しの大廣間だ。此大學の著名な關係者出身者の大小の油繪が四方の壁に隙間無く懸け連ねてある。創立者と目すべき大僧正ウルジイ、並に完成者と言ふべき顯現八世のはホルベインの筆であつた。レリイ筆のジョン、ロック、ミレイ筆のグラドストンの像など記憶に殘つて居る。

校舍の後にカシイドラルがある。バアンジョオンスの圖案でモリスが仕上げたといふ、南脇横道の西側の色硝子窓は美しかつた。

サクソン王の娘フライヅワイドが八世紀の初めに建立したチヤアチの遺蹟が此のカシイトラルの東側の壁近く保存してある。

横に小さな婦人禮拜堂がある。其の前の方に、サア、ジョオジ、ノワアスの甲冑姿の仰向の、馬頭を枕にした、像がある。陶器だ。折から西側の高い色硝子窓から射し込んだ五色の夕日が此の像を照らして居た。此の横に、「アナトミイ、ヲヴ、メランコリイ」を書いたロバアト、バルトンの墓碑があつた。

大學正門のトムゲエトといふ門の塔へ上る。塔の最上樓にグレエト、トムと稱する釣鐘がある。毎夜九時五分過に此の鐘を百一つ撞く。牛津の各大學は、その鐘を聞いてから五分經つて一切の門を閉めるのださうな。

ペムブロオク、コレヂには、サミユエル、ジヨンソンが字書を編著する時に使用して居たといふデスクや茶道具が保存してあつた。

町の東外れのモウダリン橋へ行つて、牛津三川の一たるチヤア川の支流を眺める。江戸川ほども無い小さい川だが、川土手の高いポプラアの並木は若葉青葉の影を流に映して美しかつた。

橋の袂近くモウダリン大學のモウダリン塔が聳えて居る。毎年五月一日午前五時、その最上樓て、東の方日に向つて羅典語で讃美歌を歌ふ式があるのださうな。現に今朝はその讃美歌を聽かうといふ人て此の橋は通れぬ程だつたと聞いた。

○五月二日。　午前牛津見物――二時半出發――汽車――三時半レミントン下車――ケニルワアス迄支線を汽車――廢城往復徒歩、片道十一二丁――レミントン迄汽車てかへり、更にストラトフオオド、オン、エボン迄汽車、同地宿泊。午前曇天――午後時々驟雨――夕方から快晴。

午前正八時、マンチエスタア大學にU君とS君とを訪ねた。今日の晝食か晩食かを共にしたいと乞はれたのてあつたが、都合が惡るいので、遂に朝食を共にすることを昨夜約束したからてある。U君は同學の友人てある。S君はアバヂイン大學の論理學の講師を勤めて居たが、近々此の大學のフエロオとなつて來たのだ。日本で暫く机を隣して居た蘇國人S君の令弟だ。

二君に導かれて食堂へ行く。四間に十間位の、新らしい綺麗な部屋だつた。フアイブレエスを下にして、丁字形に食卓がある。丁字の横劃に當る處の中央にフエロオたるS君が座る。客たる僕はその右、U君はS君の左に座る。學生は總て丁字の縱劃の左右に座る。印度人の某ドクトル、獨逸人の何某、瑞典人の何某、と一々紹介される。

此處の朝食はポリヂか又は魚肉かだといふ。普通はポリヂとそうして魚肉なんだが。僕は給侍に魚肉をと注文する。持つて來るまでに、S君が珈琲を注いで呉れる。トオストを取つて呉れる。ヂャムとマアメレイドの器物を引寄して呉れる。話ながら食事する。今日初めて氣付いた譯でも無いが、學生の言語動作が總て紳士的なるに感心した。

食後學生共と一所に隣室の扣室へ行く。今日の倫敦新聞が五六種來て居つた。

九時十五分前に禮拜堂で學生の朝の禮拜があるから見て行けとのことで隨いて行つた。向つて聖壇の右が教授やフエロオの席で、左が學生席だ。僕は學生席の最上位へ案内された。禮拜は簡單であつた。讃美歌合唱の折、僕も御附合に——ヒム第二百七十一を——讀んだ、他人の歌ふ節に後れながら隨いて。歌つたのでは無い。

モウダリン大學構内のクロイスタアを横切つて裏庭へ出る。裏庭から小川に架した石橋を右へ渡ると、一間半幅位の並木道がある。アヂソンが學生時代に、よく此の並木道を散歩したといふので、アヂソン、ヲオクと呼ばれて居る。並木は楡か樫か楓か、若葉が出た許りの處で能くは分らぬ。何れも亭々たる大木だ。下草に雑草が少しも無い。ダフオヂル、プリムロオズ、ナアシッサス、苧環草など、程能く植込んである。奥の方へ一二丁行つて見る。川の向側に、芝生の平地を隔てゝ、モウダリン、クロオヴと稱する森が見える。放飼の鹿が木の間に其處此處に見える。ベンチに腰掛けて休む。頭上でブラックバアドが朗らかに囀る。そよ風が並木の小枝をゆすぶつて居る。頗る閑靜だ。

十一時頃アシユモレアムにO君を訪ねた。アシユモレアムは、宿のつい向ひのクラレンドン、ビルヂング構内、セルドニアン、シアタアの後に在る。かの有名なオクスフオオド大字典の編纂所になつて居るのである。O君はその編纂員の一人なので。内部を案内して貰つた。

あの大きな字典のことだから、定めし編輯員とか助

手とかが大勢居ると想像して居たのだが、七八人しか居らぬのを見て意外に思つた。他へ材料を探しに行つて居るもの、自宅でやつて居るものもあるさうだが、それでも總員十五六人に過ぎぬといふことだ。原稿も見せて貰つた。後で挿入すべき語や解釋を發見するを慮つて、原稿は暫らく保存して置くのだと言つて、その保存中のを、棚から幾頁分か取り下ろして示された。原稿紙の大小なんか全くお構なしで亂雜なものだ。紐て括つて一束(たば)にして積み上げてある。校正刷は初校のは二欄に刷つてあるが、再校のは三欄になつて居る。印刷所の方で萬事呑込んで居るから、活字の大小の符號なんか附けて置かんでも斯んな風に刷つて呉れるのだと、原稿と校正刷とを對照して、種々說明して呉れられた。三方の壁に沿ふて幾百千の編輯用圖書が架上に整列して居た。三十分許りて辭した。

ボドレイアン圖書館へはいつて見る。活版本七十萬卷、手寫本三萬冊、古貨幣五萬箇、蒐集されて居ると聞いて居るが、半時間や一時間て、何も判つたものぢや無い。書庫は覗いた許りで、別室の書堂へはいつて見る。書堂とはいへ、書がある許りぢや無い。古代建築の模形や古物が隨分とある。エリザベス女王使用の木皿の古雅な模樣や、セレイ愛用のギタア、キイツの髮毛の入つてる指環など今頭に殘つて居る。

ケニルワアス驛から田舍道を小雨に降られながら十一二丁あるいて所謂「ケニルワアス城」へ着いたのは四時過てある。

城は千百二十年頃に築いたものだが、其後幾度かの改築を經、また千五百六十三年にエリザベス女王が寵臣リスタア伯に與へてから、伯が鉅萬の金を費して大修築を行つたので、非常に壯麗宏大なものとなつた。千五百七十五年に女王を招待して日夜盛んな饗宴を催うしたとはスコットの筆に詳しく描かれて居る。

いかさま、城は國の中央に位して居る。四方に深い濠もある。八方に大道が通じて居るから軍兵集中にも派遣にも便利な城だつたと首肯れる。

門番に六片(ペンス)拂つて、城壁に沿ふて芝原道を進むと、

すぐ眼の前に小山の上なる廢城が聳え立つて居る。

右に近く、所謂「シイザア塔」が見える。小歇の雨が俄に強く降り出したので、その塔の風下へと急ぐと、雨にも構はず芝原に突立つて居た、今迄僕の眼に入らなかつた羊が三四、とぼ〱と横へ逃げて行つた。塔は殆んど壁丈けになつて居る。厚さ二間に餘る岩丈なものだ。中は長方形て、南北十間、東西十五間位はある。

その西に、昔は料理部屋があつたのだといふ空地があつて、それを横切ると、所謂ストロング、タワアがある。スコツトの小說に、メルギン、バワアと書いてあるのが是だ。四角な櫓だ。

櫓から北を瞰下ろすと、昔は花園が見えたのださうなが、その花園は今は野菜畑になつて居る。

ストロング、タワアの次に、グレエト、ホオルと稱する大きな部屋がある。兩側の壁から等距離にある二列の十本の柱て支えた圓天井があつたものださうなが、その柱の礎だけ殘つて居る。南側に張出窓が二つ殘つて居る。蔦が絡んて居る。

ホオルに續いて三つ部屋があるが、いづれも壁は大半頽れて見る影も無いやうになつて居る。

此等は丘上の本丸ともいふべきて、その外廓に「スワン櫓」とか「水櫓」とかいふ櫓が四つ許り壁ほど殘つて居る。

外廓の上に立つて、南と西とを望む。近く、三の丸ともいふべき城壁の跡も見え、その前の低地――昔は湖水のあつた低地も見え、遠く數哩の田園森林も見える。

雨は歇んだ。が日ははや西山に落ちて、あたりが暗くなりかゝつた。此の廢城に巣があるのか、烏に似た鳩より小さい、嘴の白い鳥が何處からか、二羽三羽と「シイザア塔」や「ストロング、タワア」へ飛び下りて、頻りと啼いて居る。多分ルックと稱する鳥だらう。

僕は振返つて身近の廢城を仰ぎ見、又外廓、低地、それに續く田野を眺め、又ルックの啼聲を聞きながら、暫く突立つて居つた。

○五月三日。午前ストラトフオオド、オン、エヴン見物――午後汽車でチエスター迄――同地宿泊。曇後晴、午前强風。

ストラトフオオド、オン、エヴンは人口僅か八千餘りの小さな町だが、沙翁誕生の家を見に來る旅客だけでも年に三萬はあるさうな。沙翁のお蔭で存在して居るのである。

僕はシエエクスピア、ホテルといふへ泊つたが、此處の部屋は總て沙翁の戲曲の名をつけてある。僕の入れられた部屋は「御意のまゝ（アズ、ユウ、ライキ、イット）」といふのであつた。

沙翁が生れたといふ家はヘンレイ町にある。屋根裏部屋のある二階建木造の粗末な家だ。

地階は二部屋だ。沙翁時代の家具什器、沙翁に關する書類、自筆物が數多く陳列してある。

一階も部屋は二つだ。沙翁が產聲をあげたといふ小さな部屋は、天井といはず、柱と言はず、窓硝子といはず、來觀者の姓名が一面に書きつけてある。カアライルまでが書きつけて居る。スコット、サッカレイ、ブラウニングの自筆も見られる。それに續いた部屋は今は書庫になつて居る。沙翁物の古版や、沙翁の肖像畫や、當時の家を寫した繪が澤山ある。カタログが出版になつてるとだから一々列擧もすまい。

家の後に花壇がある。沙翁の戲曲中にある草花や木が植えてあるのである。

チヤアチ町のグラムマ、スクウルを見た。敎室は二階にある。天井の極めて低い、窓の少い、暗い部屋だ。敎壇に近い、左側の或る柱に、

沙翁は此の柱に近き席を占め居りしとぞ

と貼札がしてあつた。

町のはづれに、エヴン川に接して、沙翁埋沒の寺（チヤアチ、ヲヴ、ホオリイ、トリニチイ）がある。墓は內陣の北側にある。人の知る彼の碑銘は、踏む石疊の一枚に彫つてあるのであつた。

內陣の北側の壁に、龕樣なものがしつらえてあつて、其處にゼラアド、ジョンソンの造つた半身像が奉置してある。頭の禿げた、鼻髭のピント反つた。天神鬚の、

能く書物て見るあの顔てあつた。

此寺の事を書いたものては、僕の見たもの許りても、ワシントン、アアギング其他夥しくある。日本人の書いたものも隨分ある。僕が事々しく今更描寫するてもあるまいと筆を擱く。

川上に、寺に近く、沙翁紀念會館がある。三十一二年前に建てた、石材まぢりの赤煉瓦の無趣味な建築だ。裏庭に沙翁の銅像がある。臺石の四方にレディ、マクベス(悲劇)、プリンス、ハル(史劇)、フォルスタフ(喜劇)、ハムレット(哲學)の像が置いてある。

此の會館の内部にはシアタアもある。毎年四月末から五月の初めにかけて芝居を興行する。折からその時節(シイズン)のことて、興行中てあつたが、時間の都合て芝居は見なかつた。四月の十七日から始つて居るのてあつたが、その日には倫敦からミス、ヴイオレット、ワンブルウが一日だけ出張して出演したし、同十八日にはオソ、スチユアアトが來たし、二十四日にはオスカア、アッシユとミス、リリイ、ブレイトンが來たし、二十七日にはミス、エレン、テリイが來、五月の一日にはフレッド、テリイとミス、ヂユリア、ネイルソンが來たさうな。

○五月四日。チエスタア滯在――午後汽車てリヴプウル――同地宿泊。終日無類の快晴。

チエスタア市は四百年の久しき間、羅馬人が、かの有名な第二十軍隊(レッジョン)を駐屯さして居たのても知れるやうに、極て建設の古い町てある。その後エルス人、サクソン人、デエン人と、占領者が變つて行つた。デエン人は此處に立籠つてアルフレッド大王に反抗した。その後町は改築された。が今猶ほ羅馬人居住の遺跡がある。

城壁が町を取圍んて居る。長さ二哩許りだ。厚さ四尺乃至六尺はある。上(うへ)が歩道になつて居る。元は土(つち)と芝て出來てたものてあらうが、今あるのは十四世紀後のもので、石造だ。

ディ河が一方に沿ふて流れて居る。古昔は此の河のある爲め大きな船も着いたものださうなが、今は砂て

淺くなつて船は着かぬとゝなつてしまつた。

僕は朝早く宿を出て、「東門」と稱する門の石段を登つて此の城壁の上を北へと歩るいて行つた。すぐセシドラルが近くに見える。

城壁の東北の角に鳳凰塔と稱する櫓がある。塔の壁に

　千六百四十五年九月二十四日チャアルス一世此塔上に立ちてその軍兵のロウトン、モアに敗北するを見し處

と貼札がある。如何さまと、僕も東の方北の方を望んで見る。

歩道に隨いて進む。北門の上を通ると、今度はモルガンス、マウントと稱する見張の櫓があり、又ペンバトンス、タワアと稱する半圓形の塔もある。西北角にはボンワルズソンス、タワアといふ櫓がある。古昔川を見下ろして居た「水塔」といふのに連續して居る。此のあたり遠くエエルス連山が望まれて眺望頗るいゝ。南へと更に歩道を迴ると「水門」と稱する門の上を通る。右方眼下に平坦な草原がある。毎年此節競馬を此處でやるのだが、折節その季節とあつて、其處此處に大きなテントが幾つも張られ、城壁に沿ふて宏大な觀覽臺も出來て居つた。

一廻り廻つて元の「東門」から下りた。

五月の初のとて、小供がメイ、クインの歌を歌つて道行く人に錢を乞ふてるのは面白かつた。下等な乳母車に赤ん坊を乘して、その赤ん坊の衣服にも、車の幌にも、赤だの青だの黄だの、紙片を矢鱈に結びつけて飾つて居る。それを五つ六つの女の子が四五人で綏くり推しながら、メイ、クインの歌を歌つてるのである。頬べたにジャムかなんかこびりつかして、鼻垂らしてる「女王」の顔を見ながら、歌をきく。「メイ、デイ」といふ處を「メエ ゼエ」といふと程は判然分るが、他の處がどうも聞取れぬ。でも節が面白いので、小銀貨一つはづんで、二三度繰返し歌はしてやつた。「女王」守護の娘は、いづれも汚れた「油屋さん」を掛けて居つた。

此のチエスタア町に特有な建物が所謂「ロオ」といふ處で見られる。家々の地階と一階との正面が、連續した物見臺のやうに、廊下のやうになつて居るのである。地階の廊下の天井の上が、一階の廊下の歩道で、その上が二階の表座敷の床になつて居るのである。家は此邊總て木造で、柱などに古雅な彫刻のあるのが多い。

市の中心にカシイドラルがある。北側の横脇道の壁は聖書の諸景を現はしたモザイクであつた。

午後競馬見に行つた。朝見た折一面の草原であつた處も觀覧臺も、埒内の競馬道を除いては、人で埋まつて居つた。人並に今日の競馬の番組を買つて見る。出場の馬の名、持主の名、騎手の名、騎手の帽の色など書いてある。

競馬は三十分置にあるのだが、一回の競馬は見る間にすんてしまう。頗る飽氣無い。然し賭をやるのを見るは面白かつた。

埒内の廣場には幾十の塗板が立てゝあるのが見える。その横の踏臺の上に立つて頻りにわめいて居る男がある。塗板には第何回と書いてある。わめいて居る男の聲は、遠いので、初めは能くは分らなかつたが、段々分つて來た。

第一號の馬は一に對する二、第二號の馬は一に對する三てなことを呼ばはつて居るのである。賭をやる連中は、殆んどその賭けんとする馬も見なけりや、騎手も知らぬといふことだ。一に對する二だから、いゝ馬だらう勝てさうだから五磅賭けやう、一に對する五だから勝てさうには無い馬だが萬一の時もうかるから先づ二磅賭けて見やうといつた具合て、他人の噂や景氣を見て賭けるのださうな。塗板の横に立つて喚めいてる男が、上衣のポケットやヅボンのポケットに無雜作に突込んでる幾十百枚のバンクノオトを取出して、また頸から前へ吊り垂らしてる小さいカバンの中からザク〳〵と金貨を取り出して、五十磅百磅と、惜氣なく拂つてるのを見て居ると、つい僕も十志位賭けて見やうか知らといふ氣になるのも面白かつた。勿論賭けはしなかつたが。

リヴアプルではヲオカア書堂許り見た。ロセツチ筆『ベアトリス瞑目の日のダンテの夢』、グツダル筆『ハレムの新しき光』、イイムス筆『父を最後に見しは何時か』、ヒユウバアト、フオン、ハアコマア筆『晩景』、ゴッチ筆『子供の行列』、ヘンリ、ホリデイ筆『ダンテとベアトリス』、コトマン筆『家庭の一員』、バイアム、ショオ筆『戀のうたかた』、ミレイ筆『ロレンゾとイサベラ』、アルバアト、ムア筆『夏の夜』、ヘイレス、キリアムス筆『書殺子上の祖先』其他尤物の尠なからぬに驚いた。

夜はエンパイアといふ寄席へ行つた。 （未完）

玄米と脚氣の話

陸軍一等軍醫正 ドクトル 都築甚之助

日本は昔から瑞穂の國と稱して、米を以て主要なる食物として來たのであるが、昔は主もに玄米を食うて居たのである。朝鮮征伐の際にも玄米を用ひてゐた例もあるし、熊本城の中に蓄へてあつた米も玄米であつたと噂せられて居る。私の考では日本人が白米を食ふやうになつたのは、漸く百年か百五十年こつちの事だといふてもよい位と思ふ。時期は確かには分らんが、江戸に糠問屋の出來た時代から日本に脚氣といふものが出來たらしい。精確な記載ない故明言は出來ぬが、玄米を食うた時代には今の脚氣といふものがなく、白米を食うやうになつてから脚氣が多くなり出した事は、殆んど間違のない事實である。脚氣はどうしても都に於て多く、一番初めに江戸、京都それから大阪といふ風に、大いなる都會から流行り出したものである。

之れは都の人は米を叮嚀に搗いて食ふ事から起つたのである。田舍では手搗きでやるから精白の度が少く所謂半搗になつて居るから、脚氣が都會よりも遲く出來てさうして少いのである。

玄米が脚氣に有効な實例を擧げれば。堀川監獄署では明治三十六年から四十一年までの間に、玄米を混ぜて食はしたが、玄米を多く混ぜて食はした年には脚氣患者が早く癒り又は死者がなかつた、少く混ぜた年には患者が多く且つ死者を出した。

半搗米の有効なる例を擧げれば、瓜哇監獄では半搗米を食はした年には九萬六千五百三十人の囚徒中僅かに九人の脚氣患者しか出さなかつたが、精白米を食はした年には十五萬二百二十六人中四百二十人の患者を出した。

白米を食ふと脚氣が出るといふ例は澤山にある。明治三十六年には麥が高くて、外國米が安く、山口、松山、德島、甲府等の監獄では麥を混ぜずに外國米のみを食はしたら、僅か二三ヶ月中に脚氣患者が澤山に發生した。

それから熟米（籾に蒸氣を通して後籾を去りたるもの、即ち煮た玄米）といふものは馬來半島及び印度人の常食であるが、熟米を食ふ人間には脚氣が起らない。同じ土地に住んで、白米を食うて居る支那人には脚氣が出る。それでクーラルムプールの精神病院で實驗を初め、患者を二つに分け、片一方には白米を食はし、片一方には熟米を食はして見た。すると白米を食はした方からは脚氣が澤山に出て、熟米を食はした方からは一人も出ない。今度は病室を變へて前の白米の方には熟米を、熟米の方には白米を食はして見たら矢張り白米の方に患者が出て、熟米の方には一人も出なかつた。

次に新嘉坡の病院では患者全體に四ヶ月づゝ白米と熟米とを交互に食はして見たが、白米の時には脚氣が出て、熟米の時には出ない。して見ると、普通日本に發する脚氣といふものは白米を食ふ爲めに起ると斷言してもよからうと思ふ。

然らば白米と玄米とに如何なる成分の差があるかといふに、

糠、玄米、白米分析表

區分		糠	玄米	白米
水		一一、六七	一三、六六	一四、二〇
含窒素物		一二、八二	七、〇七	六、六〇
脂肪		一四、〇八	一、六七	〇、五六
無窒素物	糖及糊精	二九、二七	一、五四	二、一〇
	澱粉		七二、三〇	七二、四三
木纖維		一四、四九	二、〇六	三、三二
灰		一七、六六	一、三八	一、二七
備考	玄白米ハ横濱衛生試驗所報告　糠ハ內務省衛生試驗彙報ニ據ル			

の如くてあつて、玄米が宜しい、白米が悪いといふのは、詰り成分に關係あることと勿論て、一言にしていへば糠が附いて居るか居らぬかといふことに歸着する。然らば糠といふもの、どういふものかといふに、分析表にもある通り含窒素物が多い。脂肪も多い。木纖維も非常に多い。灰も多い。そして無窒素物は却て糠に少い。それて動物試驗をやつて、如何なる成分が脚氣に利くか利かぬかを調べて見るに、含窒素物中の普通の蛋白質は脚氣を防ぐ力がない。脂肪にはいくらか通じを促す力はあるか脚氣を防ぐ力がない。木纖維はいくらか腸を刺戟する力があるが、別に脚氣に利くものてはない。又馬鹿に多い所の灰も本當に灰にすると有効の分子がなくなる。只此分析表に表はれぬ所の有効成分を糠が含んで居るのてある。然し其有効成分は今日の處未だ其科學的性質が明瞭になつて居らぬ、然し其ものがあれば脚氣を豫防することが出來、ない時は脚氣を起すといふ事は、段々試驗の上て分つて來た。私は其有効成分にアンチベリベリン(Antiberiberin)といふ名を附けて居る。このものは水にもアルコールにも溶けるものて、糠からアルコールて抽き出して、それを精製することが出來る。それを動物に用ひても人に食はしても、內服さしても注入しても、脚氣を豫防及び治療する力を持つて居る。然し其科學的性質の分

らぬ通りどういふ具合になつて働いて、さういふ顯著な効力があるか今日まだ充分の研究がされてない。只普通の有りふれた要素の外の重要なる一成分（而して蛋白が其主成分ならん）であつて、糠以外の他の食物にも含有して居るものであらうと察しがつく。之が營養上將來如何なる地歩を占むるやうになるか、頗る興味を以て探究すべき問題である。差當り動物試驗にも人にも有効なる事實丈けは確かめられたから、私は實際に之を應用しつゝある。そして眞の科學的研究――如何なる理由でさうなるかといふ事は――將來の研究問題である。だから玄米が脚氣によろしいといふのは外の成分にも多少の關係はあらうが、主としてアンチベリベリンの有無によつて定るのである。

處が此アンチベリベリンは水にも溶解する性質を有するから、米を餘り長く水に漬けて置いては其成分が水の中に脱けて了ふからよくない。又米の洗ひ方も不充分の程よい。又炊くよりも蒸した方がよい、といふのは百三十度以上の熱に逢へばそれは毀れて無効となるからである。で高熱で炒ることが出來ぬ。現在の狀態では、折角滋養に富んだ玄米を搗いて糠の成分を捨て、尚よく〳〵洗つて、有効成分を薄くし、水に長く漬けて一層有功成分を脱き、其上ブク〳〵沸かせて一向効能がないやうにして了ふ。之を玄米を蒸したのに比べては有効成分に雲泥の差がある。で、玄米を蒸して食ふといふ事は一番道理に協うた方法である。

然し一般の人が玄米を捨てゝ白米を食ふといふ事になつたのは、結局食慾の問題に外ならぬと思ふ。此問題を顧慮すれば、白米を食うて、別に糠を食ふた方がよい。で今、私立脚氣研究所といふものが出來て、そこで「糠末」といふて食ふべき糠を作つて居る。又尾崎といふ人の賣り出した「糠精」といふものも食料に適したものである。けれども尚一歩を進めた製劑は脚氣研究所の「アンチベリベリン」といふ藥である。これは非常の少量の中に有効成分を多量に含んで居る。これを食へば白米を食うて居ても、一向脚氣などに罹る恐はないのである。若し人間の食慾といふものを顧慮すれ

ば今日てはこういふ贅澤をしなくてはならぬ。アンチベリリンは高い事には高いが一番効能が顯著である。其外一般としていへば、白米に麥を混ぜて食ふ事も、乃至他の副食物を多く食ふ事も、効力は素より糠、アンチベリリンに比べて非常に差はあるが、又心得置くべき法であらうと思ふ。(完)

△本號よりは科學的智識と實用と趣味とを兼ねたる讀物を一篇づゝ掲載することゝせり。

△大谷繞石氏の「十五日旅」は次號に於て更らに其精彩を發揮すべし。



數奇傳（三）

——一小文學者の自叙——

田岡嶺雲

（七）病蓐の五年

(1) 多病善愁是我生

支那詩人の口吻を借りていへば、多病と善愁とは、實に予が一生の波紋を織出だす經緯である。梅雨の雲の切れ間を覗く日光のやうに、予が少年の快活と健康とを享樂し得た時間は極めて短かゝつた。予が一生を通じて、眞に何の屈托もなく心の底より笑ひ得た時代は、僅かに大阪留學の足掛三年の間に過ぎなかつた。

幼時から予は既に餘り强壯な體質では無かつた。幾度か痙攣て氣絶した事を母から聞いた、覺えて後も、腸に故障があつたのであらう、朝食後に腹が痛む事や、便通の時に血が混る事などは常てあつた。又咳嗽に惱んて、竹を節の處から五寸許りに切つた者を火で炙つて、中に滲み出た油を飲んだ事もあつた。此の如き素質を有した予の體が、不攝生の虐待に堪え得る力の無いのは固よりてある。客氣

に任せた無節制なる貪食の應報として、予は一夜突然激しき腹痛と吐瀉とに罹つた。一時癒えたが、豫後の手當を等閑に附した爲めてあらう、病は終に慢性化して重態の胃腸病に陷つた。骨と皮とに瘦せさろばうて可惜爲すあるべき青年期の五年を空しく病蓐に輾轉した。

一口にいへば僅に五年間てある、然れども活動の氣に溢れ、只管に前途の希望にのみ突進せんとする青年期に於ける五年間は、衰頽に甘んじ回顧に樂む老成期の十年二十年にも匹敵する。心のみ逸りながら、爲すこともなく身を蓐上に横たへて藥の香をのみ嗅ぐ、其一刻の長さよ、其一日の長さよ、況んや一月をや一年をや、更に況んや年を相重ぬるをや。

病の苦痛よりも、更にまして苦痛なるは、廢學の一事てあつた。病勢の最も增した折など、予は每朝眼覺むると同時に、マア昨宵も死なゝかつたと息を吐いた事も無いては無かつた。併し此くの如く死の切迫を感じるよりも、予の心は寧ろ、一時も早く學に就きたいといふ一念の方に強く占められて、只單に焦躁つた。

焦躁れば焦躁るほど神經は亢奮する、病勢は加はるのみてある、病勢に連れて神經は愈々過敏になる、イラ〳〵として何を見ても何を聞いても腹立たしい、人の爲る事は盡く氣に入らない　ジレる拗る、癇癪を起しては誰彼の用捨なく當りちらす、弟や母は常に予が怒罵の的てあつた、伯母や祖母や、父に向つてまて聲を勵ました事も一度や二度て無い。併し何人も些も予に逆らはなかつた勿體なさを、今懷へば涙が翻れる。

食つた物を吐して仕舞う、此が予の病の主なる容體てあつた。此は大阪の學校に居る時、誰かから、食い過ぎは吐けば宜いと生兵法な養生法を敎へられたのを屢々試みる間に一種の習慣となつたものらしい。而して病理的に胃が食物を受納し得ぬ狀態になつたといふよりも、寧ろ過敏になつた神經の故て、不消化品を食つたとか、食ひ過ごしたとかいふ疑念を起した時吐する場合が多かつた。自分て之を承知しながらも、食事每に矢張食品と食量とに疑懼しては、吐き〳〵した。

癇癪を起した折など、面當に故さらに吐いて人々の驚くのを待設ける樣な事もあつた。

予は縣の病院に入つた。予の祖母、予の父母、予の伯母予の叔父、予の兄弟、予の親戚予の隣人、苟くも予を識れる限りの人々は、死の陰影が予の上に漾うてゐる者と信じてゐたらしい。入院の當日、病みさろばうた予が昔風の輿にのつて、椽端から舁ぎ出された時、門まで見送つた女の人々の中には顔を背けてゐるものもあつた、恐らく予の生きて再び其門を潛り得るやを疑うて、涙を飲んだのであらう。

(2) 梟の鳴聲

縣の病院は舊城趾の小山を負うて、前には其昔の形見の濠が埋められずに遺つて、夏になると蓮の艶々しい青い圓い葉が泥水を蔽うて一面に浮いたやうに茂つて居た。

建物は田舍には其頃罕に見る西洋造りであつた、處斑に剝げた青いペンキ塗の干乾びた色が、予等のやうな病人の痛々しい、惱をいだく者の居場所に相應しい樣に想はれた、予の室の前には廣い空地があつたが、夫は世の中から見棄られた者の樣に青い草一本生へぬ赤土で、カサ〳〵と粗く見る目にも快く無かつた。

夜になると、後の山の森でホー〳〵と梟が啼いた。闇に消えゆく人魂を無益に喚び還さうとする聲のやうで、寢覺め勝ちの予に悲しきものの一つであつた。

病院の詫しい生活は可なり長かつた。偶々兄が外國の長い漂浪の旅から歸つて、今度或人の隨行となつて歐米旅行の途に上るのを機會として、妻を娶る事となつた、其の吉禮に列する爲め、予も退院して家に還つた。

輿て家を出た予は車で家に還るまでになつてゐた。同乘した父の顔は、兄の結婚と予の輕快とて、其の常には喜怒を見さぬ顔に、喜びの眉が開けてゐた、併し、鳴呼、果敢なきは人の命である、父は其翌日の曉を待たずに死んだ。

(3) 父の死

其夜予は獨りて離座敷て寢てゐた。晩くまで母屋の方ては溢るゝ様な陽氣な歡笑の聲にさんざめいて、神經の亢ぶれる予は容易に眠を就し得なかつた。其内に人聲が段々に減つて、遂には風の凪いだ後のやうに寂然と靜かになつた。何時か予も睡つてゐた、突然と母屋の方ての異様の叫び聲に眼を覺すと、魘された後の様に胸騷ぎがする。不吉の前兆、咄嗟に予は斯くおもひ浮べた。我知らず起直つた際、アタフタとした足取て人が來た。予は脊筋に氷を注ぎ込まれた様にゾッと身戰ひをした。

予が母屋に來た時は、父は既に昏睡狀態に陷つてゐた、鼾の様に促つて高い呼吸に、纔かに『生』の名殘を留めて居る外には、もう一切の意識を失うてゐた。決斷を示した引締つた口、慈愛を宿した眼の光、奮闘に黑んだ稍稜のある顏の色は、此の蒼白き薄影を浴びながら、昨日までもの夫と大した變りはなかつた。枕頭を遶つて座つた祖母や伯母や母や兄や弟やが、父の耳元について、刻々に現世を遠ざかりゆく父を喚び活かさうと努めた。腸を絞る悲痛な響きが陰に籠つて、外面の白みゆくにつれて次弟に薄るゝ燈の影が、見るにうすら寒かつた。

祖母や伯母が呼ぶ父の幼名も、母と子が呼ぶ父よの叫びも、消えゆく生命の意識に現世の記憶を喚起さしむる事は出來なかつた。醫は病を癒すも死を救ふ者ては無い、醫者も施すべき術を知ら無かつた。

父は其朝の旭の昇る前に死んだ。其日は春の彼岸の中日てあつた。

死する者自からよりいへば其死は悅喜に連續した樂い夢てあらう、其死には何の苦痛を感ずる遑もなかつた。併し殘つた者には此ほど厭氣ない死方はない、一言の遺言もなく一言の訣別もない。祝ひの宴が終へて、爛醉した身々厠へ起つて卒倒したまゝに蘇らなかつたのてある。

口にこそ出さね、父の胸に絕えざる憂の種てあつた兄の身が定まつた、加之恰も予の病も稍々輕快した。父の腦は此の喜憂の激變に強き衝動を感じて、其死を

促めたのであらう。

(4) 四匹の小鳥

吾等兄弟三人を都會へ留學させて、其に仕送る月々の學資は、正當なものだけても大抵ては無かつた。此に對する父の苦心は今更察するに餘りがある、父は身に奉ずる極めて儉素で、絹布などは固より衣なかつた。樂みは唯晩餐の膳に上る一陶の酒であつた、其酒も手作りの濁醪であつた(其頃は自家用料として濁酒を作ることは許されてゐた。)父は或人の、慰みに百舌ても飼つてはとの勸めに對して、自分も四匹の小鳥を飼つて、今に鳴くのを樂んてゐると答へられたといふ事を聽いた。蓋し父は吾等兄弟四人の敎育のために一切を犧牲にせられてゐたのてあらう。

父の亡くなる前てあつた。一日父が出先から古ぼけて綴糸のボロ／＼になつた紺表紙の萬葉集を買つて歸つた事がある。同じ舖に源氏物語も出てゐたが少し高かつたから到頭買はなかつたと、如何にも遺憾さに堪へぬやうに予に語られた。父の心を想ひやつて、予は此時ほど吾等のために竭さるゝ父の恩愛を勿體ないと感じた事はなかつた。

其後博文館が僅に一冊二十錢の廉い價で日本文學全書を出版するに至つた際、予は亡き父の其時の言葉を想起して、覺えず涕がこぼれた。

十六歳の時家を嗣いてより三十餘年間の父の生涯は唯、獻身あるのみてあつた。家の爲めに竭くし、子の爲めに竭くし、鄕黨の爲めに竭くして、其一生を終へた。

祖父は酒と客とを喜んて、客さへあれば引き留めて、晝から夜遲くまても杯を置かなかつたさうだ、夫が爲めに衰へた家道を弱年の身に支へて、二人の少弟を扶持しつゝ終に既倒に挽回したのは實に父の力である。恐らく父は辛苦力行の味の外には、青年時代の樂さを知るに遑が無かつたのてあらう。

父が唯一の樂みとして育てた四匹の小鳥は皆巣立ちをした。而し如何に鳴いても其聲を聞きわけてくれる人は既に亡い。予は學校を卒業した時、父の亡いのが

何よりも不本意であつた。

（八）水産傳習生

(1) 學上の首途

禍は友を引く、其子の死といふ逆ま事に打撃を受けて流石氣の勝つた老祖母も、父の歿した翌年に、又父の後を追うた。八十幾年を浮世の途を切り拓いて生きて來た身は、人事不省となつてからも、飲まず食はずに一週間も活きてゐた。

假に二人を亡うて家は寂さを加へた。予の病は纏綿として未だ全く癒えぬ、予は醫術なる者に愛憎をつかした。自分の病は自らの力にて癒すべき者と決心した。予は脈と舌と聽診器とによりて病を視る醫者よりも、より善く自分の病氣が半以上自分の神經の故であることを承知してゐる、予は精神的に自ら克つことが自ら癒す第一歩であると考へた。

予は毎朝門前の小川で冷水浴を始めた、冬になつても止めなかつた。片割れ月が西の空に寂しく殘つて、刈田の霜、雪の如き曉に、川邊の氷を叩き割つて、飛込みさまに金盥で頭から骨に徹る冷たい水をかぶつた時の心持は、何ともいへないほど爽快なものであつた。

必ずしも此が効た譯でもあるまいが、精神的に予の勇氣は漸く恢復して來た。予は窃かに東京留學の決心をした。

予は臥るに飽いた、藥の香に飽いた、功名心は一身よりも重かつた、予は最早此れ以上長く病蓐に光陰を徒費して過ごすに堪へない。同じく死ぬるならば、廢學の中に無意味に死ぬるより、學問の爲めに有意味に死にたい、蓐上に僵るゝも机邊に僵るゝも死は一である、而して死する所以は則ち大に異なる、男兒碌々として蓐上に死するは耻辱である、行く所まで行き、やる所までやらう、命と病とは別だ、死ぬるのは病で死ぬるのでは無い、命が盡きるのだ、病を大事がつてゐては病が增長する許りだ、予の體軀は自から勉學に堪へ得る程度に迄恢復したと信ずる、此の以上徒々と病

に屈服してゐるのは愚だ、病と鬪はう、鬪つて病に勝たう、自分の嫌な事をすれば身にも障らう、好きな事が何て害がある。所謂歲月は人を待たない、一日を緩うすれば一日を失う。予と同級の人々は旣に大學に入る頃である、斷じて躊躇すべき秋で無い。

斯く考へ出すと矢も楯もなく堪らなくなつた。併し予の憔悴は依然である、瘦骨徒らに高い、家人が予の上京を許すことは思ひも寄らぬ、予は何とかして上京の機會を作らねばならぬ。恰も好し、水產傳習所（今の水產講習所の前身）の生徒募集を新聞で見た、豫科本科を合して一年半で卒業する速成の者である。實業的の學校であるから讀書のために健康を損ずるが如き憂なき事と、僅に一年半を經れば直ちに歸鄉することを條件として、上京の許可を家人に苦請した。大阪に居た長兄と東京に居た次兄とにも、水產業の有益なることより說起した長々しい陳情の手紙を出した。而し眞に水產といふ事に對して持つてゐた自分の興味は、どうにもして上京しやうといふ自分の熱心よりも、固より夐かに低くかつた事を、予は自白する。

予の願望は終に許容せられた、愈々上京の當日には、予は病蓐の上から首途をした。

國會開設の當年明治二十三年の正月であつた。

(2) 初めての東京の印象

其頃東海道の鐵道は未だ全通してゐなかつた、神戶から船に乘つた。少い時分から名にのみ聞いて、凄ましい波瀾の洶湧を想像してゐた遠州灘を夜の間に過ぎて、翌日の午後に橫濱に着いた。

船に、下等船客は荷物同樣といふやうな意味の掲示がしてあつた、固より下等船客たる予は甚しく侮辱を感じた。上等客たり得る身分となるまでは、再び船には乘るまいと思つた。

橫濱で一と休みして、日の暮方に汽車に乘つた、漸々と雨が降り出して、外は暗い。窓から透して見ると汽車は闇の中へ／＼とひた走りに驅け込むやうて、心細かつた。

新橋で下りて、車で番町の叔父の内へ向つた。車は

華やかな燈の多い通りから、俄に、寂しい廣場へ出た。城壁の名殘のやうな石垣と、松の靡えた土手とが闇に透いて見える、未だ宵ながら絶えて人通りが無い。熱鬧繁華の街とのみ想像してゐた東京にも、こんな處があるかと予は不思議におもつた。

此と、此の數日後に、日本橋の通りを歩行いて、金物屋か何かの店頭に丁髷の老人が座つてゐるのを見た事とが、東京での予が第一の印象であつた。其後隨分東京中を縦横に歩行いたが、流石に此外には終に丁髷を見かける事が無かつた。

其頃水產傳習所は箱崎の土佐邸の附近にあつた、入學試驗の時、往きには叔父の内から車で送られて行つたが、道筋が十分譯つた積りで復には徒歩いた。後におもふと柳原であつたらしい、赤練瓦の長屋が建續いた河岸に出て、馬車の線路に沿うて道を右へ採つた、店舗の招牌に下谷徒士町とあるのを見て迷つた事を悟つた、辻待の車に乗らうとして番町へと命ずると、そつちへ往つては方角が違うといはれて、赤面した。

此歳の四月に上野で大博覽會が開かれた。確か權現の森の處であつたとおもふ、一丁許りの間を雛型のやうな電車が通うのが、珍らしがられた事を覺えてゐる。

(3) 零點と百點

學校へは入學を許された、一時大阪町邊の、前に古びた木の井桁の格子造りの薄暗い家へ下宿して其處から通つた。外に相場でもやつてゐるらしい三十前後の前垂がけが居た、道化た顏の、相場師らしい鋭い所の無い男であつた。

或時此の男と戯謔てゐて、何心なく頭をたゝくと、其男が血相かへて、男の面體へ手を上げたと眞面目に嗔り出したので、悄氣た事を覺えてゐる。此の以來予は忘れても人の頭に手を觸れる事をせぬ。

大雪の日に番町へ往つて、其還りに腹痛を起して數日寢た。夫で學校に近い場處の下宿は運動が不足するから不可ぬ事に兄等が議決して、番町から箱崎迄毎日徒歩で通うことを餘儀なくせられた。

其歳の夏學校は箱崎から三田の薩摩原へ移つた。吾

等は又毎日番町から四國町へ通うた、丸の内を通ると汗塗れの身體へ砂埃が打つけて眼も口も砂利が一杯になる。随分辛かつた。夫でも長途の退屈まぎれに軒並に古本屋を冷かしては零簡斷墨の安物を買ふのが樂みてあつた。

其冬の或朝永田町を赤阪へ下る途中て、左の方に捲き上る煙を認めた、此は議院が焼けたのであつた。

學校の學科には殆ど趣味を感じ得なかつた、網の抄き方や、釣針の形狀や、釣糸の結び方などは、どうしても人並に理解されない。一體予は手でする技は下手てつた、左利は器用だと俗にいふが、予は極めて不器用な左利てある、十七歳の頃まで柿の皮も碌には剝けなかつた、觀世捲は固より、紙撚を撚ることさへ出來なかつた、中學校ても一番點の悪いのは習字と圖畫とてあつた。叔父の少い時祖父が掃除をせよと命ずると、自分の手て箒を持つ樣な下司な者にはならないと氣焰を吐いたさうだが、予は強ちそんな抱負があつた譯ても無いが、自分で手を動かさねばならぬ事は皆嫌てあつた、卒業試驗の時經濟と漁業法は幸に滿點てあつたが、釣に關する科目は零點てあつた、申譯許りの再試驗て漸くお慈悲に卒業させて貰つた程てある。

(4) パンの附け焼

正直にいへば予は學校に甚だ重きを置いて居らなかつた、卒業免狀を得て、夫て縣廳の技手になるといふ希望も持たねば、海邊に居を定めて網主にならうといふ野心も無い、予の入學の目的は寧ろ國を出る口實の爲めに過ぎず、從つて學校は胃病治療の運動の目的物たるに過ぎなかつた。故に予は出席簿の上には勤勉皆勤者てあつたが、教場ては眞面目な聽講者ては無かつた。暑い日など十一時頃から芝公園へ逃げて往つて、辨天池の藤棚の蔭のベンチて、一杯の甘酒を茶に代へて握飯を嚙つて、夫が濟むと朽葉に埋つた老樹の下蔭を縫うて山上へ出ては、海から來る凉風に襟を開きながら日ざしの傾く迄ロハ臺て雪齋百則などを讀んだ。此頃恰度露伴の『いさな取り』や『五重の塔』が國會新聞に出てる頃て、露伴崇拝者の一人たりし予は、露伴の

文字が禪に得た所が多いことを傳聞して、譯らぬながらに隙さへあれば懷中の碧巖百則を暗誦した者だ。

此歳の事であつた、米價が暴騰した。暴騰したといつても廿圓臺を超えた今日から見れば何でも無いが、當時に在つては、十圓臺を割つた事が、五六圓から七八圓を往來してゐたレコードを初めて破つたのである。勞働者は非常に窮困の狀態に陷つたらしい、予の毎日の食堂に宛てゝゐた辨天池のベンチには職を離れた勞働者がよく呆然(ぼんやり)腰を掛けてゐた。或時二十歳前後の左程怠け者でも無さうな若者に何故働かぬかと聞いて見た、働いて高い米を食ふよりジッとして腹を減さぬ方が宜いと答へた。必ずしも矯激の言でも無いらしかつた。先づ食を與へずして其の働かぬのを責めるのは一種の矛盾かも知れぬと、予は考へた。

藤棚の蔭の甘酒屋と並んでパンの附燒屋があつた、此のパンの附燒きといふ者が、初めて大道の露店に賣り出されたのも米價騰貴の影響であつた。半斤のパンを三片に切つて其半分づゝを串にさいたのを、蜜と醬油の附燒にしたのが一つ五厘であつた。米に代るべき食物として勞働者に最も珍重せられたらしかつた。今は知らぬが此の附燒は此歳を始めとして長く大福餅の店と大道に庇を並べてゐたものだ。

(5) 特色ある教師と生徒

創立時代の學校は規律の整はぬ代りに　人間を鑄型に容れないから、其個往の特色を損はない。又入つて來る學生も雜駁な代りに、何處か毛色のかはつた人物が多い。予等は水產傳習所の第二期生である、從つて生徒がいづれも常鱗凡介を拔いてゐた、教師にも面白い人物がゐた。

生徒中には三十歳を超えた田舍の篤志家らしい人もゐた、色の生白(なまじろ)い役者のやうな今でいへば色魔らしい者もゐた、肩を怒らして口角泡を飛ばす長州訛の男もゐた、口を尖らせて教師に議論を吹きかける東北辯の男もゐた。巢鴨から三田迄三里の路を徒歩で毎日通つた男もゐた、此人の先考(ちゝ)は攘夷論者で其子に夷狄の文字は堅く讀むなと遺言して死んださうで、輕薄な外國

風を敵のやうに疾んでゐた、此人は有生物は無生物から化生するとの說を堅く執つて動物の教師を弱らせたものだ、其代り詩や歌や俳句は上手であつた、面白くない學科の時には、予と隣り同士に座つて二人で俳句を作つては時間を潰した、卒業後此人の手紙をシャートルから受取つた時には予は奇蹟のやうに驚いた。同期生中で物質的に最も成功したのは鰤網で一擧に素封となつて今多額納稅議員に席を置いてゐる男であらう、確か魁偉な身體の五分刈頭で眼のクル〳〵とした無口な人であつたやうに覺えてゐる。

教師にも隨分種々な人がゐた。

農商務省の技師で養殖の科の教師であつた人の、塗板に講義の原稿と首ッ引で一書一書に撿ち上げる字の形は漢洋とも小供の手跡のやうな怪しいものであつた、釣針の講釋をした京橋邊の針屋かの主人も固より餘り學問の素養は無い人らしかつた。左樣かと思へば、漁業法の講義をした竹中といふ先生は天香樓叢書といふ編著さへある漢學に達した人であつた。農學士で動物の受持の教師は、氣海丹田の今でいふ腹式呼吸の効能を講釋した。海藻の講義をした若い理學士（或は未だ學生だつたも知れぬ）は眉の迫つた細面の人で、生徒が質問すると、五月蠅といはぬ許りに君等には譯らんと一喝してズン〳〵講義を進めた者だ。

予は國に居た頃、兄から送つてくれた『日本人』によつて今外三郎といふ名を記憶してゐた、此人が經濟學の講師であつた。予等の豫想に反して、小柄な色の白い眉目清秀な極めて若い優しい人であつた。ラヴレーといふ經濟學者の名を此人の講義によつて始めて識つた。

內村鑑三先生は、夏期の房州に於ける實習の指導教師であつた。英文の小說を讀んでゐたのを目附かつて叱られた。先生は腦の補ひになるのだとかいつて何とか燐を持藥にせられてゐた。先生がメスとピンセットを執つての魚の內臟の解剖よりも、予が箴言として服膺して今に忘れざるものは、僞君子となるなとの先生の一語である。此の一語は予が水產傳習所の一年半中

に於ける最大の獲物であるといつても宜い。

予は傳習所の卒業試驗前に、文科大學の選科の入學試驗を受けた。固より水産傳習所が予の目的の凡てではなかつたが、大學に入らうとは國を出る時には考へてはゐなかつた、予を發憤せしめたものは實に予の初戀てある。

(九) 初戀

(1) 女は汚はしき者

予の歷史は茲に多病の苦惱より善愁の煩悶に入る。

予は戀愛の經驗に關しては極めて早熟てあるともいへ、又極めて晩成てあるともいへる。

予は八九歲の頃既に戀を解して居た。併し夫は嬰兒が玩具を引きむしると同じ好奇心を異性に向けたといふに過ぎぬ者て、熱狂的な發情の充實も無ければ、傳奇的な空想の憧憬も無い、陽炎の樣に淡く、霞の樣に淺い謂はゞたわいの無い小供の戯れてある、眞に戀といふ名を下し得るや否は疑はしい。

此を除いて予は廿歲以前に異性に心を動かした事が無い。

恐らく此は通有な封建時代の餘風であつたらうが、殺伐な士風の我が土佐では異性間の戀は殊に賤められてゐた。予等の頭には少い時から男女間の制裁が嚴重てあつた、女子は汚らはしい者、女子との交際は男子を懦弱にする者、女子に媚ぶるは男子の恥辱てあるといふ樣な思想が深く浸み込んてゐた。村の若衆などは夜遊びと稱へて、娘のある家へ話に出掛ける樣な風があつたが、此んな仲間入りをするには、予には士族の子といふ自負があまりに强かつた。

伯母は內心其姪(伯母の弟即ち我が叔父の娘)を予に娶はす積りであつたらしい。姪を可愛がつては、其頃伯母と二人て棲まつてゐた家へ、よく連れ來たものだ。予には其從弟に當る女が頭瘡に罹つてゐるのが穢なくて、傍に寄るさへ厭てたまらなかつた、兄などに其女が自分の御嫁さんになるのだとからかはれるので、恥しくもあり、口惜しくもあり、夫て無くてさへ厭な其

女が益々厭て、其女の顔までが小憎らしいやうに想はるる樣になつた、蔭では氣の毒だと思つて居るが、側へ連れて來られると、何かなしに腹が立つてあてつけがましく殊更邪慳に振舞つた。

(2) 同性の戀

異性間の愛に餓えた我郷黨の青年は同性間の愛に其代償を求めた。吉田大藏と平田三五郎の情事を書いた『賤の小田卷』は武士道を以て潤色せる男色道の一經典であつた。今の青年が琵琶歌を朗吟する樣に、當時の青年は風凊き宵、月明き夜、此書の一齣を諷誦して其遣る瀬なき哀愁を漏したものだ。

同性間の愛は之を行動として形に現した時、固より法律上に禁ぜられた悖自然の所爲である、併し精神上に於ける愛其者は異性間のと異なる所なき熱烈さを有する者で、單に濃厚にせられた友情では無い、而して其の職業化せられた所謂孌童なる者は除外として、同性の愛は之を異性の戀に比すれば、柔婉の分子が少く峻烈な分子が多い、譬へば雛の節句の白酒と生一本の灘の銘酒との如き差別がある。異性の戀に於て男は情の沈溺を免れぬ、同性の戀に於ては寧ろ義の砥礪がある。

之をローマンチックに觀れば、同性の戀も異性の戀と同じく詩である。月夜に天吹を吹いて戀人の垣根の外に佇みつくす、賤の小田卷に見はれた切なき戀を、吾等は偏へに優しきものと感じた。予等は此に悖自然の矛盾を感ぜずして、寧ろ吉田大藏たり平田三五郎たり得ざることを憾んだこともあつた。

動もすれば同性の戀に傾かんとせる予は、其だけ異性からは遠ざかつた。

(3) 健康なる精神と不健康なる肉身

予は青春の血異性の肉の香に狂ひ易き危機を、病の苦惱に抑へられた。予の瘻せて殆ど肉をとどめざる病軀は、情慾の濁血を湛へんには、あまりに孱細かつた、猛き獸性を包まんには予が肉體はあまりに弱かつた、臟腑に嚙み入れる肉身の苦痛は、快樂を追はんには、あまりに予を沈鬱にした、予の心は當面の苦惱に擾さ

れゐた、暢氣な戀愛沙汰に勞する何の遑があらう。

肉身の上の傷みは精神を純潔にした、健康なる精神は健康なる肉體に宿るといふ事は一面の眞理である、併しながら肉體があまりに健康なる時、肉體は精神を支配して、精神の獨立を蹂躙する、寧ろ肉體の欲求あまりに重く精神は之がために壓れるのを免れぬ、之に反し肉體の弱まる時精神に對する逼迫の力を減じ、精神は自由に其活動を發揮することが出來る。此意味よりいへば肉體の病は直ちに精神の病では無い、否寧ろ肉體の病は肉慾的の濁氣より精神を離脱せしむるものである。

病は予が世界を鈍い重くろしい沈鬱な世界にした、予が心は、外に馳せて求むべき何物をも外世界に認め得なかつた。其結果として予が心は内に嚮うて或物を求めざるを得ない、予が心は内省的となつた。心が外界に樂むべき何物をも有せざる時、心が厭世的傾向を帶びるのは必然である、厭世觀に伴ふ者は即ち禁欲主義である。予は當時未だ哲學的に厭世主義禁欲主義の何者たるかを識つて居たのでは無い、予の思想は無意識に此兩主義に流れた居た。

五年間世界と離隔してゐる予は、夫だけ戀を知ることに於ても亦人間と離隔してゐたのである。

予が異性の戀の經驗が比較的晩いのは、此も亦一原因である。

然らば此の凋萎びたる生命に若さを還し、干乾びたる思想に潤ひを與へたる初戀の人は何者ぞ。

(4) 彼の女

彼の女。

是れ予が初戀の人なり。

予が予の初戀の人に關して語り得べき知識は唯此のみ。此以上、予は其人の名を識らず、姓を識らず、住址を識らず、身分を識らず、固より年齡も識らない。

識る所は唯其の人、較々面長なる氣高き顏を有する其の人、智の鋭さを示して切長く、情の柔かさをつゝみて瞼毛長き眼を有する其の人、微かに曲りて慈悲に匂ふ眉を有する其の人、其鼻の通りて品性を示し、其

口の締りて意志を示す其の人。

粗なる此輪廓以外に予は彼の女に關して何事をも語るを得ない。

戀愛は一種のインスピレーションである。電の如き直覺と夢の如き恍惚を有する、故に戀愛は咄嗟の瞥見に起り得る、必ずしも熟思熟考を待つて而る後起る者ては無い、純粹なる戀愛は利害の打算を超越すべき筈てある。

或は瞥見に成るは皮相てあるといふ、併し戀愛の透覺は神秘てある、其面容の偶然の一瞥を通して其人の凡てを解する、眼を以て視るとき、即ち靈を以て靈を視るのてある、識別ては無い感應てある、識別は智の努力を要する、感應は情の閃きてある、時、處を超越する。

或は之を進化論的に解釋して、最も完全なる蕃殖を遂げ得るに最も適宜なる性質を有する兩者が、自然の命ずる所によつて相投合せんとする本能的無意識的の牽引てあるともいひ得る。一瞥の感應は此牽引の表現に外ならぬのてある。

予は彼の女に就て何事をも識らない、而かも又彼の女の凡てを識れるを感ずる。

予が初めて彼の女を瞥見したのは紅葉館に開かれたる慈善的の演藝會場てあつた。

會には粧を凝した所謂貴婦人令孃が多く居た、但此頃は歐化主義の影響を受けて、婦人の鼻息が荒い時代てあつた、吾等が椽の柱の側に小さくなつてゐる、前を一言の挨拶もなく褄を蹴つて過ぎゆく無作法な貴婦人令孃も寡くなかつた。

此に比ぶれば場内の雜鬧を避けて、庭の彼方を、附添らしい二人の女を從へて靜かに歩を運ぶ彼の女の姿は、白百合の花を想はせる神々しさてあつた。

此一瞥は予の胸に終に消えざる印象を刻んだ。予は始めて戀の苦き甘さを味つた。

彼の女の面影は髣髴として予の眼底に留まつて去らぬ、視るものとして彼の女の面影ならぬものは無い、朝にも夕にも彼の女を心の中に偲んで忘れる瞬時も無

かつた。予は彼の女を思ひながら、彼の女を思ふことは彼の女を汚す者と考へたまで彼の女を深く想うた。彼の女は予には人間て無い、女神てあつた、天女てあつた、結晶した純潔てあつた、蒸餾せられた貞淑てあつた。彼の女は寧ろ予が心に理想化せられた美の成肉てあつた。

予はせめて今一度他所ながらにも彼女を見たいと思つた、朝毎に果敢ない希望を抱いて家を出てゝは、夕毎に失望を齎らして家に歸つた。

夢の跡を尋ぬる樣に再び見るべき的もない、名も知らず家も知らぬ人を戀ふ、是ほど空想な戀があらうか、併し飽までも空想なりしが故に、此戀は樂しかつた、此戀は貴かつたのだ。

予は彼女を竟に見ることを得ざる者と考へた。或は見得ることはあらう、併し見たりとも固より相語るべき機會などの得らるべき筈がない。萬々一相語るべき機會がありとするも、予は如何にして予が胸につゝむ思を語るの勇氣があらう。語るの勇氣はありとするも、如何にして予が思を語り盡くし得られやう。

予は何時までも彼を理想の女神として空想の中に崇拜しやう、予が思ひは終に通ぜずとも宜い、但他所ながらにも田岡某なる者の存在を、彼の女が認めるやうになれば足れりであると考へるに至つた。

夫には予は社會の驅逐場に或る名を成さねばならぬ、少くとも人に聞こえ人に知られるだけの名を成さねばならぬ。水產傳習所卒業生としては名の上に成功する機會が得難い、或は學問の上に名を起さねばならぬ、學問の上に名を得るには最高學府たる大學に入るの外は無い、而かも大學に入るには予は豫備を缺いてゐる、已むを得ない予は選科に入るに決心した。

予は其後彼の女を上野の圖書館に見た、彼の女が往くべき週の或る日を推定し得て、其日には予も亦必ず圖書館に往つた、せめては司書の人の彼の女を呼ぶとき其姓を知らうとしたが夫も無益てあつた。

圖書館に於ける彼の女は極めて質素てあつた、普通の入場券の所持者てあり、又單身て往來した。

彼の女の住地を知らうと其跡を蹤けた事もある、彼の女は何時も途中から辻車を拾うて乘つて歸つた、予は氣耻しくて車を追ふだけの勇氣はなかつた。

其内に彼女は圖書館へ來なくなつた。

其後學校を卒業した夏の或日九段坂を上りゆく途中て、彼の女が車て坂を下り來るにバッタリと出會つた。

此が予が彼の女を見た最後である。

今や予の女の存在は今予の胸底にある記憶のみてある。

背景の富士

黒頭巾

其一

●朝起、闥を排して出づれば、爽涼甚だし、蕭々細雨、青苔を濕して、シト〳〵として地に浸み込みつゝ、滿園の蒼翠、濕のかげに佇める佳人を觀るが如く、清々冷々の氣、人をして詩趣に沈ましむるものあるを覺ゆる也。

●椽端に近くして、小兒の造りし小池あり。その中央に、築きし小峰の上に、朝顔の鉢を置く。細雨翠樹の間に、ポッカリと大なる紅花の浮びて咲く。新彩、奕々、一杯に池水に映じて、金魚を染めつゝあり。

●此の清涼の中、暫らく、身は帝都に在るを忘る。雨歇み、日高くして、炎天、燬くが如し。いろ〳〵の旅行記など繰返しつゝ、一とせ涼しかりし裾野の畫趣を憶ひ出す。

其二

●熱つき日に、釜の中のようなる小田原の宿を出て、電車にて酒匂川の橋を渡る。窓を皆、明け放して涼む。二三丁もあるべく思はる川幅を橋下、水鳴つて濺々。

●畫趣を賞するは、汽車よりも、電車の方、殊に夏に可し。煤煙の患も無く、サッパリとして、浴衣の袂も、涼しくふくらむべし、

●左手に、水源に、遠く、富士山白く聳ゆ。水は、山の根より湧きて迸しるかと見ゆ。水沫を交ふる風は、富士山を涼しく感ぜしめぬ。

其　三

●熱つき日を、冷めたき溪風に吹き上げられつゝ、箱根の山に、蕨採りつゝ、富士山を眺めしとき、彼の嶺に掛る雲の、如何に、涼しくも、懷つかしくも思ひし。

●南畫の大家をして、曠世の筆を揮はしむるも、木賀の溪流には過ぐ可らず。

●彼の溪流に、一夜、心耳を洗ひつゝ、富士山を見上ぐれば、塵の烟を被りし都の富士山も、新たに、浴を出て、來りしかと疑ふ。

●箱根の古驛に宿して、晴れたる朝、蘆の湖に倒映する富士山を望めば、未だ洗はざる眼を覺ますに足る。

●箱根の山は到處涼趣あり。濕へる崖に沿ひて、山百合の眞白に、大なるが匂ひつゝ、嶺高き處には、細雨の中に、山花一時に咲き、鶯亂れ囀く。

●鶯聲、溪聲、吾が涼夢を吹くの處に、富士山を望むは、箱根の涼味なり。鶯聲、溪聲、唯だ、此の一點、山影に依つて活趣を帶び來る。

●涼を箱根に採る者は、富士山を見ざる可らず。箱根に遊びて富士山を見ずんば、夏の夜の、涼みあるきに淸き團扇を持たざるが如し。

其　四

●電車、小田原を離れて、溪流に沿ひて進めば、樹影漸く濃やかに、風次第に涼し。

●繪に涼しきは山家也。箱根の山に、「雲助」はふさはし。「雲助」の涼しきにはあらず、「雲助」の時代の、鄙びて、長閑なりし、並木の杉の滴たる翠色の空しく偲ばるゝ。

●吾輩も、一夏、足を痛みて、ドシヨ降りの雨を山籠に、舊街道を登りしとき、杉の梢の點滴の、ポタリ〳〵と音して、駕籠の屋根を撲ち、衣襟、皆、濕めりて、毀われて苔の蒸せし石磴に、重々く落ち重なる木葉を蓆の簾の間より眺めつゝ、「靑き雲助」の、山の噂さに笑を誘はれつゝも、時折り、冷やりとしては、襟を搔き合はせ、肩をすぼめつゝ。茶店に、駕籠を卸ろす每に、店の前の、山淸水に、咲き匂ふ白百合の巨葩に、

箱根の詩を讀む心地せられつ。

◉吾輩は、足痛に依つて、圖らずも、這般の奇景を得たり。爾後、また、雨中に、此の道を上下せず。若し、身、健やかなるの日、雨を得て、一笠一杖に、烟中の山影溪聲を看取するを得ば、興趣多かるべし。

其 五

◉吾輩、此のごろ、再び足痛を得て、溫泉に往かん事を思ふ。友人泰嶽居士、箱根ならば、木賀の龜屋に往けといふ。

◉龜屋は、天井も柱も神代杉を用ひしに依つて、元と神代樓の名あり。神代樓に宿して神代めく、雅談に耽るも面白かるべし。

◉吾輩も亦た木賀の溪聲を忘れ得ず、龜屋は山に沿ひ路を隔て、早川の溪流に臨む。一溪、別に、樓を遶つて潺湲として、窓々打ち、溪聲の間を「河鹿」の鳴く。

◉溪に沿ひし坐敷に、趣味の人と、趣味を語り、書を評し、詩を評し、晴に山を攀ぢて富士山を望み、雨に、碁を圍むべし。此の如くにして、淸興湧き想泉湧き、歸來、山土産の文章あらん。

其 六

◉蘆の湯も、强羅も、小涌谷も、靑綠の梢上に在り、秋來、紅葉の雲に包まるべし。堂ヶ島は、則ち、峯雲、溪聲の底に在り、其の危峰の下に設けし數家は、南畫の山水幅を、天井より見下すの想ひあり。

◉宮ノ下底倉は則ち夜趣を取る。底倉は、泉聲の愛すべきあり、宮の下は、富士屋ホテルの山に沿ひて巍峨たるに、奈良屋の路を隔てて溪谷に臨むあり。地勢も亦た自から、箱根の中心を爲し、晝は、繁華、野趣を歴す。

◉此の地、夜涼に步するに宜し、地、冷やかにして、到處に、街燈の人を引くあり。箱根細工の店に、老婦と、雲影燈影の變遷を語るも、涼み臺の詩材なる可し。

◉山に沿ひては、到處に淸泉あり、泉聲、坐敷を遶つて迸り、人語、蟲語すべて冷やかなり。

◉塔ノ澤、湯本に至つては、昔、早く既に開けて、頗る人寰に近し、百合花の香も薄く、夏鶯も聽くこと稀なるべし。然れども、地拓けて、樹は密に、風景の變化は、泉聲に伴つて多し。

◉大町桂月、先きに、都塵を此の地に避けて、岩崎の別莊に籠居し、靜かに、筆硏を事とす、寄書していふ、今、金屛風と泉聲とを伴とす。君も亦た一游を試みよ。

◉泉聲は金屛風の背景には、必ずしも調和せず。然れ

ども、金屏風の古雅なるに、泉盤の投げ付けるやうなる間に、仙人のやうなる桂月が、想を練りつゝ筆を運ぶは、涼しき書趣ならん。

其 七

●箱根案内の冊子は、必ずしも少しとはせざれども、名勝を傳へて凉風を傳へず、材木を運びて、翠光を運び來らず、詩も無く畫も無く、趣味も無ければ也。

●膝栗毛の一書は、地理書には非れども、「東海道」の印象を人に感ぜしむるは深し。膝栗毛には、小田原の宿屋に、北八、下駄を穿ちて据風呂の底を踏み拔く。箱根には、別に面白ろき事も書かずと雖も、此の難關を渉るの前、先づ、此の喜劇一番無かる可からず。

●馬琴の羇旅漫錄は、觀察あり、趣味あり、然れども、箱根に宿しては、唯だ雨に鎖ざされし事を記すのみ。彼の不健全なりしか、或は、彼の、此の深山に默契するありて、秘機を漏さゞりしなる乎。

●美しき初花は、山色の蒼莽たるを背景として、更に、其の優さし味を加ふ、此の戲曲の、廣く箱根山を美化して響かせしも、亦た、山靈の靈現なる可き乎。

●弘化の末年ごろに出版されし箱根案内の一書は、文人風に粗書に、此の深山を紹介して一機軸を出だす。現代にも、亦た、這般の趣味ある一冊子ある可きなり。

●此の書には、當代の流行兒を七湯に配當して畫く、山柳や、劍山や、美岐あり、藝術家あり、湯本の宿に都々逸坊扇歌の飄々然たる、宮の下に、井上文雄の坊主頭が坂を登りゆく姿、とりぐに面白ろし。

●扇歌は、此の頃、五十一歳ばかりなるべし。彼の全盛時也。文雄も亦た四十七八歳、歌嚢の涼風に、ふくらみし頃なるらし。

●温泉の浴後、溪風に淺酌して、扇歌の都々逸を聽きしは誰なるらん。昔の雅人、閑にして奢ならず。

其 七

●富士山光の照映するところ怪物あること無し。ありといへば、三保松原の天人くらゐなるべし。

●菊池三溪の本朝虞初新誌、湯本より溪を過ぎ、荆棘を分つこと里許、壁のやうに厚き森の中、一眼寺ある事を記す、彌陀も、僧も小僧も獅子も、何も皆な一眼也。

●吾が近世の漢文を以て妖怪を說く者、此の文の如きは、傑作たるを失はず、背景も佳、文情頗る密。

●箱根の凉夜に、怪談を爲すも亦た一興なるべし。蘇東坡は、政を談じ、文を談じ、興猶ほ盡きざれば、つ

ねに、妖怪を談じて倦まず。

◉今は、電燈、草露を照らし、一眼寺あること無し。昔し、富士山光の照らし到らぬ隈には、近き箱根山の隅にも、此の如き一眼寺もありしなるべし。

其八

◉誹諧に、雪は冬なれども、富士山の雪は雑の部に入るべし。赤人の田子の浦の歌を、新古今に、冬に載すれども、萬葉に、既に、「ふじの根に、降つむ雪は、水無月の、もちの日消えて其の夜降りけり」の歌あり。

◉兼藏式の百四十六首の中に、「四方山の雪は冬にて、ふじの根に降るは雑とぞ知る可かりける」と言へるは可し。

◉富士の雪をして冬ならしめば、涼趣あること無し。夏、消えて夏積み、嶺上、つねに萬古の雪あり、涼風は、特地に、此より吹き來る。

◉富士の涼風の吹き冷ます處、裾野の花も、箱根の鶯も、共に雑の部に入るべし。都の夏を、裾野に秋草亂れ咲き、箱根に春禽飛び鳴く。涼風の源を尋ぬれば、富士の高根に、眞白の雪あり。

其九

富士の八合目あたりといふも餘りに高し。二合目より四合目あたりに、程好き宿屋の出來るに至らば、富士山は、東海第一の探涼地となるに到らん。

◉吾輩、登嶽の途、須走驛に憩ひて、如何にも探涼の好風景を感じたり。宿屋の脊戸に、草花の咲き溢れて、花の梢に、涼風の富士見ゆ。

◉山の室は、未だ淹留するに適せず、山に近くしては、吾輩は須走を愛す。甲州街道の馬車、つねに往來するも、村驛の野趣を添へ得て可し。

◉吾輩は、平原にばかり生立したれば、せめて一夏を、これ程の山驛に送りて、涼風の富士に、吹かれつゝ、一篇の文を留めたしと思ふ事あり。

◉富士の裾野は、吾が山岳國の一大名勝たらずんばあらず、裾野の原始的草原の畫趣は、斜めに須走に向つて展開す。

◉吾輩が須走を探涼地に推すも、併せて裾野の研究を勸むる所以ならずんばあらず。

其十

◉「杜に絡(から)む葛蔓、糸瓜の花の亂れ咲き、住み荒らしたる賤が家」吾輩が、裾野を下りて御殿場の在なる農家の茅屋を見出したるときに、此の句を憶ひ出し、村趣に、滋味を思ひ、夕暮の風、殊に涼しかりし。

●大岡裁判の水呑村九助の尋ねゆきし九郎兵衛とお里は、眞に、此の如き家に居りし乎とも思はれしは、彼の茅屋也。

●吾輩を以て見れば、水呑村九助は、大岡裁判に於ける、尤も趣味ある傑作ならずんばあらず、馬琴の慧眼なる、流石に、逸早く、之を看破して、之を越後傳吉と合體せしめて、脱體せしめ、補綴せしめて、磨ぎ上げて、二夫川の莽吉と爲せり。唯だ、彼が、富士山下の九助を拉し去りて、遠く番場、醒ヶ井の間に生れしめたるは、凉風時節、富士山下の話題の一を減却せり。

●是等の茅屋は、ダラ／＼下りの傾斜に、むかしの御殿場の驛を見下し、金時山に、旭日の登るを望むべく、青田の風、家のまわりの森を透して薫ず、曲がる角に古木ありて、石地藏の立てるなど、クラシカルめきて可し。

●これ等の茅屋の背景は、頗る奇趣あり。夕陽は、富士山に隱れて、蒼茫たる夕暮色、一杯に、青く、脊中を染め來る。裾野の草原には、ところ／＼、濶葉樹や針葉樹の森の濃き綠の點を、圓ろく印し、或は、並木などゝ綠點の柄のように續きたるもなれば、恰も、大なる秋田蕗を押したる青襖を背景にしたらん心地すべし。

●日本の舊火山には、富士の裾野よりも、更に、形情の完美なる裾野を有する者無きにあらず。例へば、雲、石の間なる三瓶山の裾野の如き、此の種の模型とすべきものあり。然れども地低く、且つ其の展開する緩傾斜が、平原に終りて、直ちに海に到らず、這般の裾野の村は、背景ありて前景なし。

●蓋し、裾野を襖とし、東海を前庭とする、御殿場の凉しき花坐敷の如きは、天下一品なり。

●古の詩人、歌人は、裾野を、よそ／＼しく遠く見て過ぎ、御殿場も、須走も、共に名所とはならざりき。「富士の裾野の村」は、今の詩人が、拾ひ得たる名所ならずんばあらず。

其十二

●小兒が「自然」を評するを聞くに、面白ろき事を言ふ、時ありて無韻の詩を吐く。大人も容易に言ふ能はず、眞に、天籟なりとて驚嘆に値することあり、其の實、小兒は、自から感覺するのみ、味へ／＼には非ざる也。

●吾輩、「裾野」の語に對して、また、此の嘆を發す。「裾野」の一語、如何にも、美しくして、意を盡くせり。

實は、古の歌人、唯だ、其の美に打たれて、感じて、詩のやうなる此の語を發せり。裾野の美を味ひ、之を發揮するは、今の詩人に留與されたる恩物ならずんばあらず。

◉裾野の語人慕つかしき感覺を與ふ。裾野の美は、唯だ、裾野の語に盡く。美は感じなれば、裾野の語に、天籟を聽くに若かず、細々に之を解剖するは、批評なり、興趣を失ふ。

◉吾輩、曾て、登嶽記に於て、裾野の富士に於けるは裳裾の麗人に於けるを聯想するを記せり。此の感、古今人、一樣也。

◉裾野の語は、鎌倉時代に始まるに聞く。後土御門院の御製に、旅人の裾野の原の語見ゆ。

◉謠曲には、早や、裾野の語、多くして必ずしも列舉するを要せず、然れども、賴朝の巻狩の時、五郎十郎の仇討の時、未だ裾野の語は文學に見えず。

◉裾野といふは、麗人の裾の花模様あるにも喩へしならんも、白衣の花裾も好けれども、寧ろ、準人美の富士山は、その曲線の裸體美を採る可けれ。薄き衣の花裾著けたらんが、雪の肌を見せたるにも想ひ到る可き也。

◉裾野の花は、芒、桔梗、刈萱、女郎花、男郎花、薊など、平原の秋草の一時に亂れ咲く花模様を爲す。登山の時節、恰も花模様の匂ひ新たらしき時也。既に、登嶽の遊を爲せる者は、須らく裾野巡を試みよ。

◉實に裾野の花は美し、就中、行きて湖水に到れば、花裾を曳きつゝ明鏡に映ずる麗人の裸體美の畫趣を得るならん。

◉裾野の美しきは、花模様よりも、新綠の時に在るべし。裾野は、花模様といはんよりも、綠の地摺といはんが、妥當なるべし、淨瑠璃に、いへる『裾野に響く草刈笛』も、「自然」の大なる麗人の、裾を曳く、小さゝやかなる響にも聞き做さるべし。

其十三

◉富士山の畫の爲めに、古來、耗盡せし筆數は、積めばやがて、愛鷹山ほどにもなりぬべし。いつも〳〵眞白の富士のみにて、日々、時々に日影、雲影に變化する富士の色を描ける者、未だ有らず。氣象萬千の語は餘りに、粗漫にして、富士山の美を發揮するには足らず。

◉流石は、女作家也、逸早く、富士の色を描けるは、「色濃き衣に、白き袙(あこめ)著たらんやう」といひ、「肩のほ

とりより琴いと白ふかゝり、今めきたる裾濃の几帳など、たてたらんさま」といひ、いづれも、女性の觀察を示せど、されど、これ等とて、唯だ、淡然たる形容に過ぎず。

◉文晁と北齋と廣重と、貞秀とは、多く富士山を描ける畫家也。これ等の巨匠も、唯だに、その形態の美を得るに苦心して、その天然色の變化の美を閑却せり。是れ、彼等が、裾野の研究を爲さゞりしにも因らずんばあらず。

◉試みに、北齋の富士百景を見よ。背景の富士の變化しゆくに伴れて、彼の奇才も見ゆ。然かれども、あらゆる富士の皆、一色なりと見ゆるは、遺憾ならずや。

◉富士の裾野を背景に見て、探涼するの人、願はくは裾野の觀望を日課の一半となして、其の尅々に變化しゆく色彩美」を觀察し、研究せよ。涼しき、美しき詩的土產は、則ち是なるべし。

其十四

◉東海に一仙鄕あり、古來、和船業者には、熟知せられしも、其の地の僅かに、東海道を離れて半島に僻在するを以て、都人其の名を聞いて、其の地を知らず、伊豆の戶田は是也。東京より沼津まで、急行程三時間、それより聯絡汽船にて二時間、計僅かに半日程に充たず、紅塵、仙桃、兩地の相距る咫尺のみ。

◉戶田は、天ノ橋立を太く短く、濃く、其の翠色を密迫したるやうの、松の半島、左より斗出し、右は斷崖千尺に、弧松、奇雅に斜めに懸りて、相對して、灣の甕口を括る。戶田の町より見れば、恰も、此の甕口に、一杯に跨りて、富士の高根の眞白に見ゆ。

◉文晁は富士狂也。富士を寫して、韮山に至りて、絕好の妙姿を見得て、韮山富士を描く。韮山富士の名、これより著聞す。然れども彼は、戶田を知らざりし也。戶田の富士は韮山の、それと同型也。文晁の寫山樓は、まさに、韮山か戶田に築く可かりし也。

◉戶田は、吾が新文明史に、特筆さるべき一の名勝たり。下田に海嘯ありしを、露將プーチャチンが、此に避難し、幕府の許可を得て、此處に、假船渠を造り、天城山の材木を用ひて、新艦を修造せしところ。吾が邦に於て、西洋形軍船を製造せし嚆矢とす。海國の大日本に於て、豈に、紀念すべき一大事にあらずや。

◉戶田を支配せし代官は、江川坦菴にして、プーチャチンの造艦を董督し、其の配下の職工をして、技術を習得せしめ、他日、此に船渠を設けて、君澤丸を製造

するに至れり。是れ、日本人の手にて西洋軍船を造るの始めにして、其の職工は他日、雄藩に聘せられ、或は横須賀造船所に、或は緒明造船所を始め、私立の造船事業に從事する者あるに至れり。

◉吾が明治の造船業が、戸田に負ふところ多き、此の如し。造船の新光明は、此處の假船渠より、廣く四海に傳波したるなり。

◉戸田灣口より入れば、左に、當時の假船渠を觀、右に、松の半島を望む。正面に、戸田の町の、少し右に當りて、フーチャチン岬あり。松の半島は、今、東京帝國大學の運動部の經營に歸し、そのフーチャチン岬に面するの方面に、水泳場あり。フーチャチン岬といふは、帝大學生の命名するところと聞く。

◉戸田の町に入れば、露人滯在の遺蹟を始め、舊時の故老も猶ほ存する者少からず、郵便局の太田重郎は、幕府官人の宿處にあてられし處、猶ほ當時の家格を維持し、熱心に、遺事遺物を蒐集しつゝあり。其の餘、町長を始め、舊蹟保存に有志の士少からず。

◉吾輩、嘗て、觀瀾博士と共に、此地に遺蹟を探討し、太田君と町長との好意に依り、當時、露艦築造を手傳ひし七十以上の老人を町役場に招きて、舊話を聞きしことあり。いづれも、當時の圖面などを持寄りて、熱心に物語りしときの痛快事は、尙ほ忘れ得ず、眞に、此の大史實を、睹るの思ありしなり。

◉露人の宿營の跡を過ぐるころ、晩風漸く涼しく、富士山は、靑空に、濃鼠色を現じ來る。フーチャチン岬に到り、起重器の遺蹟らしき處にて、紀念にもと、人跡草など、ポケットに收むれば、日は全く暮れぬ。

◉翌朝、淸明、海風、涼しく松間より蚊蝿を吹き上ぐ起て、欄干に倚れば、鄙人の嫣然として、向ふに立てる姿哉。見渡す樓下より、新たらしき濃き碧海の、水平線に至つて、蒸發して空となりしにもあらん、透き徹ほる淸泉のやうなる水ぽき、靑き空に、輪廓のクッキリと鮮やかに、富士山の笑みつゝ、見れば見るほど次第に歩み寄りつゝある思ひするよ。

◉想ひ見よ。フーチャチンを始め、日本武士の厚意の立合の下に、日露人、入り交りて汗を揮ひつゝ、軍艦を築造しつゝあるを、背景の富士の、如何に、美しくも、引立ちしならんを。

◉露兵の、夕風に、歌ひつゝ涼みしといふ橋も、今に殘りて、名も無き小川の、富士の山光を宿しつゝあり。

●此朝、飯の前、濱風に、露の滴たる松の中の富士を脊景として、水泳部のコートにテニスに、先づ汗を流せしは、ラケット冥加にも叶ひし心地せし。

●歸路、濃雲、微雨。海上頗る奇事多し。今、其の一を記して、當時の感興を辿る。

富士一つ埋め殘して若葉哉

夏川を越す嬉しさよ手に草履

石工の鑿冷したる淸水哉

人物評論（十九）

東郷大將と乃木大將





△東郷大將乃木大將

文學博士　三宅雄二郎

二十七八年役も可なりに大きな戰役だつたが、敵が餘りに弱いのと三十七八年役の更に幾層か大きな戰役てあつた爲に殆んど全く掩はれて仕舞つた、如何なる人が何を爲したか最早や話の種にならぬ。三十七八年役は近世の世界に於ける一の大戰役で、之に與かつた名將は關係國ては勿論、廣く世界に知られた、日本は流

石勝つた丈あつて將校にも善いのがあつた、歷史的に武を重んじた上に、維新の役、西南の役、二十七八年役等、實戰を踏み經驗を積んだ力も有ろうが、將校の稱すべきものは少くなかつた。けれども誰が代表的に名望を集めたかといふに、普通の順序からせば總司令官大山元帥であるべきに、元帥は寧ろ飾り物の樣に考へられて居る、秩序を重んずる軍人の事とて元帥が比較的最も重望を負ふたに相違ないが、只重望丈で實際の活動は他人のした事と認められる。大閤時代の征韓役に總大將となつたのは宇喜多秀家であるが、實際の働きに於て加藤清正等が推さるゝと同じく、三十七八年役に大山元帥より他に國民に感謝されるのがある、是も隨分數が多い、參謀として兒玉大將、松石、松川等の少將等は皆手腕を稱せられる。が英國の戴冠式に海軍の東鄉大將と陸軍の乃木大將と並び派遣されたのは、必ずしも深い意義あるとはせぬが、世間で最も重きを置くも此二人である。當局者と世間一般とは往々見込の反對になることがあるが、二大將を重んずることは略ぼ一致し居る樣である、或は世界で最も二大將を重んずるから之を派出したといふ所もあらう、何にせよ二大將は三十七八年役に於ける日本側の代表者と見做して差支ない。

或は東鄉大將を仕合せものとする、功四級から一足飛に功一級と爲り、無爵から一足飛に伯爵となり、世界からはネルソンと並び稱せらるゝに至つた、仕合せものと言はゞ仕合せものだが、大將は寧ろ昇進の遲い方であつた。そして常に人に重きを置かれて居つた。二十七八年役の海軍戰功者は伊東元帥であるのに、元帥は戰役當時にも兎角の非難があり、或は先輩の樺山大將に依僞なくされて戰つたとも言はれる、人物は好くても技倆の方で重きを置かれなかつた。が其頃から大佐の東鄉平八郎は少からず望を屬せられ、聯合艦隊司令長官を命ぜられた時、海軍部内に適任者を得たと認められた。當時海軍は露國の方が優勢で之と戰ふは容易でないと考へられ、東鄉大將は兎も角艦隊を率ゐて敵の艦隊とぶつつかり、そして戰死する、日本は軍艦を修復し易く、露は修復し難い、某山大將が代つて司令長官となり、更に大に戰ふ、そして戰死する、我軍艦も損じ敵の軍艦も損ずる、が我は修復し得る、斯くて三度目で全く敵の艦隊をして再び起つを得ざらしむるといふ方寸であつた。然るに東鄉大將は無事無難に能く敵の艦隊を全滅した。何れかといへば豫想よりも好い成功で、誠に天佑といふべきである。果して東鄉大將の技倆であるか大將の技倆はネルソンと匹敵すべきであるか、之を決するは困難であるが、大將は沈着で事を苟もせぬ、そして決斷すべきには斷乎として決斷する、是丈でも我艦隊を統率するに適當して居つたであらう。旅順港を閉鎖すべき意見の出た時三たび之を斥けた、が遂に之を採用して實行することと爲つたが、人を失ふこと少くないので、内地の要路より之を差止むることと爲つた、けれども初め閉塞の議を容れなかつた大將は、一たび之を容れた後は何處より差止めて來ても應ぜなかつた、閉塞の效果は十分とは言はれぬにしても、何にせよ大軍を大陸に上陸せしめ得る事と爲つたのである。旅順港内の敵艦隊は不意打を喰はしたが割合に破損少く、海上に浮び出る丈に修復し、それにバルチック艦隊が回航し來る

の報道類である、處で我八島艦等の必要な軍艦が空しく水雷にかゝつて沈んだ、といふ時一時は士氣沮喪火の消えた樣であつたが、此邊で忍耐して徐かに必勝の計劃を立てたのは、參謀以下それぞれ人もあつたらうが、大將の沈着與つて力なしとはせぬ。柴山大將は勇を以て聞こえて居る、若し之をして長官たらしめたならば、或は一層花々しく戰つたかも知れぬが、長い間怺へに怺へて遂に全勝を收むる段は如何であらうか、東郷大將は慥に困難の際に重きを荷ふ器だ、併し五十九歲で初めて大任に當つたのである。樺山大將は黃海で老後の勇を奮つたといはれたが、それでも五十八であつた、伊東大將は五十二であつた、それから見ると東郷大將の顯れ方は甚だ遲い、大器晩成と言ふべきであらうか。若し戰役が無かつたならば三平八郎の第一に爲るどころか其の一人にもなれず、海軍部内にも平八郎といふのがあるといふ位に止つたらう。

乃木大將は東郷大將の如くに惣大將ではなく、一方面の將である、けれども最も樞要の地たる旅順要塞を攻め落したので赫々の名がある、併し旅順攻圍軍は戰役中最も慘憺たる經驗のあるもの、即ち隊に次ぐに隊を以てして全滅した、敵の要害はベトンで固むるとか、鐵條網を張つて電氣を通じあるとか、機關砲を備へ居るとか、今更の樣に言はれたが、元と要塞として當然の事である、それ位の備はきまりきつて居る、一氣呵成で乘り取らうとすれば多くの人を失ふのは知れ切つて居る、それをも構はず突貫で攻め落さうとしたのは事の宜しきを得て居るか、後に普通の攻城法によつて土を掘つて進んだが、初から其方法を取れば何事もないのである、それを宛かも南山を落した樣に一氣に攻め落さうとしたのは、或は責を參謀長に歸するものもあつたが、實は已むを得ぬのであつた。若し早く旅順を落さなければ、バルチック艦隊が回航し來つて由々しい大事となる、多く人を損じても早く落さねばならぬ、疑問は遮二無二進んで落し得るか否かといふ事となるが、若し今一師團もあつたなら或は陷し得たかも知れぬ、然るに兵は無い、空しく損失を忍んで更に土を掘つて進むことと爲つた、敵の要塞の下に死んだものは誠に災難であつた。が多數の兵を失ひ、計畫に仕直しをし乍ら、何人も攻圍軍の無謀を責めず、陸軍に於ける第一の功を以て之に擬するのは實に乃木大將の人格の然らしむる所で、若し之をして他の大將であらしめたならば、或は種々の非難が起つたかも知れぬ。令息二人、少くも一人は死なないでも濟んだのである、が人の之を安全な位置に移さうとするのを特に危險に立たしめた。實は初から棺を三つ出させる決心であつたのである。そして幸か不幸か大將が獨り生き殘つた丈の事である、兵卒は皆之を知つて居つた、如何なる困難があつても大將の下には不平を言へぬのである。

戰略に於て大將に優つたものは他に在らう、が司令官として人格の必要な事は、大將が後の人に之を示して居る、人格と技術と往々相伴はぬ。ナポレオン帝の下にマッセナは能く戰つた。實に猛將であつた。併し錢を貪つて至らざるなく、帝も之を心配し、金を與へるから貪るなといつたが、貪る癖は止まなかつた。我將校に斯く迄著しいのはないが、幾分

か非難あるものはある。此點に於て乃木大將のあるのは日本陸軍の名譽と稱しても宜い。戰功を別にし、ガリバルヂーだの、ゴルドンだの、ストーンウオル、ジヤクソンだのと同じく、東洋ならば古名將の俤ありとし、西洋ならば希臘、羅馬の賢人の俤ありとする所である。曾て大將は臺灣總督として失敗した、兒玉總督の巧なのと大に違つた、が失敗し乍ら後次第に人格の純潔なるよりして重きを爲した所、旅順攻撃で一時失敗し、次いで功を收めたのに似て居る、人格に於ては東郷大將も宜いが、職分を重んじ一毫も之を苟もせぬ所で相似て居るのであつて、乃木大將の樣に著しく人に變つた所はない、先づ普通より謹嚴なのである。乃木大將は人に變つて居るけれども窮屈な樣で窮屈でない、謙遜である。普通の談話をも交へる。併し其間に挺古ても動かぬ重い所がある。東郷大將は餘り普通と變らぬが、沈默である、併し窮屈でない、能く人を歸服させる所がある。けれども沈默は沈默である、ネルソンよりもグラントの格である、が其沈默も或は年功から來て居りはせぬか、以前まだ位置を得ない頃、領事館などで小六かしいことをいふので困りものとなつたさうである、小六かしい事を言はうと思へば隨分言へぬのではあるまい、その嚴格にして而も悠容迫らず、全體を統轄するの態度は幾分か修養から來て居るとも思はれる。乃木大將の父は大將よりも一層嚴格であつたとの事である、大將の性格は遺傳的であらう。東郷大將は薩摩の氣風の善い所を得たもので、乃木大將は長州の氣風の善い所を得たものである、が曾て西郷南洲は子孫の爲に美田を買はずといふを家法としたが、今は長州の方で之を家法とし居る乃木大將の如きがある。東郷大將は餘り人に變つた事をせぬのだが、隣隣に何人か變つた事をするのが有つてもよいではないか。

△日本の二大國寶

池邊吉太郎

軍隊のことは私はよく知りませんが、隊長に對して其部下のものは、絶對の服從をしなくてはならぬ事になつて居るでせう。或程度まで隊長に對して自分の意見を言ふといふ事は勿論許されて居るに相違ない、が場合によつては、多少の意見を有して居ても、それを言ふ機會が絶對にない事があらう。さういふ時は絶對の服從といふ事になる。だから原則からいへば軍隊では絶對の服從といふ事になつて居るでせう。

處が、誰だつても、相當の智恵のある人であれば、人を見て其人の長所短所が見えないといふ事はない。隊長に對してだつて無論見える。長所丈け見えればよいが、短所も見えへと絶對の服從が困難になつて來る。短所が見えれば見える程、服從に條件がついて來る。詰り仕方がないからといふやうな事になる。只許されるのは、どんな短所があつても、其短所が罪の無い短所、非難すべからざる短所であると、服從するものに取つて極めて服從し易いといふやうな事が起つて來る。それから又其短所の持主が、自分の短所を知つて居ると、其れを補ふ爲めに人の長所を

るといふ事が眞面目な人であればある程、起つて來べき筈である。

日本の軍人の中にも悉皆完備してちつとも短所を有たないといふ人は絶對にないかも知れぬ。けれども短所があつても、前にいつた罪のない短所、非難すべからざる短所、人の長所を取り入れて自己の短所を補うて居るといふやうな人は隨分澤山あらうと思はれる。まア今の隊長の隊長、將に將たる人は大抵それなんだらうと思ふ。黑木などいふ人は最も其仲間へ入るんでせう。然し其資格が備つた上に、も一つ必要なのがある。それは果斷だ。決斷すると、何がどうあらうと其儘に一直線に行くといふ勇氣だ。いくら虚心恒懷に人を容れやうとしても其機會が無い事がある。自分一人でやられればならぬ事がある。其果斷たるや目を閉つて富士山の頂邊から飛び下りるやうな事もせねばならぬ。盲人蛇に怖ぢずといふやうな盲勇でもよい。軍人には時として盲勇も必要だ。盲勇でなくして、相當の智惠から割り出されたのなら益々よろしい。かういふ勇氣は東郷さんも乃木さんも隨分持合せがある。生れながらにして持合せても居るし、又練習の結果もある。乃木さんの方は殊に練習の力が多いでせう。乃木さんのあの旅順攻撃については隨分異論もあり攻撃もあるでせう。何故まだ準備の整はなかつた二〇三高地を最初に攻めずして、準備の整うた方面から攻めたか。最初に二〇三高地を取つて旅順港の中の軍艦を沈没せしむれば乃木軍の任務は終るのである。さうすれば三十八年一月一日を待たずして旅順が陥落した、バルチック艦隊が根據地を出發しない前に旅順の形がついたかも知れぬといふ說もある。さういふ意見を立てた人は、旅順攻撃軍の參謀の中にもあつたらうし、又其他から建白した人もあつたに相違ない。どういふものであつたか乃木さんは之をやらぬ。そしてウンとやりしくじつた後に漸く氣が附いて、やり直した。けれど其時はもう露軍に自信がついて、なか／＼冑を脱かぬ。滅法人を損じて、惡戰苦闘した上で二〇三高地を取つて形がついた。乃木さんは後になつて二〇三高地を取ることに決斷したのだが、其決斷は隨分長い。其點からは智謀とはいへまい。智惠の方からは乃木さんに缺點があるものと斷じなくてはならぬ。處が其缺點についても乃木さんは誰からも酷くいはれない。極く罪のない缺點と見える。あの人の勇氣は果して盲勇であるか、智勇であるか知らぬが、大將としては餘程よい人だらうと思ふ。絶對の服從を部下から得るばかりでなく、國民全體をも或場合には指揮し得る人らしく思はれる。

東郷さんの方は戰爭中、殆んど非難さるべき缺點を示さなかつた。旅順封鎖の際大きな軍艦を失つた。これは毎日同じ道を通つて終に露西亞の水雷にかゝつたのだと多少非難する人があるかも知れぬ。又浦鹽艦隊をやつつけ得なかつた上村艦隊の責任をも、聯合艦隊司令長官たる東郷さんが負ふものとすれば、之も非難する人があるかも知れぬ。又戰略でなく、戰術上から、艦の廻轉し方や何かについて多少批評に上るべき節があるかも知れぬ。けれどもそんな過失は過失とならずして、却て東郷の大をなす所以となつて居るものが多い。矢張り武人としては、成績の上からは勿論だが、裸にしてかゝつた所で、乃木さんよりも上だかも知

れぬ。尤も東郷さんに無いものを乃木さんが持つて居るといふ事もあらうが、どうも東郷さんの方が一枚上の樣な氣がする。其結果今日の如く世界的名譽を二人共持つて居るのであるが、こいつが日本の一つの强味になる。東郷さんが用ひられ、乃木さんが用ひられて居ると、若し萬一日本を敵とするといふ國があれば、東郷と乃木といふものは其國の計算の中に入つて來る。少くも戒心をする。戒心する丈け用心をする。それ丈け日本の强味になる。先づ日本の國寶であると私は思つて居る。成るべく長生をして欲しいものと思ふ。

又幸にして此二人は平時に於ては失敗の仕樣のない地位にあるので、永く名譽を保つて居るのである。此二人は政治上には丸で野心がない。丸で政治といふ事を知らないやうである。戰爭て名聲を博した軍人が、政治上に野心を起すといふ事は何處の國でも有り勝ちな事である。日本の武人にはそれがないかといふに、大いにあつた。東郷乃木などいふ日淸戰爭日露戰爭以後の武將の中には少いが、昔は可なりあつた。そして東郷乃木の二人は野心のない中でも特にない方だ。それだからして平日失敗の仕樣がない。これが名譽を保つ上には消極的ではあるが殆んと遺憾なき强味を有つて居る。只普通の政治ばかりでなく、一の政治問題とも見るべき軍隊の組織などいふ事についても、二人共勿論說はありませうが、是非斯うせねばならぬといふやうな事は、或程度を超えては主張しますまい。術略を施してまでもやらうなどゝいふ事はありますまい。だからいよ／＼以て無礙になる、これが又この人達の身を保つ上に於て都合がよいのみならず、併せて日本の爲めにもなるのである。惡るい方から考へると、日露戰爭の後、政治に野心でも起して總理大臣にでも押し上げられて、見苦しい失敗でもすると、折角の名譽に取返しの附かぬ疵を附ける事になる。那翁をやつつけたウエリントンなども政治に手を出して大味噌を附けた。今日までの處東郷さんも乃木さんも全く失敗をしない。政治にはちつとも慾がない。又無能である。今後も多分さうだらうと思ふ。誠に仕合せな事と思ふ。

△東郷乃木兩大將

○學博士　柳陰漁客

東郷乃木兩大將を比較して考へるに、共通點は慥にあるらしい、共通點といふべきか、兎に角似た所がある、孰れも寡言沈默の人て、更に手短く言つて見れば不言實行の人の樣である、又孰れも戰功赫々の人だから、仲々尋常人とは變つた風采の偉丈夫だろうと想はれ樣なれど、何ぞ圖らん兩大將とも容貌魁梧などいふ所は更に見えぬ、尤も日本人としては大して小さい方でもなかろうが、さればとて、図抜けて大きくはない、西洋人に比ぶれば無論小さい方である、今度兩大將とも英國の戴冠式に行かれたに就いては、定めし彼地では、共武名の赫々から聯想して、何處か變つた容貌の人物であらうと期待したかも知れぬけれど、親しく兩大將を見ては、迚も左樣な英傑とは思ぜられぬ程である、又兩大將とも

仲々質素である、驕奢など見らるべき點は少しもない。それから乃木大將の如きは頗る謙遜の人であるが、東郷大將の如きも矢張り左樣いふ方だらうと思はれる、兎に角兩大將の間には似た所がある、共通點と初に言つたのは此樣な點を言ふのだ。

が兩大將の性質には又稍々違つた所もある、否、稍々ではなく大に違つた所もある。東郷大將は英國に於て學ばれたものだから英語に通じて居らるゝに相違なく、今回も英國で英語演說をされたといふ樣な事が報ぜられて居る。乃木大將は英語には通ぜられて居るまいと思ふけれども、併し獨逸へは留學して居られた、尤も滯在日數は餘り多くないから、どれ程迄に學ばれたかは知らぬけれども、兎に角獨逸語には通じて居られ樣とおもふ。とすれば學ぶ所にも已に違ふ所がある。

東郷大將とは親しい交際がないから分らぬが、只傳聞によつて話すのだけれど、聞けば極めて愛想のない人だといふ事だ、人は誰だつたか知らぬが、嘗て東郷大將が外國の軍人を招き宴會を開かれた事があつた相だ、勿論西洋の風に從へば、主人公たるものは、當日の賓客に對して色々話し掛け、興味の盡きぬ樣にするのが禮である。然るに其時東郷大將は、只皆に向つて愛相よく語られぬといふばかりでなく、主賓が直ぐ其隣席に居るにも拘らず、沈默勝ちに、只フオークとナイフをのみ動かして食ふものをのみ食はれたといふ事である。左樣いふ所から見ると無愛相である、一體沈默家で、他人に對して面白い話を仕掛けるといふ樣な事はない、交際には注意せぬ樣に見える、兎に角餘程變つた處がある。同じ寡言の人といつてもさういふ點では乃木大將は餘程愛想がある、言はずに濟む處は固より言はずに濟ますといふ處もあるけれども、併し愉快に挨拶し、交際を全うするに勉められる處が見える。それなら立つて演說でもされるかといへば、左樣いふ事は滅多にない、成る丈避ける方である。即ち演說は誠に嫌である。嘗て帝國教育會で吉田松陰の五十年祭をした時にも乃木大將は演說をせず、只松陰の士規を持つて來て朗讀された。先づ此の通り演說はされず、されゝば極めて簡單なものである、然らずば士規の朗讀位で止される、東郷大將は時々演說をされる樣だけれども、平日の樣子は前述の通りである、それは心からの無愛想ではなからうけれど、少くも形式上、外部に現はれた限に於ては左樣である。

東郷大將には又意外な事がある、目黑不動の信仰者と聞いたが餘程妙な事だから、聞き糺して見ると、海軍の軍人は其事實を否定して居るけれども僧侶連より聞くと、矢張り信じて居られるのみならず大分寄附をもされた樣子である。更に鹿島の人に聞いたら、それは一向怪むに足らぬ、鹿島では古來不動を信じ、之を兵道といつて居ると、是は武士には寂然不動の修養を要する所から來て居る事と思はれるので、東郷大將には佛敎そのものは信ぜぬ乍らも不動だけは信ずるといふ樣な事があるのだらう。是は傳聞に基づく私の考で……東郷大將の目黑不動を信ぜらるる精神の果して此の如きものであるか否かは知らぬ、が目黑不動を信ぜらるゝの一事だけは慥な筋から聞き得たものだ。

乃木大將は此點では餘程違ふ。乃木大將は左樣に佛法の佛などいふも

のは信ぜられぬ方である。乃木大將に三嫌ひありとは能く人の言ふ所、一には女、二には商人、三には僧侶是である。卽ち佛法などは大嫌ひてある、從つて不動の如きを信仰される事はない。何れかといへば乃木大將は先づ神道側の人といつて宜からう、それも只神道側といふたけでは語の不備を免れぬ、卽ち乃木大將に至つては單に日本の神を信仰するに止まるので、つまり純粹の日本的精神から來て居る丈の樣である。

乃木大將は平生學を好み、絕えず攻究して居られる、それは何ういふ種類のものかといふに、先づ武士道の書、兵法の書、それから神道、國體等の書である、此間新聞て見ると兩大將の船中に於ける讀書振が傳へられて居る、乃木大將は變つた種類のものを多讀され、東鄕大將は同じものを長く通讀される相で、是に對する外人の評も見えるけれど、固より皮相の觀察で當つて居らぬ、總じて物を表面からのみ見るゝ大きな間違のあるものだ。乃木大將の多くの書を讀むといふのは決して上走の多讀でない、熱心に攻究されるのである、パッ〱と只目に之を迎へ之を送るといふのでなく、十分勉強の結果が、遂に多讀となるので、一般に多讀といふに伴ふ樣な惡い意味はない、東鄕大將には左樣な硏究心のないのでは無かろうか、一部の書も自己の好むものであれば精讀もされ樣けれど、乃木大將とは違うらしい、乃木大將の硏究といつても、其硏究なる語の意味は今日の專門家のやるそれとは違うであらうが、併し硏究は矢張り硏究であるに相違ない、其他又書も書かれる、詩も作られる、歌も詠まれる事がある、そして何れも相應に見事に出來る、東鄕大將も大分書を書かれる事があり、筆蹟も亦見事な樣だけれど、詩や歌に至つては作らるゝ事があるか否かは一向知らぬ、が左樣いふ樣な事は餘り無いのじやないかと思ふ。乃木大將は此邊に慥に技倆がある、此邊が兩大將の趣味の上に相違のある處ではなかろうか。

それから敎育家として見る時には乃木大將は寡言沈默で而かも實行を力められる處が宜いが、更に其上に勉强され絕へず硏究される所は、學生等から見ると、院長が彼樣だからといふので善い刺激となる事だけは確かである、その上學習院の院長室に來て極めて質素な生活をし、艱苦に堪え、又婦女子の如きにも遠ざかり、さる關係は更にない、慥に敎育家としては一種尊敬すべき人格である。

此側では東鄕大將にも似た所がある、委しくは知らぬけれど、今語つて此に至ると日露戰爭の當時の光景を偲ばざるを得ぬ、新聞の傳ふる所によれば、大將は出發の當時に風邪を引かれた樣子。それ故夫人があなたは御風氣だから今日の御出發は如何でせうか、今少し御養生なさつたらといはれると、大將は蹶起夫人をブンなぐつて、何にといひさま飛び出された、其れを見送りに令孃が新橋まで行かれ、徐ろに大將に向つて、母上は何も御存じなくて言はれた事だから、御詫をなさつてと請はれ、遂に其御詫の詞を大將から得て歸られた相である、實に當時の東鄕大將の勢といつたら非常のものと想像する。露國側では如何であつたか、ステッセルを初め夫人を連れ、夫人を連れた將校は少くない、それのみかは更に怪しの看護婦、卽ち看護婦兼何々といつた樣なものも、更に又變

なものども居つて軍隊の間を往來した趣は、當時の報道に因つて記憶して居る。日本では左樣でない、女氣のないどころか、女をブンなぐつても飛び出す、是が東洋軍人の有する特色であるが、此邊に至ると東鄕大將も乃木大將と似た所がある。兎に角兩大將の比較には趣味の大なるものがある、啻に後の軍人の學んで模範とすべきのみでなく、軍人以外のものに取りても大に學ぶべき所があろうと思ふ。

何うも人といふものは凡てを具備する事が難い、天は容易に長所の盡くを一人に與へぬ樣である、與へぬとは限りもしまいけれど、通例は與へぬらしい。彼の渡邊國武は色々の事が出來る、大藏大臣もやつて財政に大なる技倆があるが、それにしては意外にも禪をやる、書も書ける、詩も作れる、歌も詠めるだろう、實に多藝多才である。けれども或る處で彼の人の演說を聞いた事があるが、それは見すぼらしいものであつた。十五分ばかりも小さな聞こえぬ樣な聲で分らぬ事を喋り、末には野狐禪の樣な事をいつて引込んでしまつた。此時に私は考へた、天は實に凡てを一人に與へぬものだ、彼の多藝多才の渡邊にして演說が不得手であると又彼の大隈伯の如きは政治家として傑出の人である、失敗はしたけれども、兎に角政治家の巨頭には相違ない、いや失敗したとはいつても其間に成功も確にあろう、又其辯舌の達者な事は人の皆知る所。だが筆は一向立たぬ、彼れだけの才と辯舌とあり乍ら筆は拙いと見えて伯の文章なるものは一向ない、斯かる例は有名な人に就いて調べて見ると往々發見する所である、兩大將の如きも大層偉らいけれど、其偉らい所は共に不言實行の處にあるので、泰平の世に於て華やかな演說をやり、世を賑はすといふ樣なことには甚だ物足らぬ所があろう。それ故差當り戴冠式といふ樣な派手な場所で能く社會の要求を充たすことは無理であろう。併し其側で物足らぬ所が即ち兩大將の共に他の側に於て大に力ある所以であろうと思ふ。此等の點に於て兩大將とも深く自ら顧み、能く自己の長所短所の在所を自覺すべきであろうと信ずる。

△誠忠無私の二將軍

南木摩天樓

▲兎角に薩長の人と云ふと、理屈はなしに虫が好かぬと云ふ風がある。政治界に於て長州系の政治家のみが長く要路に衝り、私威私福を逞くして居ると同じ樣に、軍事上に於ては長州の陸軍、薩州の海軍が殆んど傍若無人に振舞つてるのも事實である。天下薩長氏に非れば人材なしと云ふことが出來るならば、斯の如き實狀は毫も異とするに足らぬであらうが、これが彼等一門の私福の爲めに天下の事を壟斷して居る、少ともそう見られ得る證跡が極めて顯著である以上、所謂藩閥打破の聲が常に平民政治家の間に喧しく、國民が何でも薩長人とさへ云へば譯もなく毛嫌する樣になるのも滿更無理はない。所が如何な薩長嫌の連中でも、流石に乃木と東鄕とに對しては未だ嘗つて敵意を挾む者なく、奇態に推服して居る樣だ。實に戰後凱旋の時代の如きは、戰功赫灼たる多くの將軍の中にあ

りて、殊に乃木と東郷とは熱狂せる國民に殆ど崇拜の偶像となつたものだ。こは云ふ迄もなく兩大將の戰功が、殊に群を拔いて顯著であつたからでもあらうが、夫以外に尙ほ重要なる原因は、彼等が共に精忠國に報いる誠意の外、徹頭徹尾一點の私心をも挾むことなき人格の崇美に存することゝ思ふ。彼等が身を所謂帷幄に起して而も何等これに伴ふ一般の敵意を受くることなきも、この點に起因する所が多いのではあるまいか。

▲兩大將は其の精忠無私に於て揆を一にするが如く、他にも尙ほ種々類似の點がある。就中彼等が共に謙讓自ら遜る(くだ)の美德を有するが如きは、古來の英雄殊に軍將に於て稀に見る所で、彼等が獨り長く天下の尊崇と同情とを保有する所以の益偶然ならざるを思はしめる。陸に於て乃木大將が難攻不落の旅順要塞を屠り盡したるも、海に於て東郷大將が遙に優勢なる露國艦隊を剿滅したるも、共に闔國を狂喜せしむるに足るの大戰功で、環視の列國を驚倒せしめた程の大業であつたに拘らず、彼等は云ひ合せた樣に自らは毫もこれに與らざるものゝ如く、唯だ偏に天佑と陛下の御稜威と而して部下將士の忠勇とに其の功を歸して居た。而もこれが決して一時の出來心や街氣に出たものでないことは、凱旋の時以來今日に至る迄の彼等の態度に見て何人も疑ふことは出來ぬ。惟ふに精忠無私なる彼等の性格の自ら然らざるを得ざらしめた所であらう。

▲東郷は其の樸訥質厚な天性に於て同郷の偉人たる大西郷に彷彿たる所あるが如く、其の生活狀態の簡易質素な所も亦よく大西郷に似て居る。今でこそ其の邸宅も少しは立派になつたと聞くが、凱旋當時の彼が寓居の風姿と來ては何(ど)う見ても威名赫々たる世界的偉人の住家(すみか)とは思はれぬものであつた。當時某外國公使は一日彼れの大なる成功を祝すべく其の寓を訪うて、彼れの生活の餘りに質素なのに驚き、益々尊敬の念を强うするに至つたとか云ふことだ。

▲此の質素にして寡慾な點に於ては乃木大將も決してヒケを取らぬ。彼が邸宅の寂寞無風流なことは東郷大將の夫と同じく有名なものだが、その日露戰爭の偉功によりて敍勳と共に恩賜金の御沙汰のあつた砌り、勳章だけを拜受して恩賜金は殘らず之れを當時の部下に頒つたと云ふが如き、寡慾恬淡なる彼れの面目が偲ばれて床しいではないか。東郷が職分を尙び私功に誇らざるに於てネルソンと相似たるが如く、乃木の寡慾にして恬淡なるはよくゴルドンに似て居る。

▲近頃倫敦デーリー・メールの通信員たるマックスウエルは日露戰爭中乃木將軍に謁したる際の所感を紙上に掲載した中に、大將にして一度我等の手を固く握らんか、其の嚴格にして武骨なる武士的相貌は忽にして消失し、温情にして快活、慇懃掬すべき武士となり、宛も百年の知己に逢ひたるが如く感ぜられんと云ひ、又敵が攻むるに一歩も假借することなき彼も、敵にして一度降らば眞情と慈悲とを以て之を遇す。旅順口陷落の後敵將ステッセルは彼を評して曰く、余は斯る快活なる紳士が見たることなし、如何にしても敵軍の指揮官に接するが如き心地せず、宛(さなが)ら親友に逢ひたるが如く感ぜられたりと、是れ蓋し眞の英雄なるべしと云つて居る。實にその通りであらう。斯る古武士の譚に見る樣な逸話は、東郷に

於ても亦之を聞くことが出來る。

▲日本海々戰に於て露國艦隊の運命既に定まつた時、敵將ネボカトフ降を請うて旗艦に至るや、彼れは禮服を着け頭を垂れて居た。東郷これを見て既に降伏せる上は先づこれ迄の無事を祝さんとて爲に慇懃に三鞭酒を酌んだ。今次遠航の途次偶地中海に於て海軍紀念日に會し、夜をこめて三鞭を仰ぎながら東郷慨然として當時を追懷し、「流石飲むまいと思つたネボカドフは非常に渇いたものと見えて直に飲んだ。モー一杯と注がせたら又飲んだ、平氣なものじや。それて他の軍艦にも降服を命ぜよと言つたら承知して往つた」と語つたと云ふ。誠に面白い話である。光榮ある日本武士、彼等に敵將を劬はり尊敬するの雅懷はある、併し敵將の哀に浴して平氣で居る底の大度は無い。吾軍の常に勝ち露軍の常に敗れた所以の偶然でないことは茲にも見られる。

▲その他乃木と東郷との間には尚ほ幾多の面白き類似もあらうが、終りにモ一つ看過したくないのは、兩方とも曾つて政治上の野心を有せぬと云ふ點である。元來政治は最も俗中の俗なるもので、何人と雖も之に衝り得る性質のもの、又衝つて差支のない筈のものであるが、併し武人が濫に政治上の野望を起すのは甚だ好ましくない。又弊の最も伴ひ易いものである。然るに薩長には從來軍人政客が甚だ多い、寧ろ最も勢力のあつた政治家は軍人の側に多くあつた、現在でも先づそうであるが、乃木と東郷とが共に身を薩長藩閥に起して、而も敢て是等先輩同輩の爲に傚はざるは、惟ふに彼等の誠忠無私なる性格の然らしめた所とは云へ、國家の爲にも又彼等自身の爲にもこれを慶賀せざるを得ぬ。

△東郷乃木兩大將の比較

木山熊次郎

東郷大將乃木大將共に私は個人的に親しく御話をした事がない。私が兩大將を知るの程度は、一般の人が新聞雜誌其他で兩大將を知るの程度と餘り異らない、否寧ろ一般の人より低い程度にある位のものである。だから差控える筈であるが、凡俗の觀察は、或は多數の凡俗の感想を代表するかとも思ふから、枯木も山の賑て少しく申して見よう。

乃木大將の邸は赤坂新坂町にある、邸内は如何であるかよく知らないが、表面から見た丈では左程立派な屋敷と思へない。大將の邸内を見た人の話にも、佐官相當位の人の住宅で將官の住む家と思はれぬとの事であつた。山縣大將大山大將はいふに及ばず、奧大將川村大將などの家と比較して非常の懸隔がある樣である。然らば乃木大將は家を粗末にして金溜め主義に傾いて居られるかといふに、自分は乃木大將が金を溜めたといふ評判を聞いた事がない。陸軍の大將中將邊の人で兎角の評を免れぬ方法で隨分財産をつくつたといふ評判のある人はあるが、乃木大將に就ては此邊の事に關して不評判の事を聞かない。東郷大將も略同樣で、大將の邸宅も實にお粗末千萬のものであつた。近頃新築が出來たが、それでもこれが東郷大將の家とは思はれない程のものである。薩摩人は金溜

め主義の人が多いと聞いて居るが、東郷大將は果して如何であるか、能くは知らぬが大將が山本大將の如く製艦のコンミッションを取つて二三百万の財産を作つたとか、家賃の取立にまで腐心するといふ程金の奴隷であるといふ樣な評判を聞いた事はない。兩大將共に是迄の經歷がコンナ事に緣の無かつたといふ事もあらうが、然し此邊の慾望が強ければ其に相當の事はなし得るのであつたらうが、然らざるは矢張清廉潔白の性質であると想像される。兩大將の爲人を想像するに、乃木大將は剛毅にして嚴正、東郷大將は寛仁にして大度といふ風らしい。自分が比較的知つて居る教育界の人に比較を求むれば乃木大將は山川健次郎氏、東郷大將は濵尾新氏に近い樣に思はれる。私は山川氏に接すれば、古武士を思ひ出さゞるを得ない如く、乃木大將の風貌態度を見ると、古武士の面影を見るのである。濵尾氏は何處か取り所が一寸分らぬ樣である。而して兎角の批評はあるが、氏でなければ東京大學は收まらぬやの感がある。東郷大將も自分が聞いた所では必ずしも奇策縱橫とか又は好司令官といふ格でもなく又海軍大將として果して何處迄適任かも怪まれるが、兎に角海軍々人の輿望を負ふて居られる。日露戰爭の場合、或は日高中將が總司令官になる筈だつたといふ事であるが、日高氏や或は又片岡上村の諸將が果して東郷大將丈に、不得要領の樣で、果斷敢行の事が出來たかどうか。東郷大將も大尉か少佐頃には前途も見えすいて、用て行けがしの待遇を受けたとか聞いて居る。幸に薩摩出身であるから休職にならなかつたといふ評判があるが、是等の事から察すると大將は、小才の利くといふ側の人でなく、將に將たる底の資格を備えて居られるらしい。

近頃兩大將共英國に赴かれたが、東郷大將は髮を分けて英國風にせられたそうであるに、乃木大將は五分刈頭で行かれたそうである。此處らが乃木式を發揮したものであるまいか。學習院長としての乃木大將は、大部分の者には頗る評判がよいが、時には大將が餘りに嚴正頑固なるに不平なる者もある。即ち或る教授は生徒と戲談をいひ合つたので、教師たる威嚴を保たぬとかいつて誡められたそうである。又或る教師が修身を講じて居たが、生徒の中に其講師の思想に服せぬて、博士に質問して感心出來ぬ事を述べたとかいふ事が院長の耳に入つて院長は非常に怒つたそうである。修身講話の内容なとを聞けば、教師に質問したからとて、頭ごなしに叱るなどは些か頑固な感がする。然し何といつたとて、大將は院長として立派のものである。教育の事は分らぬとしても、乃木といふ人格が所謂教育以上の仕事をする。

乃木大將に就て今一つ忘る可からざるは、旅順の戰爭で、大將が平然として二子を死地に赴かしめた事である。寺内伯が其子を砲煙彈雨の危地より脱せしめ、安全の地に轉せしめたと比較して、軍人精神強弱の差が餘り目立つ。

東郷乃木兩大將共、我國寶である。此國寶は永へに國寶たるの價値を墜す事はなかるまい。世界の毀誉褒貶は當てにならないで、今日は非常の名譽を博し、明日は全く顧みられない事があるが、斯くの如きは本人に罪のある場合がある。所で兩大將に於ては、其人格が世間の尊敬を受

ける主なる源因たる以上、名譽が墜つる事はない。さすに一も、吾人は兩大將に此上の自重を希望せざるを得ない。兩大將の將來に就ては別に思ひも付かぬが、自分は唯乃木大將を宮内大臣にしたいと思つて居る。宮内省は、土方久元以後田中光顯渡邊千秋などいふ人が宮内大臣となつて、どうも評判がよくない。實際の事は自分等の知り得ない所だが世間一般の評判では、餘程濁つて居る樣である。之が爲めに間接に皇室の尊嚴を害し神聖を傷ける事がある。此處へ乃木大將をすえて、其嚴正剛毅にして清廉潔白の質を十分に發揮して貰へば、世間の誤解が解けようかと思ふ。而して大將を措ひて此地位にすえて然るべき人がある樣に思へぬ。

△理想的戰鬪將軍

某將軍

東郷乃木兩大將の事を評論せよといふのですか。そいつは少ゝ困りますが、折角のお尋ねてすから、平常思つてゐることを一寸お話して見ませう。

乃木といふ人の家庭はよく知らないが、蓋し彼は嚴格なる家風の家に育てられた人と想像せられる。彼の山鹿素行に對する感想を、嘗て何かで讀んだ事があるが、それによつて見ると、餘程嚴格なる教育を受けたやうに思はれた。彼は確か調布の人で、先づ江戸子といつてよい。

彼は少年時代からして戰爭に遭遇した。生れた時といひ、處といひ、恰度戰爭に遭遇するに都合がよかつた。陸軍に入つてからも十年の役に於て非常の苦戰をした。卽ち小倉の第十四聯隊を率ゐて、行て熊本城を助ける任に當つた。處が熊本城は已に賊兵の圍む所となつて、どうしても城の中へ入られない。遂に聯隊旗の或部分までも奪られる位苦戰した。此苦戰は彼をして益ゝ勇敢に、益ゝ堅固なる軍人に打立てた。彼の腕は此戰爭によつて大いに上つた。彼は蓋し此戰爭に生きることを好まなかつたでせう。彼は高瀨に於て負傷したが、此時などは何でも餘り部下を引連れず、自ら先頭に立て夜襲した。此夜襲などは死にたい爲めにやつたやうに思はれた。で部下のものは餘り死を惜まぬやり口を諫めた位であつた。が運命は乃木を殺さず、爾後聯隊長から參謀と歷任し、又洋行して益ゝ新しき軍事の研究の餘地を與へた。嘗て一度臺灣に總督となつたが、自ら其任に適せざるを悟つたかの如く、辭職をなし、三十七八年役にはあの通りの偉功を樹てた。

彼は非常なる實行主義の人だ、率先主義の人だ。何でも自分自ら先きに立てやる。彼は決して車に乘らない。嘗て別當を傭ふ時に、報酬はいくらでもやる。其代り已れは晝も夜も馬に騎るからさう思へといひ渡した事がある。彼は氣が盛んな爲めに老の身に及ぶのを知らない。白髮頭を振り立てゝ華族の若者共と、餘り上手でもない打毬をやつて居る。彼は或時或者に向て、自分の部下の兵には漬物を入れることを少くせよ、何となれば戰爭の時には漬物なくしてやらねばならぬ時もあるから、今

から借らして泣くのだといふた。て其人は然らば君の兵には食物も少くしよう、何となれば戰爭の時には食はずにやらねばならぬ時があるからといふて、それから平常は衞生を重んじて、イザといふ場合に役に立つ身體にして置いた方がよいではないかといふたら、ウム成程といふて笑つた事がある。弱點をいへば或は輕卒だといふ譏を受くるかも知れないが、けれども其輕卒も淡泊といふ處から來て居る。彼は怒る時は火のやうに怒るが、譯が分れば直ぐハッハッと笑ふといふ風だ。部下が衣服の少い時は自分も薄着をし、部下が食はぬ時は自分も食はぬといふ風だ。大きな智略より大きな經綸ある人でもなく、又廟堂に立て堂々一國の政を按配するといふ人でもないが、斯ういふ實行主義率先主義の人だから、野戰將軍――闘將としては實に理想的の人と思ふ。旅順の攻擊についてはいろ／＼批評もあつて、あんなに人を殺さなくてもよかつたなどいふ說もあるが、之は六つかしい事で、なか／＼容易にさう斷言は出來ない。のみならず彼は二子までも殺して居る、彼の爲めに死んだ兵も、彼には殺されても憾みなしとして居る位の名將軍である。學問も漢學が相當に出來るし、詩もやる。學殖豐富といふ譯ではないが、先づ軍人として最も文字ある方である。

東鄕の事は私は餘り知らぬ。只宴會などで少し話した事がある位のものだが、腹藏なくいへば、人間は遲鈍で、無口で、別に奇說名論を吐く人ではない。只落附き拂つて、所謂大山前に崩るゝともピクトモせぬといふやうな人で、深智遠慮かどの位あるかは私には分らない。

△國のヌシ

福本日南

川にヌシあれば源泉涸れずといふ事がある。ヌシの爲めに果して源泉涸れるか涸れぬかは問題であるけれども、一般は左樣に信じて居る。此ヌシの必要は獨り川のみでない。國にも亦之を要するのである。如何に能力あるものが多數に居ても、姓名の知れざるものでは畏敬の寄せ樣がない。門閥なり人品なり一代に傑出したものゝ幾人か國にある時は、本國のものも何となく之によつて心強い感じがするし、國外の人も之を望んで其國の鼎の輕重を問ひ易からず思ふのである。そこで此ヌシといふものが非常に必要である。

維新以來西鄕岩倉木戶大久保等のヌシらしきヌシは其人に乏しくなかつたが、此等の諸公も皆凋落し盡し、今日に至つては誠に其人に乏しくなつた。此時に當つて東鄕乃木の如き、國人は之を大事にしなければならん。其能力からいふならば、陸海軍の將校中、二氏に比肩し乃至は二氏に超越する人がいくらでもあらう。さりながら二氏の如き衆望を一身に集むる人は殆んど無からうと思ふ。二氏に多しとする所のものは其技倆といはんよりは其人格であらう。東鄕大將は温々として玉の如く、知ると知らざるとを論ぜす人をして何となくなつかしき感を起さしむるのである。多數の人は事功を樹てゝ然る後に其人を見るのであるが、此大將の如きは事功の有無に拘らず尊敬すべき人であると思ふ。確か大西鄕

であつたと思ふ、其人の家にある時、未だ顯れざる東郷を人に紹介するに「之は平八郎といふ馬鹿者でゴワス」といふたといふ。此馬鹿者がなかなか安くない馬鹿者である。功名を欲せず、富貴を希はざる、之が西郷の所謂馬鹿者である。西郷が常言に「世の中には名譽と富貴を欲せざる馬鹿より恐ろしきものはない」といつて居る。東郷恐らくは之に當る一人であらう。東郷大將の如何なる人であるかは此大西郷の紹介で盡きて居ると思ふ。

今一つ附け加へていへば、最も自分に氣に入つた話がある。翁がある海軍の會議に於て議長を勤めた事がある。固より議事法の如何などは此翁の知る所でない。議長の椅子に凭りながら翁は何を考へてゐたか知らん。當時議事は進行して已に決を採るべき場合となつた。而して東郷は何事をか考へて相關せざるものゝ如く、何時まで經ても採決しやうとしない。それて、日頃懇意な一將官が傍から耳語して「オイ、もう決を採らんか」とやつた。すると東郷は其方を向いて「ナニ、尻つけてや」といふたといふ。如何にも當世流からいふても大馬鹿者ではないか。只此大馬鹿者以て大事に任ずべしてある。それで斯樣な國のヌシは大事にしなければならない。

轉じて乃木大將に至ては秋霜烈日の感がある。若し成語を以て此人を評したならば、江漢以て之を濯ひ、秋陽以て之を曝すといふ語に當るべきは此人であらう。今の時代――のみならず、古から今に至るまで智者や勇者は無數である。さりながら高潔にして微塵の慾心も其心に上らんといふ人は、絶えて無くして稀にあるものといはねばならん。斯くの如き高潔なる人物は一世の覺醒劑である。見渡して御覽なさい。昨今の日本ほど小汚ない時代はないてはないか。此の時代に斯くの如き人のあるのは有りがたい事てはないか。翁の如きは恐らく現世の覺醒劑たるのみならず未來永劫の覺醒劑であらう。かゝる人物を此小汚ない時代に有するといふ事は、お蔭によつて此腐敗時代のテレカクシの一とする事が出來る。今は此兩大人物を身代を振つて外國に押し出して居る。外國の人之を見て如何なる評をなすか。乃木翁は無口であるし、其上にクワイ國語のクヮの字も知るまい。東郷翁は其昔英國に學んだといふから少しは口も利けるが、然し大概「イエス」と「ノー」の持切り位なものであらう。さりながら硝子と玉は素人眼にも見別けがつく。附燒刃と本物は何處か値打が違ふ。彼の溫々たる、彼の皎々たる兩人物に對する人は少くも厭やな感じはしないてあらう。此兩人物によつて日本の見上げらるゝ事も少なくなからうと思ふ。それて以上に申した通り日本のテレカクシにはなる。さりながら兩翁春秋已に高く其人の前途幾何たるやを知らぬ。之が最後のヌシとなるやうでは此源泉を奈何せん。東郷に傚ひ、乃木に傚ひ、日本人總ヌシとならんことは今日の日本人のよろしく當さに心がくべき所ではなからうか。

△薩長出故の出世

早川鐵冶

さあ、今度は皆能く私の知らぬ人ばかりだね、東郷は會つて見ると物を言はぬ。默つて居るから如何樣な技倆のある人か薩張り分らぬ、日清戰爭に高陞號の擊沈でもなかつたなら多分今頃恩給でも貰つて非職して居る人であらう。私は大臣秘書官で大臣會議に臨席した事があつたが、高陞號擊沈は如何にも國際法上不當であり。如何なる事が是によつて起るかと、伊藤も陸奥も大層心配したものだ。元來伊藤といへ、陸奥といへ、皆非戰論者なのだ、此高陞號擊沈は不法であるとて痛く焦慮したのだが、意外にも英吉利の國際法學者ホーランド、イーストレーキ等が、それは決して不法でない。高陞號はコンボイでない。英國國旗を持つも清國の兵を載せたものだから、明かに兵隊運送船だといふ說を立てたので二人は初めて安心したといふ樣な始末である。是が大蓋で、日清海戰の動機は出來たのである。他日伊藤の侯となり、陸奥の伯となつたのも實は東郷の御陰であるといつて宜い。が戰爭後は又一向名が聞えず、確か舞鶴邊の鎭長をして居たと思ふ。斯くて日露戰爭の時に第一艦隊の司令官となつたのである。ネルソンのトラフアルガルに於ける戰功は世界の共に嘖々として稱する所だが、東郷の戰功はそれに過ぎて居る。ネルソンはそれに死んだが日本の艦隊には一隻の擊沈されたものもない。參謀に偉らい人があつたでもあらうけれど、人に聞くと東郷は露艦が何々水道から來るといふ事をちやんと知つて居り、其津輕海峽通過を絕對に否認した相だ、眞に自ら信じたらば巍然として動かぬ人であろう、けれど陽氣の人ではない。兎もあれ世界でネルソンをば軍神と稱するけれども、東郷は愛に彼以上の偉功を奏して居る、果して彼にそれだけの技倆があるか如何かそれは知らぬ。其平日を見れば平八郎は何の役に立たぬぼんやりした男とほか思はれぬ、何も言はぬが、多勢の人の上に立つて彼れ丈の手柄があるから偉らいといはねばならぬ。

之に反して乃木は初から頭角を現はした。早くから乃木は偉らいと言はれたものだ。實に少將迄は破竹の勢で進んだものだ、薩摩の川上、長州の乃木で互に競爭したものだ、海外へ行くにも川上、乃木の兩少將で行つた。が如何した譯か乃木は遂に川上に後れて仕舞つた。斯くて那須野原で豫備少將を以て開墾に從事して居たものだ、是が他の出身であつたら多分それなりに終つたであらう。然るに流石は長州の勢力である、日清戰爭の時に蹶起命を拜して威海衞に往く、けれども敢て山地中將等の如き赫々の偉勛を立てた事もない。其後臺灣總督となつたのは不適任であつた。乃木の如き細かな男は新開地の大まかな仕事は出來ぬのである、否、其樣な事は知らぬのだ、それ故事を會計の一屬吏？ 曾禰靜雄に委ねて民政長官とした結果、治績擧がらず不評判を取れた。長人でながつたならば彼は此際二度罷らるべきであつた。然るに日露戰爭となるや復た選ばれて旅順方面の最も苦しい處にやられ、難攻不落の旅順口に怯めず屈せず、十萬の日本兵を犧牲にしてやつたのは賞すべきである。が

乃木でなくば彼れだけ下手な、策略も何もなく、ほんの腕づくで軍をしたのは非難を受くべきであるけれども、兎に角乃木大將のメリツトも故にこそ褒められた。其爲には子共の二人も失つた。けれども兎に角獨逸から勳章を貰ふ事となり、世界の勳章を身に佩ふるにも至つた。

乃木は家に居ると質素である。東郷も質素であるけれども家では穩かで靄々たる和氣が籠つて居る。一家團欒して能く行く。乃木の妻君は慈女房である。即ち妻君は薩摩の湯地定幹の娘で、乃木の風采を慕つて嫁いたのである。今でこそ乃木は細いしなびたお爺さんだけれど、若い時は仲々立派な好い男だつたんだろう。乃木の出世は早く、廿二三に已に少佐となり、西南戰爭には奧等と共に軍給紙にも載つた程の人物でまだ若くて某聯隊にあつた時分の事、毎朝溜池の側をテツテケ〳〵で少壯の士官が一隊の兵を率ゐて練り歩く。湯地の屋敷は溜池の近くにあつたのだから、朝な夕なに之を見て居たお嬢さんは其颯爽たる武者姿が深くも目に止まり、内に燃ゆる情火が何となく顏に憂の色を盤むので、それと悟つた父親は我子可愛さに捨て置けず、一日時の鎭臺司令長官野津鎭雄を訪ひ、語るに此事を以てした。誰だらう。腕に太線が二本ある、それでは乃木だ、乃木に相違ないといふ事で、彼れなら先づ結婚せぬ筈、宜しい、私が早速月下氷人に爲りませうと請合ふ。鎭雄は故野津大將（道貫）の兄で、道貫の如き溫厚一方ではなく、器はズツと大きく磊落な人であつたので、直樣使を馳せて乃木を喚ぶ。來ると汝は未だ結婚しない筈だな。左樣か、幸い良縁の申込がある、是々だと、頭から命令的で定

まつて仕舞ふ、乃木は唯々諾々として一向に上官の命令に服從した、斯くして嫁いたのが今の乃木夫人である。畢竟は薩摩人であればこそ乃木の如き武人に打ちこんだのであろう。それ故に又彼樣に八釜しい乃木に連れ添つて適れ賢婦人の名を博して居るのだけれども其家庭は頗る淋しいものであろう。

兩人共偉らいけれども、彼れが薩長出でなかつたなら恐らくは豫備で終るべきである、乃木は川上に先だたれて失意となり、復た臺灣で失敗したのだ。東郷は五十面下げて艦長になつて居た。普通ならば止すべきである、それが又今度多くの司令長官中より拔擢されて重任に當るにも至つたのは、乃木の長人であるが如くに、彼れが薩人であるからである。

東郷の武人として偉人の名を博したが故に、人は又政治界に於ても偉人たるべきの器であらうといふものもあるけれど、左樣は思はぬ、夫の拿翁を破つた英將ウエリントンの如き、又戰功に得た名望を以て遂に總理大臣に沿推されたが、其方ではつまらぬ失敗に終つて仕舞つた。それが立派な殷鑑である。が我東郷は流石に自己の分を知つて居る。非分の活動を望まない。唯それ乃木は分を知らぬ、是を以て往々失敗がある。是迄私の話したのは皆能く私の知つて居た人物ばかりであつたが、今度はかりは知らぬ人の事だから、當るか當らぬか保證は付かぬ、間違つたら平に御容赦を願はう。

編輯だより

▲寄稿者諸氏にいろ〳〵の事情ありし爲め、前號に豫告したる論文の多くを本號に掲載する能はざりしは編者の大いに遺憾とする所に御坐候。次號には必ず約を履むを得べしと存じ候。

▲從來十月一日を以て發行し來りたる「秋期大附錄」號は本年より九月一日を以て發行することゝ致し候。其如何なる光彩を放つべきかは卷頭の豫告を一讀せられなば明かなるべく候。

▲正宗白鳥氏の小說は「窒息」と題する百枚以上の長編にして、氏の技巧の益々圓熟し氏の觀察の愈々深酷を加へつゝあるは此篇最もよく之を語るべく候。昨年の「秋期附錄」に「微光」を寄せて評壇を騷がしたる氏が、今年は如何なる波瀾を起すべきか、興味ある問題と存じ候。

▲島崎藤村氏と田山花袋氏の小說は何れも三四十枚の豫定に御坐候。我が文壇東西の横綱たる兩氏が如何なる腕前をあらはさるべきかは今より編者の樂んで見んと欲する所に御坐候。

▲小栗風葉氏と眞山青果氏の小說は何れも五十枚以上のものにて、風葉氏の洗錬の筆、婀娜の想、青果氏の勁健の筆、峻烈の想、共に我文壇の珍たるを失はずと存じ候。風葉氏は已に筆を執りつゝある旨通知あり、青果氏は「母」といふ題にて書かんと赤城山上より便有之候。

▲鈴木三重吉氏　題は「水の上」にて氏一流の艶にして夢みるが如き物語を寄せらるゝ筈に候尙永井荷風氏にも五十枚以上のもの依賴したるも本號〆切までに承諾の通知に接せざるを以て豫告にはわざと洩しおり候。論文、雜錄、人物評等の好材料は今より蒐集しつゝあり候。

▲陰晴定らざる此頃の天候、何事をするにも懶きには閉口に候。（校正室にて一記者しるす）

「涼」十題

夏の夜　島崎藤村

岐阜提灯　徳田秋聲

打水　佐藤紅緑

奈良團扇　上司小劍

水草　與謝野晶子

バルコニー　水野葉舟

涼み船　鈴木三重吉

白雨　蒲原有明

茅蜩　吉江孤雁

夕月　小川未明

夏の夜

島崎藤村



夕日は神田川の岸に滿ちた。暴風雨の爲に枯れ死んだかと思はれるやうな柳並木の枝からは、二度目の新芽が吹いた。春先黃色い花と一緒に出た芽は最早黑ずんで了つたが、それが七月の柔かな若葉に混つて、冷しい風の中に動搖する。かゞやく夕日を浴びて蘇生つたやうにも見える。橋畔の古い柳は幹の中ほどから吹き折られて居た。石垣から流の方へ倒れた枝は、既に半ば生氣を失つた。じり〳〵枯れるのを待つばかりだ。でも、逆さまに垂下つた半死の葉の中には、折れたまゝ吹いた芽が弱々しげに見えて居る……

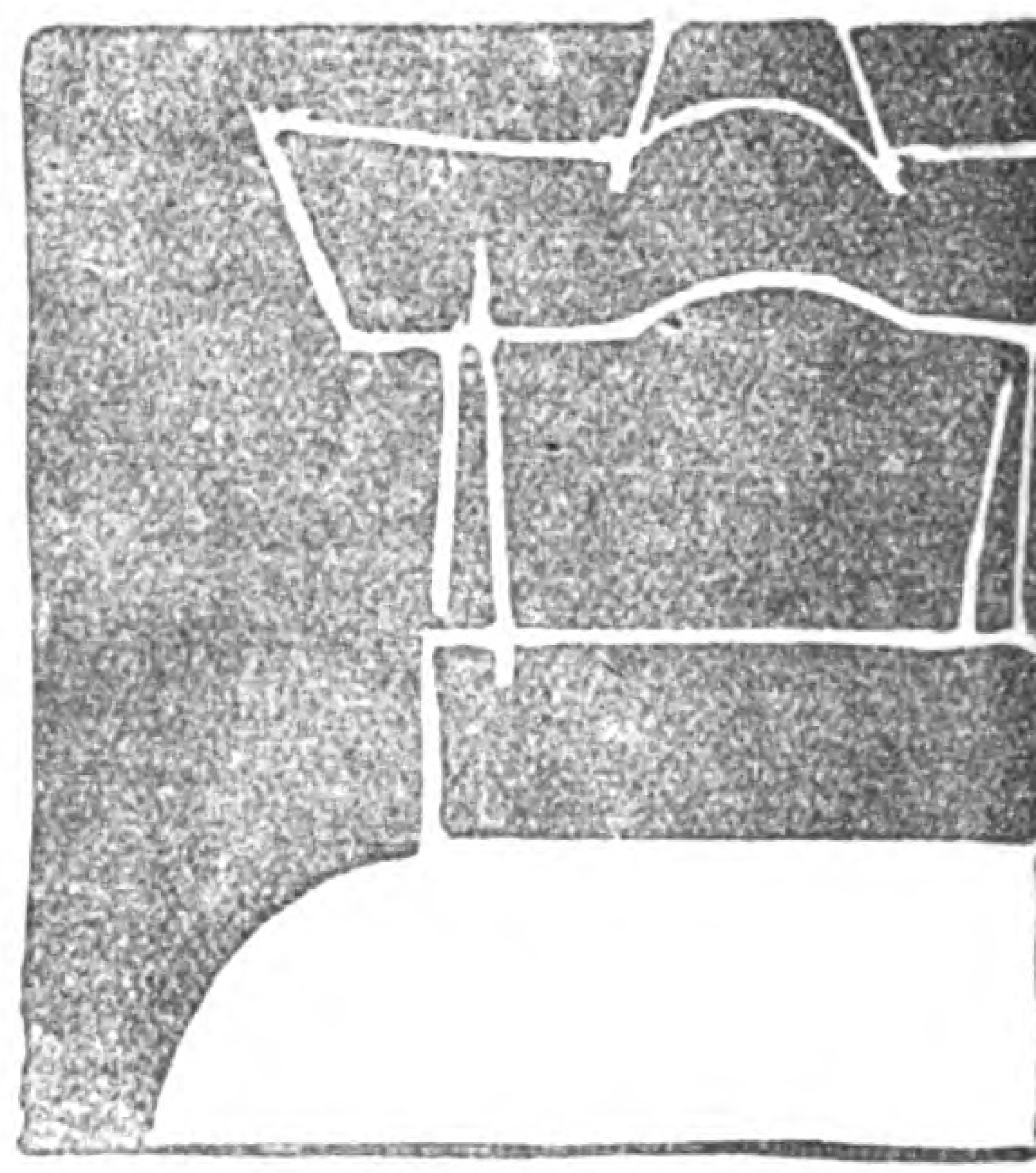
日が暮れて行つた。

暗くなつてからも光の多い晩だ。一日の暑氣に酣醉したやうな人達は、いづれも涼しさうな白い浴衣を着て、灯のついた町々を步き廻つた。長い霖雨の後、斯の暑氣は實に遽かにやつて來た。私は橋の畔へ行て川の方から來る夜風を待つた。鐵の欄干に倚凭りながら、涯もない空にきらめく星の姿、白々とした雲の群なぞを望んだ。私は酷しい疲勞もなしに――眼、耳、皮膚、其他の部分を通じて――蒸されるやうな身體の熱を樂むことが出來た。時ならぬ食慾をも感じた。

空は青白く、明るい。左樣言へば、家へ戻つて二階の裏の方の窗から町々の屋根を眺めた時、向ふの白壁のところに淡い月光の映じて居るのを見た。

岐阜提灯

徳田秋聲



「今夜お藥師さまへ連れて行つてね。」と上の男の子が強請むと、女の子も「あら私もよ」と、繪紙を切刻んでゐた剪刀を振あげる。「あゝちやま坊ちやんもね」と、四つになる子も、大きな目を丸くして煩さく母親の顏へ顏を寄せて行く。母親は今鼻と齒の醫師から歸つたばかりで、着物を脱ぐ隙もなく片肌脱になつて、乳吞兒に乳をくれてゐた。餒えて火のつくやうに泣いてゐた乳吞兒は、急に乳房に眤めないほど怒つてゐた。西日の餘熱のまだ冷めない部屋は、一度掃除した後をまた取散かされて、紙片やら、ブリキ細工の玩具やら、菓の皮やら、コップのやうな物やら、疊も埃てザラ〳〵してゐた。緣側にも白く砂が溜つて、野天にゐると大した異りはなかつた。そのなかに主は友達と一緒に、次の室て腹這ひになつて、雜誌などを見てゐた。子供同士が意地のわるい猿のやうに啀合ふ度に、主は自分を嘲けるやうな苦笑してゐた。

「この齒が二本とも、かちりと鋏で切落された時には厭になりましたよ。もう自分の齒はないんだと思ふと……。」妻は側へ來て金齒と金齒の間にある二枚の齒の齒根から切られた迹を極惡さうに出して見せた。その顏は一時に十年も更けた婆さんのやうに見えた。

「ほんとうに厭なもんですね。」妻は自分で淋しく笑つて、子供の顏を眺めてゐた。

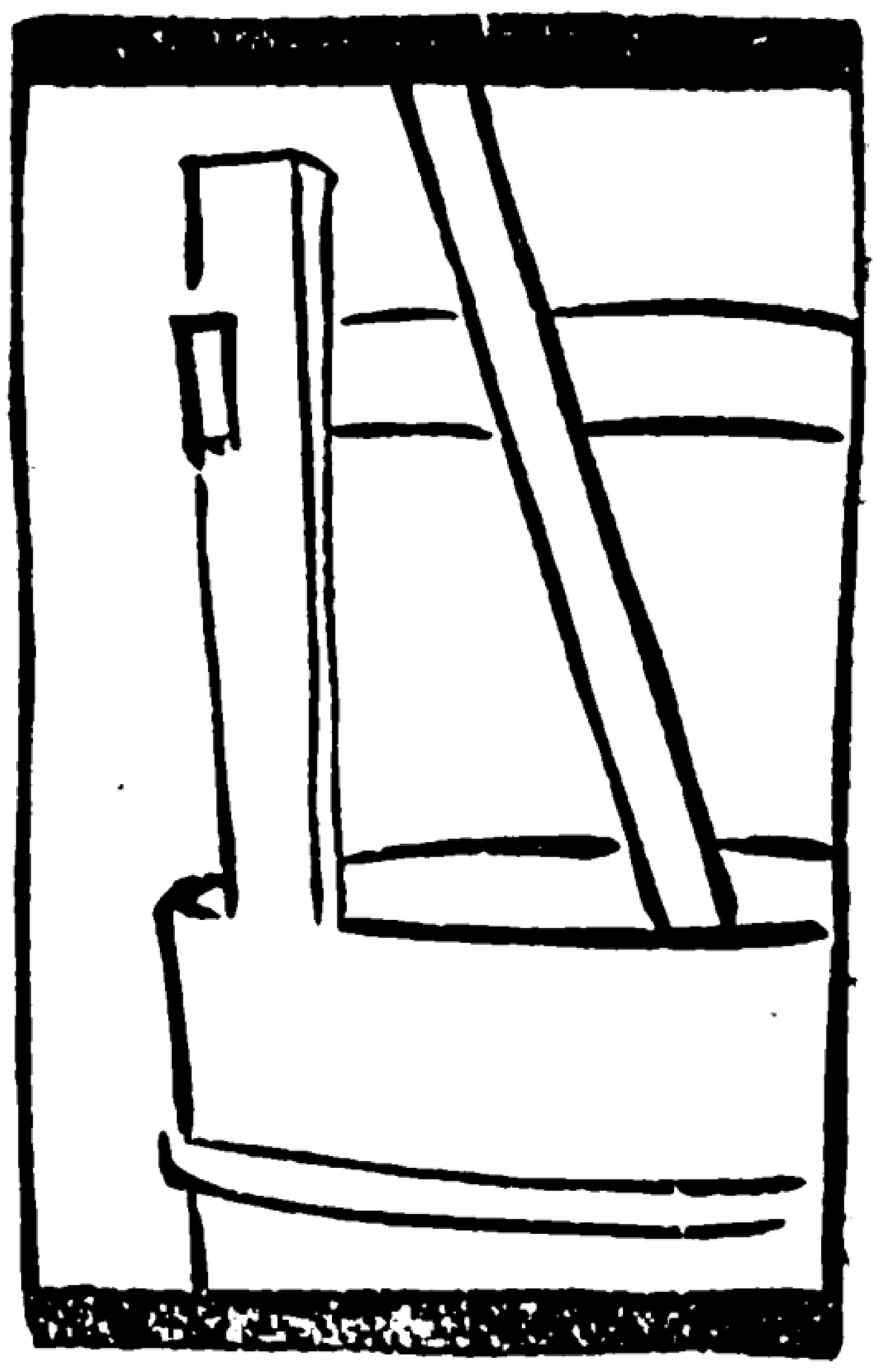
庭の健仁寺垣から透けて見える前の家では、岐阜提灯に火が入つて、大勢寄つて賑やかに蓄音機をやりはじめた。

打水

佐藤紅綠

△子供の時宅の召使どもが景氣よく水桶を運んで其處ら中に流れが出來る程水を打つのを見て井戸の水が盡きはしまいかと心配した事があつた。

△其時も一つ心配であつたのは、恁那にどしどし汲み出されては、いつか放して置いた井戸の中の鮒が眩暈するだらうと思つた事で。



△植込の薄暗い處に紫陽花が一ぱいに枝を擴げて居た、其處には大きな蟇が住んで居る、夕方に水を打つと、蟇は驚いてのそりのそり出てくる、容貌極めて怪異、全身に疣があつて背が黑く腹丈けが白い、私は紫陽花と蟇とは暗い處にあるものと信じた、そして此の二つのものを一種の魔的なものと思て居た、或日下男に向て蟇は秋になつたら何處へ行のくだと訊いたら下男は暫時考へて是れは皆んな年老ると蝙蝠になるんですと答へた、いかにも其れで蝙蝠は夕方に飛んで出るんだと合點した。

△表へ水を打た後で、其の濡れた土を篩目で波の形を描くのは近所の床屋の親方だつた、親方は東京節りで二三十年前には郷里で珍らしいハイカラだつた、私は江戸の道路は悉く波の模樣があるのだと思つて居た。

△下男が水を打て居た時に隣の亭主に疎忽をした、其時祖母さんが宮城野信夫の敵打の話をした、私は其れを聞て恁う思た、私の姉が宮城野で妹は信夫であればいゝ、姉は御上臈になつて五光のやうな笄を頭にさして綺麗になつて居る、處へ妹が奇麗な顏をして脚絆甲掛て姉を尋ねる、敵を打つ、自分が其れを見て盛に拍手喝采する。

△姉はもう御婆さんになつて居る、妹は朝鮮で年頃の娘の母になつて居る。

△或人憤慨して曰く晩酌の妙味は庭に手桶の水を打て裸體で椽に胡坐をかいてやらかすにあり、然るに近頃は水道の喞筒で按摩の小便のやうに垂れ流して電氣の下で酒を飲むが多い、抑々酒の趣味を解せぬものだ、水道や電氣などは麥酒か但しはサイダでも飲むが至當だ云々。

△打水の涼を味はつて酒を飲むやうな悠長な心持になれる人は幸福だ、酒たると麥酒たるとサイダーたるとを問はずだ、私は飯を食ふ時さへ追立てられるやうに心忙しい。

奈良團扇

上司小劍



夏の夜行汽車の客は木曾川あたりで、窓から入る曉の風に吹かれた。列車の走る響は耳に馴れて下手な音樂とも聽かれ、天地は水を打つたやうに靜かで、田も野も森も山も、綠の色が濃く濡ふて見えた。線路の曲り角で、窓から首を出すと、ウネ〳〵とした自分の列車の長い姿が初めて見られた。汽車も旅に疲れて勢いがないやうに思はれた。一夜を不完全な眠りから覺めた人々は、衣紋を繕ひ、膝掛けを疊み直しなどした。烟草の煙がゆら〳〵と窓を流れる。『鐵道院』の印のある東海道名所の俗惡な畫をかいた團扇は、自分の足下にも一つ落ちてゐる。日が出る、風が吹く、稲や木の葉の露が乾く。世の中が總べてガヤ〳〵と生活の音をさせ始めたと思ふ頃、東側の鎧戸が皆給仕の手に閉される。自分は足下の團扇を拾ふて、生温い風を呼んだ。

大阪に着いた時は、日がモウ餘程高かつた。母方の叔父は停車場に迎へて、直ぐ自分を城東線の狹い汽車に乘せた。子供の時から汽車の好きな自分も、流石に飽き〳〵して、暑い車室の窓から外を見る氣にもなれなかつた。天王寺と云ふ驛に下りて人車に乘せられた時、自分は變つた乘物に心も改つて、急に勢ひづいたやうに思つた。久しぶりで見る大阪の場末の町は趣きが深かつた。水菓子屋の店が二軒も三軒も眼についた。何處にも夏蜜柑が黃色く並んでゐた。

赤塗りの門の前で人車を下りて、叔父は其の門の内に自分を連れ込んだ。其處は『雲水』と云ふ精進料理を喰べさせるお寺であつた。庫裡の廣間からは、茶臼山が眼の前に見られて、室の狀は、會葬に來たやうにも、料理屋へ來たやうにも、いろ〳〵に思はれた。腰衣を着けた小僧の運んで來た長方形の臺の上には、酒の銚子に五種の料理が色どりよく並んでゐた。叔父は先づ盃を取つた。

小僧が團扇を二本持つて來て、默つて置いて行つたのを、自分が先づ取りあげて見ると、雅かな奈良扇で、一つは陵王の舞樂の彩色畫に『探幽齋筆』と書き、裏には紅葉が二片と、鹿が二頭とかいてある。他の一つには、『奈良八景雲井坂の雨』として、簑を纏ふた農夫と合羽を着た旅人とがかいてある。

『雲井坂で、そんなとこやあれへん』と、叔父は盃を下に置いて、其の團扇を手にしつゝ、頻りに畫そらごとを說いたが、やがて其の團扇で、バタ〳〵やりながら、二本目の銚子を飲み始めた。



水草

與謝野晶子

夏は水の便利の多い家に住みたい。そしていろいろの水草を眺めたい。木立の奥にたたたたと筧の落ちる音がして、御影石を敷きつめた上に馬盥の樣な大盥を据ゑ、其中に泛べたウオタアヒヤシンスの幾株が斷えず落ちる水に動搖して居るのなどは、なまなか池などを掘つて金魚を飼つたりするよりも優つて居る。山城の廣澤の池の茶店で古くなつた船を井の許に引上げて、其れに一ぱい蓴菜を植ゑて居たのを見たことがあつた。葉もよいが、暗紅色の花と琥珀色の莖との調和も嬉しかつた。河骨は裏の田の片隅などで夕暮に見るのがよい。蓮は佛臭くて近く見る氣はしないが、沼か城の濠などに計り咲かせたい。小い花の紅蓮、紫色の鬼蓮は水鉢に咲かせて鏡を掛けた室などに据ゑて明るい日中に見るのがよい。菱の實と云へば怖ろしげてあるが、その白い花はきやしやな若い男を船に載せて夜明の沼に摘ませたい。大きな鉢のまま應接間に置く花は睡蓮である。田にあつて見所の無い眼子菜や莕菜を硝子の鉢に移せば簾の下などに据ゑたくなる。縁の前を流れる川に丈の高い莞藺がむらむらと青い影を映したのは、白い鵠の鳥も降りて來さうに思はれる。その褐色の花もよい。すべて水草でなくても水に浸つた影をわたしは好く、夕立に折れた柏の葉が大きな枝のまま青ずんだ水に白い裏葉を見せて斜に浸つて居るのなどを見ると、虫齒の痛いのさへ忘れるのである。裸や湯帷布の影が水に映らなかつたら溫泉宿も淋しからう。



三階のバルコニー

水野葉舟

方々の屋根の上の電燈が光り出した。薄暮の光が、弱く四邊のものに滲み渡つて、ぢつと漲つて居るやうな中て、二人の白い着物が暗い中に沈んて居るやうに見える。

低い處て、騷しい音が、入り亂れて自然に統一されて聞えて來る。

この雷門の傍の××のバルコニーには小さいテーブルがあつて、その上に、ウエフワーの付いた、アイスクリームと、薄手のコップに水が一杯入れて置いてある。その儘て、三階にはまだ燈がつかずに、私と向ひ合つて居るN――君との顏は、互に見えなくなつてしまつた。

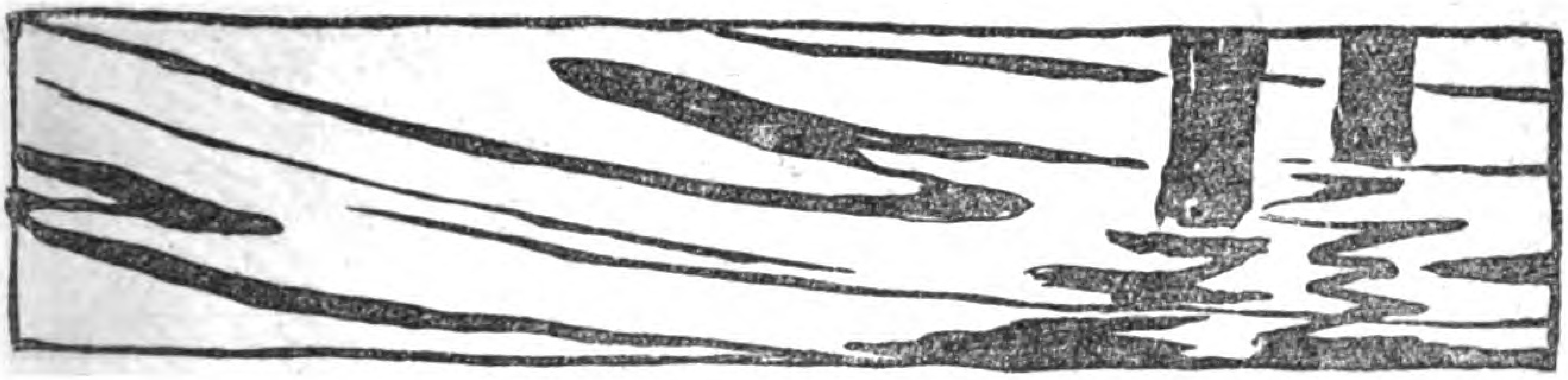
「ぢや、君は愈々明日發つね？」

「あゝ……もう東京は御免だ、早く涼しい處に逃げるんだ。輕井澤！、輕井澤！。君も來ないか。」

「……」と、このバルコニーに出る口の室に人の足音がして、パッと青味を帶びた瓦斯の燈がついた。「マドモワゼルX」の白粉の顏が、それに反射して、黑い髮が水がたれるやうに見えた。

N――の顏も見えた。水を入れたコップにも、その余光が反射した。

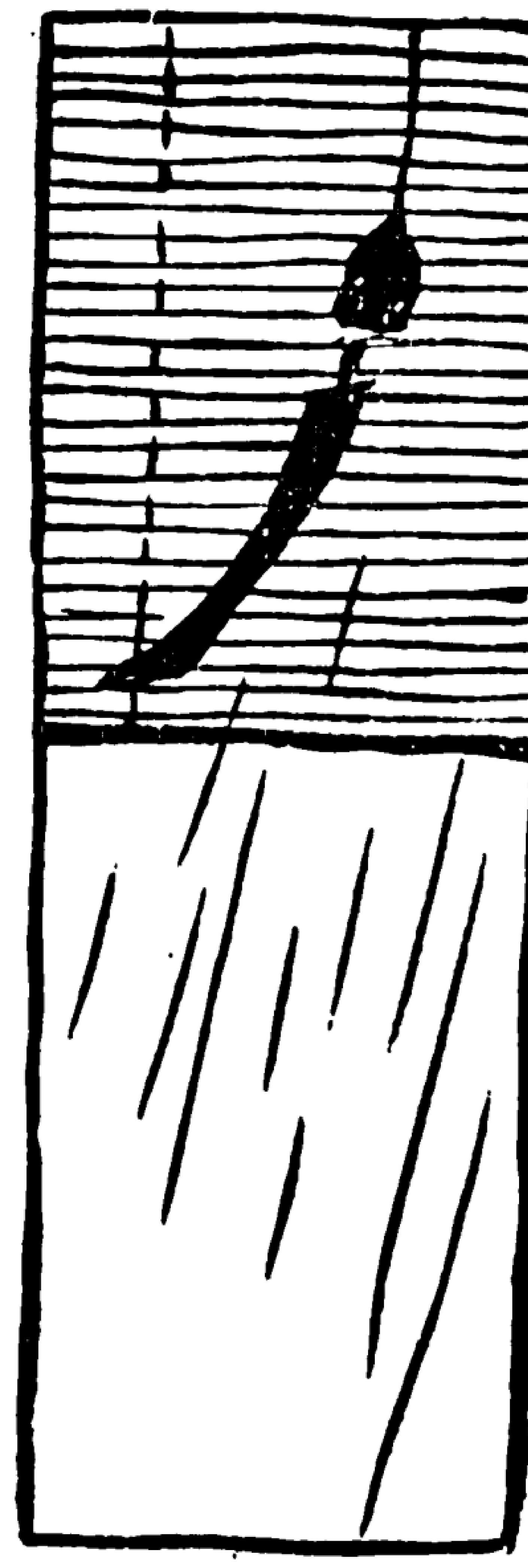
もう、公園の中の方ては、ものが燒けて居るやうな火の色が中空をこがして居る。躁しいやうな、靜かなやうな、馬鹿々々しいやうな、浮々するやうな心持がする。



涼み船

鈴木三重吉

或事で母が三文判が要るといふ。抽斗を拔いてごた〳〵物の下を探してる内に、久しい千ちやんの寫眞が出た。水飴色に薄れて消え〴〵になツてゐる。何年になる事だが、此浴衣は涼み船に乘ツた時に着てゐたあれだ。こんな勸めなんかに出る女でもなかツたのに。――「ね、可でしやう？お母樣に默ツてればいゝわ。」と曾に格子の外でさう言ツた。宵に來て民さん〳〵といふ。河岸へ出ると、船宿の提灯の火影に、河原砂を浮べた滿汐が足下迄充ちてゐる。水色の布で屋根をした小舟に白い雪洞がつく。お千ちやんはお綱と言ツて出てゐた女だツた。自分は十五六の子供である、人が見はしまいかと考へつゝ急いて來る。どんな人間が棹をさしたか今は記憶へない。「何だか水ツぽさうなのね。」と女は氷に浸した梨の皿の被を取る。河岸の兩側は暗い夜の中に書割のやうにぱツと火影ツた宿屋や茶屋の二階が續く。「おや一寸とかうするとこんなに髮が拔けるのよ民さん。髮が少くなツたでしやう？」「患ツたからでしやう？」「民さんは私がよく負ツて歩いてたのを記憶へてゐらツしやるの？」後ろから來かけた同じやうな船はもうざわ〳〵しい川下へ向けて引き返した。女は火影の一つもない町はづれの方へと、上へ〳〵と上らせる。もう暗い〳〵だけの水の上となツて了ふ。川下で引く三味線だけが手近に水を渡ツて來る。水の上には黑い夜の星の影が一つ大きく寫る。「淋しいから下へ返らうよお千ちやん。」「だツてこツちの方が涼しわ、お聞きなさいあれ。亂れ〳〵てツン急ぐ小鳥にかゝる雨。民さんはね、れ民さん。」と坐り直す。亡き千ちやんがその時着てゐた浴衣である。もう何年の昔だか、消えて行く寫眞。――求める判は見附からない。



白雨

蒲原有明

驟雨の來さうな濁つた日である。今まで讀むともなく讀み、味ふともなく味つて居た阿蘭陀西鶴の浮世双紙が、けだるい手からすべり落ちた。この時、双紙を載せて居た指の尖の感覺が白い靄となつて、おのづから融けてゆくやうに思はれた。またこの時紫檀の卓の面が硝酸銀の發散する煙に咽んで居るやうに曇つて來た。夏の日の午後の暑さは草木を萎えさせた青くさいにほひを淀まして居る。取分け濃厚なにほひのいきれが太い綿を曳いて、折々室の中に這ひ込んで來る。

西鶴の双紙に描かれた美女の寫象が疲れた腦裏に色めいて行き過ぎる。彼等は皆蜉蝣の世界に活き、嘆き、そしてほほ笑んで居る。もみ綺の着物の裏が翻へる。その行方を見極めやうとしても瞼が重い。不圖また遊女の爲に永代髮の油の寄進をしたといふすき者のことが想ひ起される。唐銅の油壺が眼の前に現れる。とろとろとした緑の油が薄暗い片かげに光つた居る。陶ものの扁い鬢油の壺を攜へて來た嫋やかな手が、いつしか私の手に纒りつく。歡樂の途に誘ふ眞白の手は蛇のやうに冷たい。しかも情炎は隙もなく全身に傳はつて來る。私は無意識に、實際卓の上に置いてあつた古い鬢油の壺に手を差のべたのである。これは私の好奇心が過去の埃から拭ひあげた品の一つである。壺の面には青と紅との鮮やかな彩色がある。私はいつも無聊の折にするやうに、壺の口をそつと嗅いで見た。永い年月陶ものゝ膚になじんだ油のにほひがまだ殘つて居る。無言の歌が幽かに聞える。

私は稍熱い夢から覺めて來た。芭蕉の葉が軒に迫つて大きく搖いて居る。孟宗の枯葉が一つ、葉の軸を垂直にして、きりきり舞ひながら落ちて來る。浪華の粹法師がかけた謎の夢から覺めかけた心に叱をたたく大滴な雨が沁みこんでゆく。

遠雷の音がする。私はその音を聞いて土瀝青の匂ひを聯想した。その香はまた乾いた土の濕つてゆく匂ひと諧調する。やがて楓のか細い枝を吹き捲くる風とともに大雨がきほひ立つて降つて來た。今や銀灰と緑の雨のしぶきがこの世界を領して居る。

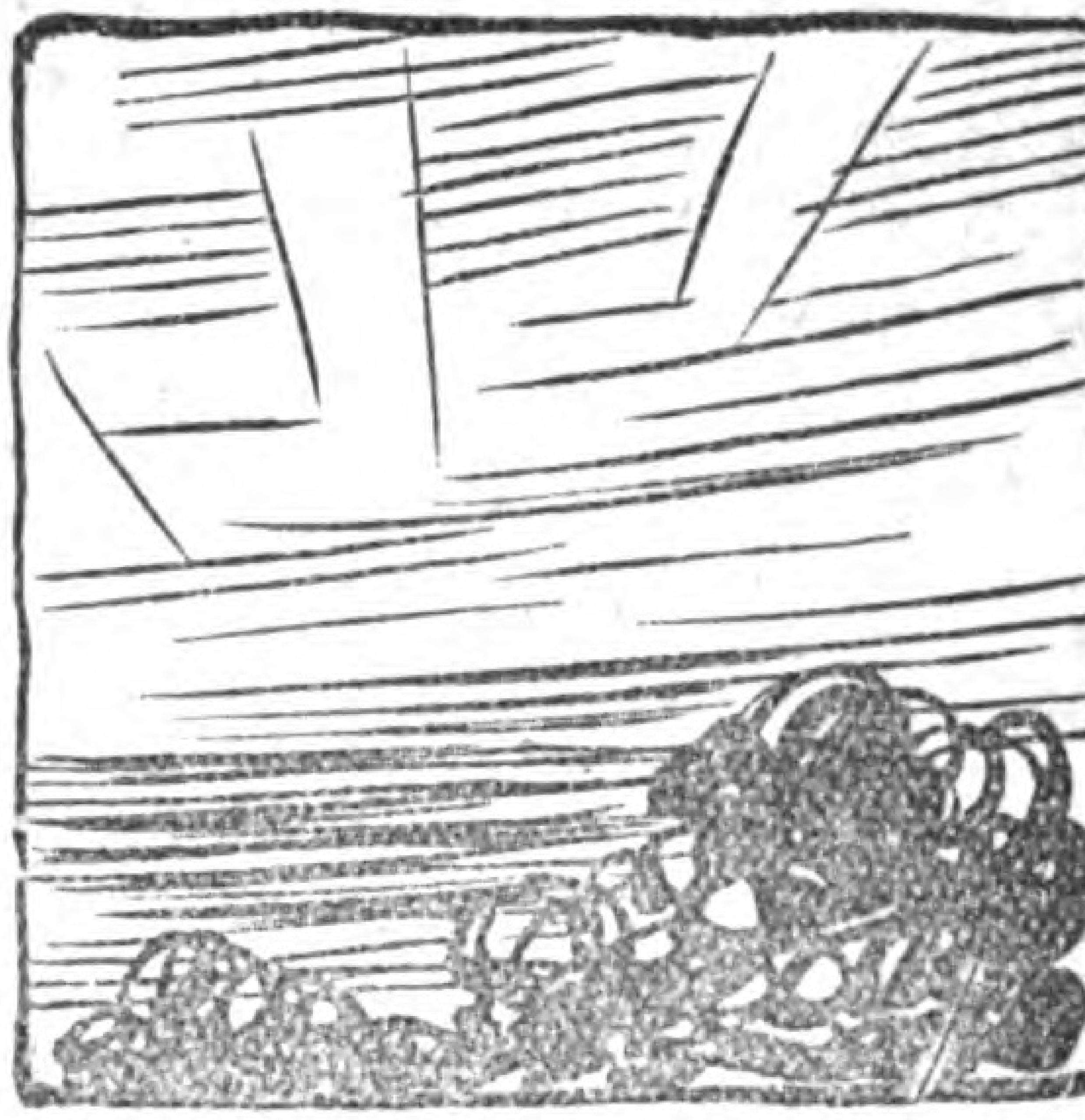
重い瞼がふるへた。一疋の蜘は障子の桟の上にとまつてすくんで居る。

私は驟雨の過ぎた後の庭に、夕暮を待つてさき出づる茉莉の白い蕾のふくらみを賞でて、暫くは西鶴をも忘れ、鬢油の彩られた壺をも忘れて居た。

雨にぬれた椽板の上を黒猫が靜かに蹠を冷ましてゆく。

茅蜩

吉江孤雁



夕燒雲が赤く輝いて、湖上は一所だけ明るく光りを反射させてゐた。檜原の谿湖を漕いで行く舟は勿論自分等の乘つてゐるものより他には無かつた。長さは三里餘りある湖上、兩岸には草原と雜木林とが水に浸つて、行くてはめぐりめぐつて、水が林間をくゞつてゐるので更らに見果てがつかない。

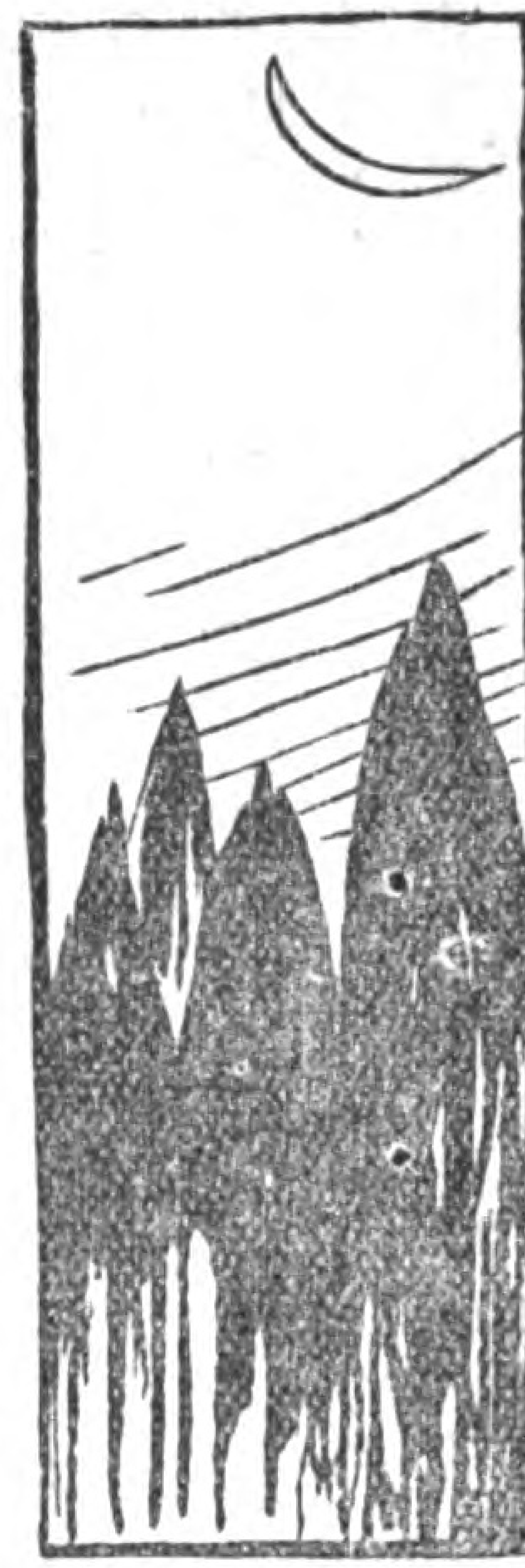
舟は夕燒雲の下を過ぎて薄暗い林の中には入つて行つた。靜かな湖上の空氣は魔に憑かれたやうで、木の葉一つ動かない。このやうな靜けさがまたとあるであらうか、舟はそが水上に吸ひ着けられて動かずなるのではあるまいか。不思議な寂しさが身内を過ぎた。

盤梯の陰、人家を埋め森林を埋めて溢れてゐる此檜原湖の水には一種不思議な靈が籠つてゐるのではないかと思はれた。

と此時、行くての小暗くなりかゝつた森の中から茅蜩の聲がキリキリ〳〵と鳴り出した。靜かな中には物音の全くない方が寧ろよい。一つの物音は恐ろしさを加へる。暗く水の上へおつかぶさつてゐる森の影は奇妙に物凄い感じを起させる。

水の上を渡つて響く茅蜩の聲、音波は遠く次第に黑い大きな輪波を立てゝ水の上から森の中へ、森の中から水の底までも消え込んで行くやうで、舟中の者は思はず身を慄はせた。此一つの蟲の聲が何か大きなものゝ中心をなしてゐるのではあるまいか。

舟が其森の下まで漕いで行つたかと思ふと、ぱつと其聲は止んでしまつた。大きな黑い森が秘めて置くべき事を不圖人間に見付けられて、狼てゝ隱くしてゝもしまつたやうに、もう四邊は眞の闇に鎖されて、何の音もなく、何の色も目に入らない。只木の下の水路がほの明るく、白金色にふるつてゐるばかり、行くては增々おぼつかなくなつてしまつた。



夕月

小川未明

全く自分獨りのやうな氣がした。

墨繪のやうに、篁は、黒くなつて浮き出てゐる。昵として自分は立つてゐたが、踞(うづく)まつて見た。淡青い空が眼に迫つて、垂れ下つてゐるやうに、無數に突き出た葦の葉が目を遮つてしまふ。暫らく、何も考へずに流れて行く溪川を見詰めてゐると、さながら、雲母色(きらゝいろ)をして、銀をいぶしたやうな色をして、月の光りに輝き輝き流れて行く。水は、何か小さな微かな聲で歌をうたつてゐるやうだ。岩に當つて、渦を巻いて、而して少しよどんで、思ひ出したやうに前に行つた水を追つて流れて行く。耳を澄して聞いてゐると、其の微かな歌のうちに、いろんな過ぎ去つた日の幼い時分の悲しみや、もはや再び取りかへしのつかない怨みが……單調な音の中に響いて來る。

濱邊へ歸つて行く細道のついてゐる村端の、夕暮方の薄青い景色……黒い葉蔭を洩れて、月が、黄色に剝げた物置の壁を照らした故郷の我が家……死んだ祖母の顔まで浮んで來た。

「オーイ」

と彼方の入り込んだ藪蔭て、叫ぶ聲がした。つゞいて、流れを亂して瀨を踏んで來る水音が聞えた。釣竿は足許からすべり落ちて流れてゐる。夜の空氣は、青味を帶んで、月はます〳〵皓々と輝いた。どの藪も默つて、白い霧に包まれてゐる。

『オーイ』と、自分も應へて叫んだ。

和歌

尾上柴舟選

安井竹美

○

恨みごと胸にたゝみて人をまつ草生のなかの月草の花

くだものゝくさる匂ひがなやましく脳のにごりをさそふひるかな

みなつきのゆふべはさびし刈られたる麦の匂ひが身をばつゝめる

かられたる麦畑の中に立ちつくす帽子のふちに光る夏の日

夏ふけてほのかに思ひいたむとき百日紅に日のすみてゆく

ものかげにじつと女がみつめをるごとくまぶしき日のつゞくかな

雨すぎしひるの街路のたまり水白く澄めるに秋をおぼゆる

うすやみの草をみつむる目のつかれうつせば近く人のあゆめる

夜ふかし虫に刺されし指の傷のいたみねられず人を思へり

○

正木哲夫

町はづれふと行き逢ひし女工らに笑はれてけりとある夕ぐれ

何故と故もわかぬに泪ぐむ寂しき夜あり何故ならむ

戸をゆする風きゝてしづかにも君待つ宵のわれの悲しさ

曉の枯木林に月うすくかゝれる見れば泪もよほす

いさゝかは心をやらんすべもやと酒をたうべてざれごとも言ふ

月の光り白く流るゝ夜は地に落ちたるわれの影悲しかり

何故といふにもあらずわが心夕さりくれば泪もよほす

思ふこと考ふることしげくして成ることと餘り少なかりけり

ああ我をなど寂しさに泣かしむる父母はらからの多かる中に

○　細井魚袋

家かげにむらがり咲ける馬鈴薯の眞白き花に涙もよほす

たむぼゝの白き穂がとぶ六月は我れ生活に苦しまむ月

新らしきフランネルをやほしからむ妻よ木草の芽は初夏に入る

桐の花咲きてちりゆく下總の海べの路のたそがれのいろ

海岸の眞白き砂を素足にて踏みつゝ伊豆に日の入るを見る

今宵また風は吹きてぬ窓近く葉ずれの音すいざ早くねむ

指先きにチョークの粉のにぢめるを知らでかへりぬ妻まつ家に

○　林白愁歌

水淺き河邊に來り石を投ぐ旅の愁を忘れよと投ぐ

人思ひ窓に居倚れば河端の柳をゆりて風背を吹く

泣き濡れし從妹の顏に顫へつゝ沁み入る青き瓦斯の光りよ

衰ふる心の隅に悲しみが頭もたげて笑へる如し

風吹けば一人住ひの侘しさもうれしいかなや身に夏の來る

白き雲湧く山峽を吹き過ぎる風にまろべる涙淋しも

○　奥川夢郎

あか〳〵とおそ春の日は輝けり狐の子等が野に相撲とる

新しき下駄の歯が泣く庭石の苔の青さがこゝちよきかな

醉ひてねてまたおきて飲む酒の味舌にしみるがうらかなしかり

足をくみふところ手して眼をとぢて列車の隅に口笛をふく

古本を賣りし小錢をポケットになげ込むほどの滿足なりし

○　松井綠水

寂しさのすてどころなく茫然とふところ手して

川見てありぬ

柔かき彌生眞晝の肌ざはりあかるき風の部屋を流るゝ

つかれたる油氣も無き髮かなし晩春の野のあかき落日

病院の冷めたき廊下しら／＼と電氣の光り白う迷へる

初夏の午後の明るく心よき丘に登れば海光る見ゆ

箱馬車の過ぎし林に落日の光り悲しくのこる夕暮

○　　飛川晶樹

酒もなき貧しき膳にうちむかひ父子(おやこ)ふたりが夕がれひする

野にしろき夏の花々さきぬらむ此頃われのたへず寂しき

一莖の花にわづかに我がこゝろ慰められて寢るもあはれや

早世の友が墓標にそなへたる香もなき花の光る暮れ際

○　　武田青眼

開け放つ部屋の柱にうちそよぐ蚊屋の釣手の青き夕暮

悲しくも自棄と自愛の二心こも／＼起り我を支配す

ほそ／＼と草にひきたるうしろ影夕日が岡に見かへるなかれ

かなしみに堪へぬ心は果樹園の白き花ふるもとに眼を閉づ

○　　鈴木風影

毛虫燒く若き女に青葉の香すゞしく迫る初夏の朝

薄日さす朝の厨の硝子戸にわかき葡萄の花の映れる

白藤に明星赤く照り添へる其の有明の人の夢かな

赤き白き將た斑なる落椿野猪棲む檻の前に匂へり

夫が吹く馬尼剌莨の薄煙り朝の空氣の中に流れぬ

うら若き士官が拔ける劍の影五月の青にさと映りけり

朝日這ふ丘の楓の軟葉に戰ぐ風あり六月の朝

○　佐藤紅潮

雨しぶく薄暮の街に笛の音と琴の響ともつれ漾ふ

握力が乏しくなりぬ衰へか今日もごろごろ寢てくれにける

疲れたる醜きつらも酒のめば佛のごとく柔らぎてくる

停車場に友と別れし初夏のとある夕の醉ひの吾かな

祭禮の町のどよもし聞きながら山に登れば初蟬の鳴く

うす闇の迫れる室に目とづればふと浮びくる桐の花あり

○　木暮刀露

露おけるわかき楓はよろこびに泣く目のごとく美くしきかな

へだてなき二人がなかに何者かさびしき影を投ぐと思ひぬ

過ぐる日は惜しとならねど漸くにうすらぐは愛しあまき思出

木がくれて花橘のしめやかにかをる宮居の古能かな

よろしきは森の大木の雫する蔭に和してものおもふこと

思ひあまり悲しき時は山に入りつめたき苔の石をこそ踏め

○　赤松星岬

來るはずの消息遂に來ずなりぬひそかに吾の愛をうたがふ

劇場へ一人は入れば物寂し多くの人に包まれながら

○　中垣澤子

君みれば我てふものをうち忘れはしやぎて物言はるゝ悲し

濕りたる今朝の空氣が氣に入りぬ暫思はん鳥よ來鳴くな

鳥たちし枝のゆるぎに目をとめて少し忘れぬ面影の人

○　山崎俊夫

牛乳色の林檎の肉のひときれを嚙むやはらかさ朝のこころよ

ものといふものみなわれにそむけかしまづ第一に君そむけかし

カステラにミルクひたして吸ひつゝも涙ぐるまるくれがたの春

○　　西村孤舟

我が母の髮にも似たる白き花春の夕のさびしさに浮く

春風も少し身にしむ今宵なり櫻すかして淡き星見る

春くれば昔の人に會ふ如く名しらぬ庭の白きはなさく

○　　堀十二絃

疲れし子とつかれし母と相棲ひ言葉すくなき日を多く經ぬ

跣足にて踏めば足より感じ入る三月末の磯のぬくもり

さりげなきことのみかたりけふもまた弱き男を悔いてかへれり

春日さす川原の石のかたがはのつめたきことがさびしかりけり

○　　福川紗夢朗

何故に君はかくまでほゝえめる面して世をば渡り來にけむ

かわきたる心いだける若き子はひとり寂しく泣き寐入りする

悲しみの日を送り來し友のあと此の頃われは歩みそめにき

○　　田中翠雨

眞晝日のそゝぐ貧しき新綠のなかにさえずる名の知らぬ鳥

ひそやかにもるゝ厨の水の音のまくらにひゞくさびしき夜かな

湖の青き色よりはなされてあかき傾斜の土になづみぬ

○　　島愁膓

わずらいの小さき娘が床いてゝ草の實を摘むほどの朝ばれ

裏山に風迷ひくる夜となれば忘れし人のなつかしきかな

あはれさや涙の如き靑き實をつけたる草の夕ぐれのかぜ

○　　福山杜鵑花

泣きにゆくと言ふことさへ恥らはぬ頃となりし
かけふゝ野にゆく

父と子の背向けたる寢すかたを煤けランプの照
らす寢室

移り香にふとふりむけば花園のバラの白きにわ
たる夕風

なにごとか心足らなさ夏の日に泣かてもだすも
哀れなるかな

○ 立石一也

吸殼の黃なる匂ひが日光の底にちらばふ午後の
公園

しづこころ公園に來て人が子といろかへ花火も
やす夏の夜

○ 晝間秀影

石炭のたかくつまれし停車場の柵の下なるたん
ぽゝの花

そことなく蛙の聲ぞ聞えくる終りの汽車を待て
る停車場

何事もものうくなりぬ此頃はかゝる日のみがか
さなりて來ぬ

○ 香取秋二

皮肉など多くまじへて消息をかき終りたる後の
寂しさ

實のかれて風に音する桐の樹に寄りて君まつ星
月夜かな

○ 阿蘇品煙雨

冬雨の靜に止みたる新開地低う垂れくる煤煙の
あり

劇終へしあとの木戸前花瓦斯のしづかに照らし
春の雪ふる

○ 白露

うつろなればみたすべきものあらざれば我は注
くに酒を選びし

夢なりき旅より旅の夢なりしなりはひといふ事
を忘れて

○ 望月快哉

そことなき葉櫻の香のたゞよへる夏の月夜をさ
まよひ出てぬ

○ 大賀知周

雨蛙しばなき出てぬ雨となる空を見あぐる病兒
のひとみ

○ 太田忠太郎

かもめなど海邊の町のあけ方の船に啼くらむ君がふるさと

○　石橋三男

看護婦の來る足音に今日もまたわれ生きてありと獨言しぬ

並み立てる家進み來とふと思ふ電車にあるを忘れて居たり

○　鹽澤梅溪

朝の風若葉の中を吹きて來ぬネルの單衣の肌心地よさ

○　松山綠

六月の眞晝眞白きカアテンを引けば蜜柑の花ぞ瞳に浸む

○　森一雄

教場の窓にみるこそかなしけれ市街の上をはへる煤煙

○　伊瀬ますほ

夕暮となればさびしきおるがんを南の窓によりてひきける

○　大内玄波

熱あらばまだ寢て居よとのたまひし母の白髮よ其の撫肩よ

原稿和歌は
東京小石川區原町百十五番地尾上柴舟宛
封筒の表面には「中央公論歌稿」の六字を朱書すべし

俳句

秋近

高田蝶衣選

乳腫れ紙剝ぐ如く治す秋近し　波月
歸錫の師面窶れ見ゆ秋近し　同
歸臥を又失意の噂秋近し　同
秋近し裏山颪露含む　同
秋近し巨債隱退を余儀なくす　同
秋近し牧笛に晩寥を覺ゆ　同
悲嘆此一子に因す秋隣　愛香
大衆法話に恍惚と秋隣る燭　同
秋近う仕官の事に召されけり　同
冊子積んで史家めく人に秋近し　同
水に因む書會あり秋隣る亭　同
見ざる久しき郷土の貧も秋近し　同
裏家貸せば針子募るも秋近し　百幽
使先の壁塗るも見居ぬ秋隣　同
碑も刷る秋近かの寺に歸期惜む　同

業も得ず寢泊りの河岸秋近し　同
勞働すれど學多事燈下秋隣る　同
秋近し孤座新愁に又醉はん　摘星辰
秋近き風渡る六公四民の田　同
關を西に殘山剩水の秋近を　同
碁鬼俳魔高眠秋を近うせり　同
遺業悲し拾つに決しつ秋隣　同
溫泉神祭る河原提灯秋近し　蝗郎
江の酒肆に舸子寢泊りや秋隣　同
秋近き木の間の音の水車かな　同
衣濯ぐ江に山影や秋近し　同
笹の葉に繭かけ虫や秋隣　同
繩綯ふに灯す休め臼秋近し　寒泉
夏愁吟じつきぬ旅疲れ秋近うして　同
善根の奴がかく薄命を秋近し　同
晴嵐にたまり帆白う秋近し　同
灯一つを隣にも貸す秋近し　朱星
觀瀑に塋墳も知る秋近し　同
雲母雨に秋近く色を淡うせり　同
椋大樹秋近う鳥の住み初めし　同
秋待つて床下泉湧きやみぬ　月精

秋近き山瘤を棋餘の話柄かな　同
秋待つて成りぬ宿屋の大書面　同
秋近う思出ぬ槇の家と伯母　同
點眼の靈水市施や秋近し　木犀
坑道を出て消さぬ灯や秋近し　同
納庫期の戎衣ほす野や秋近し　同
涼意滿つ長榻の素布秋かとも　同
漁期過ぎしが凪に寄る魚秋近し　花馭史
荷綴りによむ菰耳や秋近し　同
秋近し草高を鳥の潛り寢に　同
秋を隣に籠るや詩病など云はれ　風水火
返歌來て秋近き灯の色を戀ふ　同
秋近し地ゆるぎも工場ほとり住む　同
佛面の煤黑を吹く秋近の風　無佛
秋隣筆硯を先づ問ふ便り　同
磯土を說きて息まく論や秋近し　同
火難いふ鼠うつりも秋近な　狼子
秋近き夜の人籟も市立つに　同
膳に上る魚にも秋の隣る知る　同
總菜の酢に倦めば秋も日に近し　松蓉
今日も里の雨神參秋近き　同

屋根仕舞に酌む小宴や秋隣　同
秋近き舟唄も岩頭の宿にきく　緑星子
秋近う對岸の二茶屋反目す　同
又代る出納係や秋近し　同
放談に力技に秋の隣る酒座　一兀
貰ひ湯の氣詰りや致仕の秋隣　同
預け牛死產と聞くや秋隣　愚案
憎まれて山下る僧や秋近き　同
離床常時の日さし見る垣秋隣り　葛雨樓
來後れを席末や秋近き知る　同
雲母はぐ音秋近き愚あり　牟婁男
秋近し渡り者とて島逐はる　同
法師とめて作善もすなり秋隣　如來
浮雲島に似て澄める空秋近き　雪骨
秋近き村理髮師の移り來し　不見堂
句腐心に秋隣る釣連れのあり　里雪
白楊の相叩く葉音秋隣る宿　紫阜
蜘蛛の子の大鼓ばなれや秋隣　野菊衞
壺中觀秋近しなど語りけり　紫明
慮外ながら君去りませと秋や來る　梅替改 丁字
利否に關せば泣く君が癖秋隣　翠郭

秋近き風にさめけり眠草　快哉
山麓や三四の家の秋迫る　汀風
馬訴訟に道程來しも秋近き　都月

課題　蟲　八月十日〆切
　　　露　九月十日〆切
規定　▽淡路假屋在釜口高田蝶衣宛
　　　▽一人三十句限△用紙は半紙

正誤　せゝらぎに月落つ一夜鮓の宿　朱●燐●洞●

評論

波斯帝國の危機

一

危ひかな波斯や、本春攝政ナスル、ウル、ムルク、新に歸國、大政を總攬し、米國財政顧問シュスター以下六名を招聘し、漸く改革の實を擧げんとするの時、圖らざりき、廢帝復位の兵亂を見んとは、

廢帝の不平は不思議にあらず、何となれば彼や滿腔の鬱憤を包藏して、國外に退去したるものなるを以て也、抑々廢帝は一九〇七年二月、父帝ムセフアルエドヂン崩御後即位し、在位二年有半、一昨年初夏國民派革命軍のテヘラン入城と共に、身を以て露國公使館に逃れ、次て露國政府の斡旋に依りて「再び歸國せざる」を條件とし、年金十六萬五千圓を得たりし也、爾後クリミヤに放浪し、或はメッカ回教聖地に向ひ、一見風流を樂むが如しと雖も、其間常にターコマン族、シャシエブン族等と交信し、復位の密謀に日も是足らざるの觀ありき、誰か亦今日の事あるを怪むものぞや、

二

若しそれ回教僧侶其他舊守派が此復位計畫に援助し、否な寧ろ其中心たるに至ては則ち明か也 蓋し彼等は憲政に反對すれば也、議會政治を好まざれば也、寧ろ一の傀儡的皇帝を圍んで、之を使嗾し、利用し、彼等の一團に利益ある政治を行ひたる昔年の夢は、彼等が忘れんと欲して能はざる所なれば也、

宜なるかな、ハマダンの民、先づ復位運動に聲援し、裏海岸の種族又之に應じ、政府をして蒼皇、遠征軍を

派遣せしむるに至れるとや、又最も峻嚴なる戒嚴令、遂にテヘラン府に布かれたるとや、

三

知らず復位運動の成否如何、こは今日推定す可き限りにあらず、然かも憂ふ可きは此運動の結果、紛々たる小戰亂、國内、到る所に洽きに至り、秩序紊亂を見る可きに在り、更らに極言すれば、此秩序の結果、更らに英露の對波貿易を阻害し、愈兩國の干渉を誘致して、一歩を國土分割てふ悲しき運命に進む可きに在り、是昨年十月英國が波斯に致し、南部警察事務引請を提議したる通牒に照すも、殆んど明瞭なるにあらずや、

顧みるに英露兩國は一九〇七年の協約に依りて、波斯の南北部を各其勢力範圍とせり、今は唯併呑の好機の待つのみと言ふも可也、此間に在つて幸ひに明敏の良攝政ありと雖も、在職半年に滿たず、國内の勢混沌たり、至急叛亂を鎭定せんとするも軍資無きを如何、軍資無きに加ふるに、交通機關の不備を以てす、從つて鎭撫すれば、從つて蜂起し、又々昔日の無政府狀態を再現するに於ては、其運命亦何ぞ知る可からざらん哉、吁嗟方今國を東洋に建つるもの、日淸兩國を除けば、僅に暹羅と波斯となり、吾人は至深の痛恨を以て、此弱國の形勢を望見せざるを得ず、

埃及統監更迭

埃及統監サー、エルドン、ゴルスト、七月中旬溘焉長逝す、彼や埃及政府顧問たると約十年、統監の要職に當りてより又約四年、冷靜の頭腦、至深の知識、洵に埃及の難局に處するに適好の人なりき、然かも在職中、屢々埃及人の攻撃を蒙り、又同胞たる英人の痛罵を買ひ、宛然四面楚歌の聲の觀ありしは何故ぞや、

何故などゝ怪むは、野蕃臭きの極みのみ、何となれば如何なる善政を施せばとて、完全なる自治を埃及人に許與せざる限り、青年埃及黨(即ち國民派)を滿足せしめ得可きにあらざれば也、又在留英人に至ては、クロマー卿の時代に於ても、英國の軟弱的政策を攻撃して止まざりしもの、統監にして全然專制的政治を行ひ、

埃及人の政治的慾望を壓服せざる限り、決して慷慨の聲を收めざる可ければ也、此面倒なる難地に立ちてゴルスト氏の政治が、少くとも前任クロマー卿の事業を繼承し、埃及の物質的、經濟的發達を助成したるは、誰か一箇の成功にあらずとせん哉。

然かも吾人はゴルスト氏の長逝を悲むも、必らずしも其退職を悲まず、蘇丹の勇將キチナー元帥が其後任に當れる如きは、即ち適材を適處に置くものにして、埃及と英國との幸福也、此點に於てゴ氏の靈は、恐らくは地下の眠り安かる可き乎、

左らばキ元帥の前途に横る難問題は如何、曰く埃及獨立思想の鎭壓、其一也、曰く回基兩教徒の調和策其二也、一昨年來埃及獨立の論議盛んに起り、前年首相ブートロス、パーシャ暗殺となり、次て議會の蘇西運河會社讓許期限延長策否決となりたるは世人の知る如し、又同地多數の回教徒と少數のコプト族等との衝突が、延ひて埃及人をして基教國の政治を嫌厭せしむるの傾向を生じつゝあるも、拒む可からざる事實也、文官たると武官たるの差異こそあれ、前任者同樣埃及事情に精通し、且つ之より一層勳功赫々たるキ元帥は、必らず、難關に處して能く誤り無きを得るならんか、

獨逸の高壓手段

西班牙のアルカサル占領に依りて紛糾せる摩洛哥問題は、又々獨逸のアガヂル港占領に依りて愈錯綜紛糾の程度を增加したり、此結果佛獨兩國は伯林に於て協議を重ね、摩洛哥を全然佛國の手に委する丈けに他に於て獨逸に報償を與ふる方法を議したりしが、獨逸は俄然其一案として實行六箇數提案を試みたり、曰く、

阿弗利加の佛領公果中、其海岸及内地をサンガル河に達する迄獨逸に讓與すると、

公果州に於て佛國が從來有する權利は悉く之を獨逸に讓與すると、

蓋し摩洛哥は獨逸の領地にもあらず、又之に何等特殊の利權を有せる譯にもあらざるに、今や俄然佛國領土中より數十萬方哩の割讓を求めんとす。是れ非常識

と言はゞ非常識也、亂暴と言はゞ、亂暴なるも、以て獨逸が飽く迄南摩洛哥を固守せんとする決心大なるを見る可き也、

此間に於て最も注意す可きは佛國の應戰策也、然かも英國の遣り口こそ見物なれ、一九〇四年英佛協商を見よ、英國は埃及に於ける其利權を佛國に承認せしめたる代りに、摩洛哥問題に關して佛國を支持す可きを約定したるにあらざる乎、打ち明けて言へば、英國が新日英同盟協約に於て、日米戰爭に際し日本に援助する責任を逃れたるは、聊か不忠實、不誠意の謗を免れ難し（内情は如何なるものありとするも、）吾人は徐ろに英國が如何に摩洛哥問題に處するかを見、以てアルビオン島民の果して信賴を値ゐするか否かを判斷するの材料とせんとす、

佛國內閣更迭

六月二十八日、佛國前藏相カイヨウ氏新內閣を組織す、內閣交迭の直接原因は陸軍政策が議會の信任を失ひたるに在るが如くなりしも、根本的原因は矢張りモニー內閣が已に人心を失ひたるに在りたりき、陸相ゴアラン將軍に對する議員連の反感は、唯交迭期を早めたるに過ぎざりし也、

然らば則ちカイヨウ內閣は如何、其顏觸を見るに、議會內の聯合多數黨を代表せしめて遺漏なきが如し、即ち其急進黨員五名（首相兼內相カイヨウ、外相ドセルヴエ、海相デルカッセ、法相クリユッピー、美術次官デユジャルダン、ボーメ）社會急進黨員八名（文相ステグ、陸相メッシニー、商務大臣クイバ、藏相クロト、農相パン、勞働大臣ルノオル、外に次官二名）民主極左黨二名（遞相ショメ、拓相ルブラン）を以て成れるに徵して知る可き也。唯前內閣に最も近かりし合同社會黨（ジョオレス氏一派）が疎外せられたるは聊か注目を惹くに足る、

進莫、此內閣が果して永續す可きや否やは容易に斷定し得可からず、何ぞや、首相カイヨウ氏は、一代の財政家たりと雖も、首相としては經驗質目共に不足の

嫌あり、其能く内閣の統一を保ち得可きや、猶疑問の裡に在れば也、況んや其政綱として發表せる選擧法改正、所得税案、三種酒産區限定の如き、議會の贊成を得可き見込少きに於てをや、

伊太利選擧法改正

伊國首相ジョリチー氏の選擧法改正案出づ、曰く三十歳以上の男子は無筆文盲と雖も投票を許す可しと、而して此規則の結果、有權者の數は約二倍に増加するに至る可しと稱せらる、

選擧權の擴張は可なりと雖も、之に依つて來る腐敗行動の増加を如何、蓋し選擧人の知識標準を低下せしむるが如きは、他國なれば兎に角、已に／＼選擧人の愚盲を經驗し來れる伊國に執りては得策にあらざる也。

嚴妃長逝

朝鮮嚴妃（德壽宮李太王妃）殿下、病を以て薨去す、行年五十八、悲ひ哉、

嚴妃の生涯は一箇のドラマ也、閔妃の嫉妬を買ふて宮廷を驅逐せられたる、閔妃沒後俄かに旭日の盛勢を示したる、併合後閑散の境涯に入らざるを得ざるに至れる、見來つて一種の趣味津々たり、

舊韓國の一記念、滅するの朝、隱客も亦轉た懷舊の想に咽ぶ。（以上懷沙隱客）



金棒秘記

饒舌子

⊙兵隊を士族からばかり取るか、又百姓町人からも取るかは、明治初年に於ける軍政當局者間の大問題で、進歩派と保守派との大論爭を讓したものだが、遂に進歩派の勝利に歸して國民皆兵の主義を採用した事は誰でも皆知つて居る事實だ。然し其當時に於ては、百姓町人から取つた兵隊が果して役に立つかどうかは、進歩派の人自身でさへも隨分危ぶんだ。之が最初の試金石はいふまでもなく十年の西南戰爭であつたが、薩摩隼人の連中などはよく〱この兵隊を馬鹿にして掛つたもので、熊本城を圍みながら、夜暗くなつて鐵砲が打てなくなると、城壁の處へやつて來て「オイ百姓共、生かして逃がしてやるから、生命が欲しくば今の中に逃げろ」と毎晩吽んだものださうな。然し新式の調練を受けた兵隊共の規律あり節制あつて、昔の武士よりも戰爭に强いといふことは此時初めて試めされたので、進歩派の人々も之れならばと初めて自説の正しかつた事に氣が落附いたといふ。

⊙西南戰爭といへば、其頃の戰爭は實に暢氣なもので、夜になると暗くて鐵砲が打てぬといふので休戰をする。て熊本城を圍んだ薩摩人も城壁の處へ來て、城内の兵隊共と無駄話をする。果ては城内の兵隊が義太夫などを唸り出す。すると薩兵は囃し立てゝ、「流石江戸子は旨い〱。」とやつたものだ。

⊙田原坂の激戰でも、ちよつと休戰をすると、薩兵は兵隊に向て、「オイ、土百姓、お前は靑い顔をして居るが腹が減つたらう、これを喰へ」などゝ握飯などを呉れたりした相だ。

⊙秋元子爵が、庭園術にかけて黑人以上の造詣あることは誰も知つて居る事だが、子爵の説によると、日本の庭園術は無論支那から傳つたものと思ふが、奈良朝平安朝時代には確かな文獻の徵すべきものがない。確かな事の分るのはずつと下つた足利時代からで、銀閣寺などの庭は當時の好模範であらう。然し概していへば、東洋の庭園術と西洋の庭園術には根本の相違がある。前者は個人の愛玩に資するのが目的で、後者は公衆の娛樂に供するのが目的だ。だから前者は最も廣いので一二萬坪、多くは五六千坪以下だ。其間に築山あり泉水あり、木立あつて、其間を縫ふ小徑も幅五六尺或は身を横ざまにして漸やく通る位にして居る。然るに後者は所謂公園であるから小さくて二三萬坪、大きいのは十萬坪以上もあつて、道路にした處で馬車でも自動車でも自由に馳らすことが出來

るやうに計畫せなくてはならぬ。だから庭園術を論ずるには東洋流と西洋流と、截然と二つに分けてやられねばならぬ。との事だ。

◎日清戰爭の際、高陞號を擊沈した事は當時なか／＼矢釜しい問題であつたが、之を擊沈した艦(ふね)は、浪花艦で、艦長は誰であらう、當時は大佐、今は大將にして伯爵たる東郷平八郎其人あつた。然し東郷をして此大膽なる行動を敢てせしめた人は、浪花艦の砲術長（？）をしてゐた村上格一といふ人で、「國際法上大丈夫だからおやりなさい」というても東郷は腕を拱いて「ウム」というて考へて居る。再び勸めても矢張り「ウム」だ。三度目にいうと、東郷は決然として「ヤレ」と命じた。

◎バルチック艦隊が對馬海峽を通るか、或は津輕海峽を通るか、又或は宗谷海峽を迂廻するかは、なか／＼大議論のあつた事で、當時司令官及び參謀などの會議には論戰の花が咲いた。上村將軍などはなか／＼鋭利な論客て、大氣焰を吐いた。然し東郷は餘り議論しないで、ジッとして聞いて居つた。此席に列した某參謀の言ひ草が面白い。「此三說には皆相當の根據があるから、議論をすれば水掛論に終る。然し私は東郷司令長官はどうあつても對馬海峽を固守するといふ事が分つてゐたので、會議中一言も口を出さなかつた」といつてゐた。

◎東京市の市會議員の選擧運動は、衆議院議員以上に激烈なもので、候補者は平均一人一萬圓も遣はなくてはならぬ事になつて居る。それといふのは、東京市は建設中の都會であるから、市會議員になつて居れば、市の請負事業とか何とかに、人よりも早く知つて事業師などゝ結託して儲けることが、出來るからだといふ。こう云ふ連中を先づ征伐して了はなければ東京市政の刷新も六つかしからうと某政治家の言だ。

◎巴里で世界博覽會があつた時、巴里全市を裝飾しなくてはならぬといふ意見から、町の隅々などにある汚ない小さい家を市で買上げて之を取拂ふとする計畫を立てた。之を聞き込んだ奴等は、それ儲け仕事が出來たぞといふので、そんな汚ない小さい家屋敷の値が數倍に騰貴した。處が市役所にもなか／＼利口な男がゐて、其汚ない小さな家の近傍にある市有の建物などに修膳を加へ初めた。すると、市役所で修繕するからには取拂計畫はやめになつたらうといふので、地價は舊に復した。其機に乘じて手を廻して市で買上げて了つたので、市ではちつとも損をせずに元の計畫の實行が出來た。

◎「國民新聞」の理事栗原氏が仝社主催の韓國觀光團の一行に加つて、歸途過つて汽車から墜落して死んだので社長の德富蘇峯氏は大いに力を落して居る。そして「論說書きの五人や十人死んでも、代りは何處にでもあるが、栗原の代りはない。あれは私の女房役で、私の嫌やな事を一切引受けて一人でやつてゐた。私が社員を叱りつけても、彼は宥めるので社員も直ぐ氣持を直してゐた。いはゞ私は楷書で、阿部は行書で、彼は草書であつた。私は今迄神經衰弱などを起した事はないが、今度はひどく頭をわるくして、永く韓國旅行をして來たのも、半ばは此憂を忘るゝ爲めであつた」といはれた。そして今度新築した國民新聞社の三階には「栗原館」と名づけて、以て仝氏の記念館とした。德富氏の故舊友人

に篤いといふ事は世間ではまだ一般に知らぬらしい。

◎「君の顔は彫刻的だね」と某文士が徳田秋江氏に向て褒めたか冷やかしたか分らぬ口調でいうた。「高山林次郎の顔は彫刻的であつた。僕は高山よりは男がわるいが此眉のあたりが一寸高山に似て居る」と眉のあたりを指尖で撫てゝ秋江氏は濟したもの。

◎「一寸見ては左程肥つて居るやうでなくて、實際は肥つて居るやうな女を私は好きだ」と島崎藤村氏が言ふた。

◎「奥さんがお亡くなりになつてお淋しいんでせうネ」と柳橋の藝妓が藤村氏にいふたら「淋しいよりも何よりも身體を持て扱ひかねてゐます」との答。

◎吾々は「森先生」とか「森さん」とかいうてお心易く願うて居るが、軍隊殊に軍醫仲間に於ける鷗外氏の勢力といふものは恐るべきもので、軍醫總監醫務局長森林太郎閣下を「森閣下」と呼ぶさへ恐れ多いというて居る。

◎濟生會の寄附金額を見ると、滿鐵總裁の中村是公氏が三萬圓、國澤新兵衛氏が二萬圓、岡松參太郎氏でさへ一萬圓だ「滿鐵といふ處は金の儲かる處と見えるノゥ」と某老政客が呟いてゐた。

新刊批評

▲海洋學講話

横山又次郎著
早稻田大學出版部發行

地學のオーソリチーたる横山理學博士の新著にして、地學の一分科たる海洋學を通俗に講話したるもの也。海洋學の目的とする所は「海洋の大さ、深さ、其中の沈澱物、海水の化學的並に物理的性質並に波浪、潮汐、海流となつて現はるゝ其運動の種類を研究」せんとするにありて、此書記載する所、明快とはいはひ難けれども、平讀にして、何人にも別り易きは、流石に老大家の俤ありといふべし。(定價一圓五十錢)

▲森林生活

水島耕一郎譯
文成社發行

米國の隱者的文學者トローの著「ワルデン」を譯せるものなるが、譯文は甚だ非文學的にして、文調、字面等一向に注意しあらず、又字句も雅俗の不調和著しく眼につき、あたら原著の玉を化して瓦となしたる心地す。然れども原著の内容は固より一讀するの價値あるものにて、此暑苦しき文明と暑苦しき天候の中に生けるものには、一服の清涼劑たるを失はず。(定價一圓二十錢)

▲訂正增補青年諸君

和田垣謙三著
至誠堂發行

和田垣博士が何時も元氣よく、ユーモアを以て天下の青年を笑はせながら教育するの妙手腕は世の夙に認むる處なるが、此篇二年前に公けせられたる「青年諸君」を訂正增補せるものにして、再び讀みても尙新たなる興味の湧き來るを覺ゆ。青年が爭うて此書を讀み、版を重ぬる十版以上に及びたるの偶然ならざるを感ず。(定價一圓)

▲和譯史記列傳（下卷）　田岡嶺雲譯註　玄黄社發行

和譯漢文叢書の第六編なり。史記列傳は文章を學ぶ者は何人も讀まざるべからざるものなる事、今更にいふを待たざる程の名文章なれども、吾等は漢文を假名交り文に直したるものを讀みては非常に興味の索然たるを覺ゆ。（定價一圓廿錢）

▲飛行器圖説　平山周著　東亞堂發行

「飛行機」なる言葉は目下の流行語なれども、實物を見たる人は餘り多からず、實物を見たる人も、其飛行する學理に至つては之を知るもの稀也。此書の敍述繁簡宜しきを得、何人にも明白に諒解せらる。苟も現代の智識に後れざらんとする人は一讀するを可とす。（定價一圓五十錢）

▲改版日本人種改造論　海野幸德著　富山房發行

著者の人種改造に關する論文は時々本誌にも掲載せられたることあるを以て、讀者の多くは著者の説の一班を知らるゝなるべし。吾人は著者の説に向て悉く賛成を表すること能はず。時に所説の餘りにドクマチックならざるやを疑ひ、時に結論の突飛なるに驚き、時に或は著者の自説を主張せんとする躁起的態度に反感を催すことなきにあらず。然れども世人が從來目を閉つて默過したる重大問題を提へ來りて、世人を警醒したる著者の功は之を認めざるを得ず。此書は眞理を闡明せる書としてよりはサッセスチブなる書としての功大なるものと思ふ。（定價一圓三十錢）

▲源氏物語大意　尾上登良子著　大同館發行

尾上柴舟氏夫人の著にして、源氏物語の大意を語りたるもの也。文章は雅文なれば吾等には讀みにくゝ思はるれど、婦人にはふさわしかるべし。源氏物語の國文中第一の傑作なることは何人も之を知れども、所謂桐壺源氏にて初めの一帖か二帖にて御免蒙る人多し。そは多く源氏の卷多くして讀み易からざるに基くことなれば、先づ此書の如きによりて大筋を辨へてから讀み初めなば、さる憂ひも少かるべしと思ふ。（定價一圓四十錢）

▲監獄夢物語　小河滋次郎評註

獨逸の原著を物語的に飜案したるものゝ由なるが、物語の中に、廿世紀の未來の監獄制度を説きあり、極めて眞面目なる著也。斯界のオーソリチーたる小河博士の評註亦博士の識見と理想を見るべし。（定價五十錢）

▲あきらめ　田村とし子著　金尾文淵堂發行

「大阪朝日」の懸賞、一等に當選したる小説にして、純文藝の立場より見て、慊らぬ節も少しとせざれど、概して筆も逆者に、觀察も行屆き現今の女流作家の作物としては確かに出色のものなるべし。（定價九十錢）

▲午後三時　吉江　勇著　東雲堂書店發行

「午後三時」以下戯曲十一篇を收む。吉井氏は最も新らしき脚本家の一人にして、取材構想多く夢幻的又はロマンチックなるも、中に一種現代的思想を含み、人を誘ふて詩的空想界に遊ばしむる魅力を備ふ。未だ精讀せざるも「淺草觀音堂」などなか／＼面白し。（定價一圓）

▲小説盲鬪　後藤宙外著　水野書店發行

鷗外氏の長篇小説也。部分〳〵の叙述などには餘り感心せざる箇處も少からざるが、全體として纏まりあり、又著者ならでは現はし得まじと思はるゝ思想も窺はれて、面白く讀まる。（定價八十錢）

▲國民教育東京講演　大隈家編輯局編纂　丁未出版社寶文館發行

大隈伯が其著國民讀本所説の主張を、益々廣く深く、弘布し且つ貫徹せんとの趣意より現代の學者政治家名士數十名に依頼して講演せしめたるものを集めたるもの也。中には依頼されて止むを得ず講演したるかの如きものなきにあらねど、普通の演説などに比して概して内容豐富に、眞面目なる所説多し。江湖に推奬するに足る。（定價一圓五十錢）

▲性慾論　大住舜譯補　精神修養社發行

トルストイ翁の著作中より性慾に關する所論を拔萃したるを譯したるもの也。翁の所論には往々非常識的のことなきにあらねど、人をして警醒せしむるに足る力ある議論も少からず。（定價五十錢）

▲旅より旅へ　吉江孤雁著　光風館書店發行

「夏旅」「山影」「廢人」の三篇を收めて居る。斯らいふものを書かせては孤雁氏は實に旨い。讀んでゐる中に「自然」の趣味といふものを感ぜずに居られない。（定價四十五錢）

▲近藤勇　鹿島淑男著　東京國民書院發行

幕末の一傑士近藤勇の事蹟を記したるものにして文章流麗、青年子弟の讀み物としてよし。（定價五十錢）

▲近世國文學史　佐々政一著　聚精堂出版

徳川期の文藝を二期に分ち、慶長十一年より享保二十年迄を前期とし、元文元年より慶應三年迄を後期とし、各期を代表する幾多の文壇の人物を細大洩す所なく羅列して其特色を詳究解説したる上最後に現代文學概觀の一篇を設けて一わたり現代文學の趨勢に迄説き及んで居る、七十有餘の風俗畫筆蹟等の挿入あり、中には珍品の少からぬも亦慥に此冊の一特色である。（定價壹圓貳拾錢）

▲さしゑ　高濱虚子輯　光華堂發行

雜誌ホトトギスの八卷以下の挿畫を更に纂輯して此篇を爲したもの、之に交ゆるに又同誌に現はれた幾多の作家の小品の佳什を以てしたもの無聲の詩、有聲の畫と相待つて趣味極めて津々たるもの、夏日消閑の好讀物たるを失はぬ、裝裝亦思ひ切つて凝つた美はしい本である。（定價金貳圓參拾錢）

▲時代思潮と事實（柴田榮庵譯教文館發行〇三十五錢）
▲曾我物語（全）（尙文館發行〇廿五錢）
▲赤穗義士銘々傳（全）（仝　上）
▲譯話浮世風呂（全）（東亞堂發行〇並製廿錢）
▲西鶴佳作集（第一）（仝上、並製廿錢特製卅錢）
▲太平記（第四）（仝上）
▲俠客傳（中編）（仝上）
▲平家物語（前篇）（仝上）
▲一休諸國物語（全）（仝上）

曾我物語以下皆袖珍本にして、一讀の價値ある古書をかゝる便利なる形に飜刻したるは喜ぶべし。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

消夏の好讀物

夏目漱石著

我輩は猫である

夏目漱石著 ■文學論（第四版）菊判美製 全一册 正價貳圓廿錢 郵税十六錢

夏目漱石著 ■漾虚集（第六版）菊判美製 全一册 正價壹圓四拾錢 郵税十二錢

上田敏著 ■小説うづまき（再版）菊判箱入 全一册 正價九十錢 郵税八錢

故藤岡作太郎著 芳賀矢一 藤井乙男 共編 ■東圃遺稿（最新刊）菊判箱入 全一册 正價壹圓五拾錢 郵税八錢

裝幀頗美製 全一册 正價金壹圓三拾錢 郵税金八錢

寸珍合本

漱石先生傑作の「猫」は御承知の如く出版當時から三册つゞきの單行本として今日まで洽ねく一般の御需用を充たして居りましたが今回更に購讀者諸君の御便宜の爲め縮刷合本の一册として刊行する事と致しました。價格の廉携帯の便、體裁の美は御覧になればすぐに分ります

大倉書店 東京日本橋 振替東京二三八

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

(中付の二)

心中

鷗外

お金がどの客にも一度はきつとする話であつた。どうかして間違つて二度話し掛けて、その客に「ひゆうひゆうと云ふのだらう」なんぞと、先を越して云はれようものなら、お金の悔やしがりやうは一通りではない。なぜと云ふに、あの女は一度來た客を忘れると云ふことはないと云つて、ひどく自分の記憶を恃んでゐたからである。

それを客の方から頼んで二度話して貰つたものは、恐らくは僕一人であらう。それは好く聞いて覺えて置いて、いつか書かうと思つたからである。

お金はあの頃いくつ位だつたかしら。「をばさん、今晩は」なんと云ふと、「まあ、あんまり可哀さうぢやありませんか」と眞面目に云つて、救を求めるやうに一座を見渡したものだ。「おい、萬年新造」と云ふと、「でも新造だ

けは難有いわねえ」と云つて、心から嬉しいのを隠し切れなかつたやうである。兎に角三十は慥かに越してゐた。

僕は思ひ出しても可笑しくなる。お金は妙な癖のある奴だつた。妙な癖だとは思ひながら、あいつのゐないところで、その癖をはつきり思ひ浮べて見ようとしても、どうも分からなかつた。併し度々見るうちに、僕はとう〳〵覚えてしまつた。お金を知つてゐる人は澤山あるが、こんな事をはつきり覚えてゐるのは、これも矢つ張僕一人かも知れない。癖と云ふのはかうである。

お金は客の前へ出ると、なんだか一寸坐わつても直ぐに又立たなくてはならないと云ふやうな、落ち着かない坐わりやうをする。それが随分長く坐わつてゐる時でもさうである。そしてその客の親疎によつて、「あなた大層お見限りて」とか、「どうなすつたの、貴君の道はひどいわ」とか云ひながら、左の手で右の袂を撮んで前に投げ出す。その手を吭の下に持つて行つて襟を直す。直すかと思ふと、その手を下へ引くのだが、その引きやうが面白い。手が下まで下りて來る途中で、左の乳房を押へるやうな運動をする。さて下りたかと思ふと、その手が直ぐに又上がつて、手の甲が上になつて、鼻の下を右から左へ横に通り掛かつて、途中で留まつて、口を掩ふやうな恰好になる。手をかう云ふ位置に置いて、いつても何かしやべり續けるのである。尤も乳房を押へるやうな運動は、折々右の手ですることもある。その時は押へられるのが右の乳房である。

僕はお金が話した儘をそつくりこゝに書かうと思ふ。頃日僕の書く物の總ては、神聖なる評論壇が、

「上手な落語のやうだ」と云ふ紋切形の一言で褒めてくれることになつてゐるが、若し今度も同じやンションン・オノレエルを頂戴したら、それをそつくりお金にお祝儀に遣れば好いことになる。

* * * * * *

話は川桝と云ふ料理店での出來事である。但し此料理店の名は遠慮して、わざと嘘の名を書いたのだから、そのお積りに願ひたい。

そこで川桝には、此話のあつた頃、女中が十四五人ゐた。それが二十疊敷の二階に、目刺を並べたやうに寢ることになつてゐた。まだ七十近い先代の主人が生きてゐて、隱居爲事にと云ふわけでもあるまいが、毎朝五時が打つと二階へ上がつて來て、寢てゐる女中の布團を片端からまくつて歩いた。朝起は勤勉の第一要件である。お爺いさんのする事は至つて殊勝なやうであるが、女中達は一向敬服してゐなかつた。そればかりではない。女中達はお爺いさんを、蔭で助兵衛爺さんと呼んでゐた。これはお爺いさんが爲めにする所あつて布團をまくるのだと思つて附けた仇名である。そしてそれが全くの冤罪でもなかつたらしい。

暮に押し詰まつて、毎晩のやうに忘年會の大一座があつて、女中達は目の廻るやうに忙しい頃の事であつた。或る晩例の目刺の一疋になつて寢てゐるお金が、夜なかにふいと目を醒ました。外の女ならこんな時手水にでも起きるのだが、お金は小川の遠い性（たち）で、寒い晩でも十二時過ぎに手水に行つて寢ると、夜の明けるまで行かずに濟ますのである。お金はぼんやりして、廣間の眞中に吊るしてある電灯を見て

ゐた。女中達は皆好く寢てゐる樣子て、所々て齒ぎしりの音がする。

その晩は雪の夜てあつた。寢る前に手水に行つた時には綿をちぎつたやうな、大きい雪が盛んに降つて、手水鉢の向うの南天と竹柏の木とに大ぶ積もつて、竹柏の木の方は飮み過ぎたお客のやうに、よろけて倒れさうになつてゐた。お金はまだ降つてゐるかしらと思つて、耳を澄まして聞いてゐるが、折々風がごうと鳴つて、庭木の枝に積もつた雪のなだれ落ちる音らしい音がする外には、只方々の戸がことこと震ふやうに鳴るばかりて、まだ降つてゐるのだか、もう歇んてゐるのだか分からない。

暫くすると、お金の右隣に寢てゐる女中が、むつくり銀杏返しの頭を擡げて、お金と目を見合せた。お松と云つて、瘦せた、色の淺黑い、氣丈な女て、年は十九だと云つてゐるが、その頃二十五になつてゐたお金が、自分より精々二つ位しか若くはないと思つてゐたと云ふのてある。

「あら。お金さん。目が醒めてゐるの。わたし大ぶ寐たやうだわ。もう何時。」

「さうさね。わたしも目が醒めてから、まだ時計は聞かないが、二時頃だらうと思ふわ。」

「さうてせうねえ。わたし一時間は慥かに寢たやうだから。寢る前程寒かないことね。」

「宵のうち寒かつたのは、雪が降り出す前だつたからだよ。降つてゐる間は寒かないのさ。」

「さうかしら。どれ憚りに行つて來よう。お金さん附き合はなくつて。」

「寒くないと云つたつて、矢つ張寢てゐる方が勝手だわ。」

「友達甲斐のない人ね。そんなら爲方がないから一人て行くわ。」

お松は夜着の中から滑り出て、弛んだ細帶を締め直しながら、梯子段の方へ歩き出した。二階の上がり口は長方形の間の、お松やお金の寢てゐる方角と反對の方角に附いてゐるので、二列に頭を衝き合せて寢てゐる大勢の間を、お松は通つて行かなくてはならない。

お松が電燈の下がつてゐる下の處まで歩いて行つたとき、風がごうと鳴つて、だだだあと云ふ音がした。雪のなだれ落ちた音である。多分庭の眞ん中の立石の傍にある大きい松の木の雪が落ちたのだらう。

お松は覺えず一寸立ち留まつた。

此時突然お松の立つてゐる處と、上がり口との中途あたりで、「お松さん、待つて頂戴、一しよに行くから」と叫ぶやうに云つた女中がある。

さう云ふ聲と共に、むつくり島田髷を擡げたのは、新參のお花と云ふ、色の白い、髮の縮れた、おかめのやうな顔の、十六七の娘である。

「來るなら、早くおし。」お松は寢卷の前を搔き合せながら一足進んで、お花の方へ向いた。

「わたしこはいから我慢しようかと思つてゐたんだけれど、お松さんと一しよなら、矢つ張行つた方が好いわ。」かう云ひながら、お花は半身起き上がつて、ぐづ〳〵してゐる。

「早くおしよ。何をしてゐるの。」

「わたし脫いで寢た足袋を穿いてゐるの。」

「じれつたいねえ。」お松は足踏をした。

「もう穿けてよ。勘辨して頂戴、ね。」お花はしどけない風をして、お松に附いて梯子を降りて行つた。

便所は女中達の寢る二階からは、生憎遠い處にある。梯子を降りてから、長い、狹い廊下を通つて行く。その行き留まりにあるのである。廊下の横手には、お客を通す八疊の間が兩側に二つ宛並んでゐて、そのはづれの處と便所との間が、右の方は女竹が二三十本立つてゐる下に、小さい石燈籠の据ゑてある小庭になつてゐて、左の方に茶室賽ひの四疊半があるのである。

いつも夜なかに小用に行く女中は、竹のさら〳〵と摩れ合ふ音をこはがつたり、花崗石の石燈籠を、白い着物を着た人がしやがんでゐるやうに見えると云つてこはがつたりする。或る時又用を足してゐる間ぢゆう、四疊半の中で、女の泣いてゐる聲がしたので、歸りに障子を開けて見たが、人はゐなかつたと云つたものがある。これは友達をこはがらせる爲めに、造り事を言つたのであるが、その話を聞いてからは、便所の往き返りに、兎角四疊半が氣になつてならないのである。殊に可笑しいのは、その造り事を言つた當人が、それを言つてからは四疊半がこはくなつて、とう〳〵一度は四疊半の中で、本當に泣聲がしたやうに思つて、便所の歸りに大聲を出して人を呼んだことがあつたのである。

* * * * * *

お金は二人が小用に立つた跡で、今まで氣の附かなかつた事に氣が附いた。それはお花の空床の隣が矢張空床になつてゐることであつた。二つ並んで明いてゐるので、目立つたのである。

そして、「あゝお蝶さんがまだ寢てゐないが、どうしたのだらう」と思つた。お花の隣の空床の主はお

蝶と云つて、今年の夏田舎から初奉公に出た、十七になる娘である。お蝶は下野の結城で機屋をして、困らずに暮してゐるもの丶一人娘であるが、婿を嫌つて逃げ出して來たと云ふことであつた。間もなく親元から連れ戻しに親類が出たが、强情を張つて歸らない。親類も川桝の店が、料理店ではあつても、堅い店だと云ふことを呑み込んで、とう〳〵娘の身の上を此内のお上さんに頼んで置いて歸つてしまつた。それが歸ると、又間もなく親類だと云つて、お蝶を尋ねて來た男がある。十八九ばかりの書生風の男で、浴帷子に小倉袴を穿いて、麥藁帽子を被つて來たのを、女中達が覗いて見て、高麗藏のした「魔風戀風」の東吾に似た書生さんだと云つて騷いだ。それから寄つてたかつてお蝶を揶揄つたところが、おとなしいことはおとなしくても、意氣地のある、張りの强いお蝶は、佐野と云ふその書生さんの身の上を、さつぱりと友達に打ち明けた。佐野さんは親が坊さんにすると云つて、例の殺生石の傳說で名高い、源翁禪師を開基としてゐる安穩寺に預けて置くと、お蝶が見初めて、いろ〳〵にして近附いて、最初は容易に聽かなかつたのを納得させた。婿を嫌つたのは、佐野さんがあるからの事であつた。安穩寺の住職は東京で新しい敎育を受けた、物分りの好い人なので、佐野さんの人柄を見て、うるさく品行を非難するやうな事をせずに、「君は僧侶になる柄の人ではないから、今のうちに廢し給へ」と云つて、寺を何がなしに逐ひ出してしまつた。そこで佐野さんは、內情を知らない親達が、住職の難癖を附けずに出家を止めるのを聞いて、げにもと思ふらしいのに勢を得て、お蝶より先きに東京に出て、或る私立學校に這入つた。お蝶が東京に出たのは、佐野さんの跡を慕つて來たのであつた。

佐野さんはその後も、度々川桝へお蝶に逢ひに來て、一寸話しては歸つて行く。お客になつて來たことはない。お蝶の親元からも度々人が出て來る。壻取の話が矢張縺いてゐるらしい。壻は機屋と取引上の關係のある男で、それをことわつては、機屋で困るやうな事情があるらしい。佐野さんは、初めはお蝶をなだめ賺すやうにしてあしらつてゐる樣子であつたが、段々深くお蝶に同情して來て、後にはお蝶と一しよになつて、機屋一家に對してどうしようか、かうしようかと相談をする立場になつたらしい。

かう云ふ入り組んだ事情のある女を、その儘使つてゐると云ふことは、川桝ではこれまでつひぞなかつた。それを目をねむつて使つてゐるには、わけがある。一つはお蝶がひどくお上さんの氣に入つてゐる爲めである。田舍から出た娘のやうではなく、何事にも好く氣が附いて、好く立ち働くので、お蝶はお客の褒めものになつてゐる。國から來た親類には、隨分やかましい事を言はれる樣子で、お蝶はいつも神妙に俯向いて話を聞いてゐても、その人を歸した跡では、直ぐ何事もなかつたやうに彈力を回復して、元氣好く立ち働く。そしてその口の周圍には微笑の影さへ漂つてゐる。一體お蝶は主人に間違つた事で小言を言はれても、友達に意地惡くいぢめられても、その時は困つたやうな樣子で、謹んで聞いてゐるが、直ぐ跡で機嫌を直して働く。そして例の微笑んでゐる。それが決して人を馬鹿にしたやうな微笑ではない。怜悧で何もかも分かつて、それで勘忍して、おこるの怨むのと云ふことはしないと云ふ微笑である。「あの、笑靨よりは、口の端の處に、竪にちよいとした皺が寄つて、それが本當に可哀うございましたの」と、お金が云つた。僕はその時リオナルド・ダア・ヰンチのかいたモンナ・リザの畫を思ひ

出した。お客に褒められ、友達の折合も好い、愛敬のあるお蝶が、此内のお上さんに氣に入つてゐるのは無理もない。

今一つ川桝でお蝶に非難を言ふことの出來ないわけがある。それは外の女中がいろ〳〵の口實を拵へて暇を貰ふのに、お蝶は一晩も外泊をしないばかりでなく、晝間も休んだことがない。佐野さんの來るのを傍輩が彼此云つても、これも生帳面に素話をして歸るに極まつてゐる。どんな約束をしてゐるか、どう云ふ中か分からないが、みだらな振舞をしないから、不行跡だと云ふことは出來ない。これもお蝶の信用を固うする本になつてゐるのである。

お金は背に大ぶ遲くなつてから、佐野さんが來たのを知つてゐる。外の女中も知つてゐる。こんな事はこれまでもあつたが、女中達が先きに寢て、暫く立つてから目が醒めて見れば、いつもお蝶はちやんと來て寢てゐたのである。それが今夜は二時を過ぎたかと思ふのに、まだ床に戻つてゐない。何と云ふ理由もなく、お金はそれが直ぐに氣になつた。どうも色になつてゐる二人が逢つて話をしてゐるのだと云ふ感じてはなくて、何か變つた事でもありはしないかと氣遣はれるやうな感じがしたのである。

* 　* 　* 　* 　* 　* 　*

お花はお松の跡に附いて、「お松さん、そんなに急がないで下さいよ」と云ひながら、一しよに梯子段を降りて、例の狹い、長い廊下に掛かつた。

二階から差してゐる明りは廊下へ曲る角までしか屆かない。それから先きは便所の前に、一燭ばかり

の電灯が一つ附いてゐる丈である。それが遠い、遠い向うにちよんぼり見えてゐて、却てそれが見える爲めに、途中の暗黒が暗黒として感ぜられるやうである。心理學者が「闇その物が見える」と云ふ場合に似た感じてある。

「こはいわねえ」と、お花は自分の足の指が、先きに立つて歩いてゐるお松の踵に障るやうに、食つ附いて歩きながら云つた。

「笑談お言ひでない。」お松も實は餘り心丈夫でもなかつたが、半分は意地で强さうな返事をした。

二階では稀に一しきり强い風が吹き渡る時、その音が聞えるばかりであつたが、下に降りて見ると、その間にも絶えず庭の木立の戦ぐ音や、どこかの開き戸の蝶番の弛んだのが、風にあふられて鳴る音がする。その間に別に一種特別な、ひゆう／＼と、微かに長く引くやうな音がする。どこかの戸の隙間から風が吹き込む音でゝもあるだらうか。その斷えては續く工合が、譬へば人がゆつくり息をするやうである。

「お松さん。ちよいとお待ちよ。」お花はお松の袖を控へて、自分は足を止めた。

「なんだねえ。出し拔けに袖にぶら下がるのだもの。わたしびつくりしたわ。」お松もかうは云つたが、足を止めた。

「あの、ひゆう／＼と云ふのはなんでせう。」

「さうさねえ。梯子を降りた時から聞えてるわねえ。どこかこゝいらの隙間から風が吹き込むのだわ。」

二人は暫く耳を欹てて聞いてゐた。そしてお松がから云つた。「なんてもあんまり遠いとこぢやなくつてよ。それに板の隙間では、あんな音はしまいと思ふわ。なんても障子の紙かなんかの破れた處から吹き込むやうだねえ。あの手水場の高い處にある小窓の障子かも知れないわ。表の手水場のは硝子戸だけれども、裏のは紙障子だわね。」

「さうでせうか。いやあねえ。わたしもう手水なんか我慢して、二階へ歸つて寢ようかしら。」

「馬鹿な事をお言ひでない。わたしそんなお附合ひなんか御免だわ。歸りたけりやあ、花ちやんひとりでお歸り。」

「ひとりではこはいから、そんなら一しよに行つてよ。」

二人は又歩き出した。一足歩くごとに、ひゆう〳〵と云ふ音が心持近くなるやうである。障子の穴に當たる風の音だらうとは、二人共思つてゐるが、なんとなく變な音だと云ふ感じが底にあつて、それがいつまでも消えない。

お花は息を屏めてお松の跡に附いて歩いてゐるが、頭に血が昇つて、自分の耳の中でいろ〳〵な音がする。それでゐて、ひゆう〳〵と云ふ音丈は矢張際立つて聞えるのである。お松も餘り好い氣持はしない。お花が陽にお松を力にしてゐるやうに、お松も陰にはお花を力にしてゐるのである。

便所が段々近くなつて、電灯の小さい明りの照し出す範圍が段々廣くなつて來るのがせめてもの頼みである。

二人はとう〳〵四疊半の處まで來た。右手の壁は腰の邊から上が硝子戸になつてゐるので、始て外が見えた。石燈籠の笠には雪が五六寸もあらうかと思ふ程積もつてゐて、竹は何本か雪に撓んで地に着きさうになつてゐる。今立つてゐる竹は雪が墮ちた跡で、はね上がつたのであらう。雪はもう降つてゐなかつた。

二人は覺えず足を止めて、硝子戸の外を見て、それから顏を見合せた。二人共相手の顏がひどく靑いと思つた。電灯が小さいので、雪明りに負けてゐるからである。

ひゆう〳〵と云ふ音は、此時これまでになく近く聞えてゐる。

「それ御覧なさい。あの音は手水場でしてゐるのだわ。」お松はかう云つたが、自分の聲が不斷と變つてゐるのに氣が附いて、それと同時にぞつと寒けがした。

お花はこはくて物が言へないのか、默つて合點々々をした。

二人は急いで用を足してしまつた。そして前に便所に這入る前に立ち留まつた處へ出て來ると、お松が又立ち留まつて、かう云つた。

「手水場の障子は破れてゐなかつたのねえ。」

「さう。わたし見なかつたわ。それどこぢやないのですもの。さあ、こんなとこにゐないで、早く行きませう。」お花の聲は震へてゐる。

「まあ、ちよいとお待ちよ。どうも變だわ。あの音をお聞き。手水場の中よりか、矢つ張こゝの方が近

く聞えるわ。わたしきつとこの四疊半の中の障子だと思ふの。ちよつと開けて見ようぢやないか。」お松はこん度常の聲が出たので、自分ながら氣強く思つた。

「あら。およしなさいよ。」お花は慌てゝ、又お松の袖にしがみ附いた。

お松は袖を摑まへられながら、ぢつと耳を澄まして聞いてゐる。直き傍のやうに聞えるかと思ふと、又さうでないやうにもある。慥かに四疊半の中だと思はれる時もあるが、又どうかすると便所の方角のやうにも聞える。どうも聞き定めることが出來ない。

僕にお金が話す時、「どうしても方角がしつかり分からなかつたと云ふのが不思議ぢやありませんか」と云つたが、僕は格別不思議には思はない。聽くと云ふことは空間的感覺ではないからである。それを強ひて空間的感覺にしようと思ふと、ミユンステルベルヒのやうに内耳の迷路で方角を聞き定めるなどと云ふ無理な議論も出るのである。

お松は少し依怙地になつたのと、内々はお花のゐるのを力にしてゐるのとで、表面丈は強さうに見せてゐる。「わたし開けてよ」と云ひさま、摑まへられた袖を拂つて、障子をさつと開けた。

廊下の硝子障子から差し込む雪明りで、微かではあるが、薄暗い廊下に慣れた目には、何もかも輪廓丈はつきり知れる。一目室内を見込むや否や、お松もお花も一しよに聲を立てた。

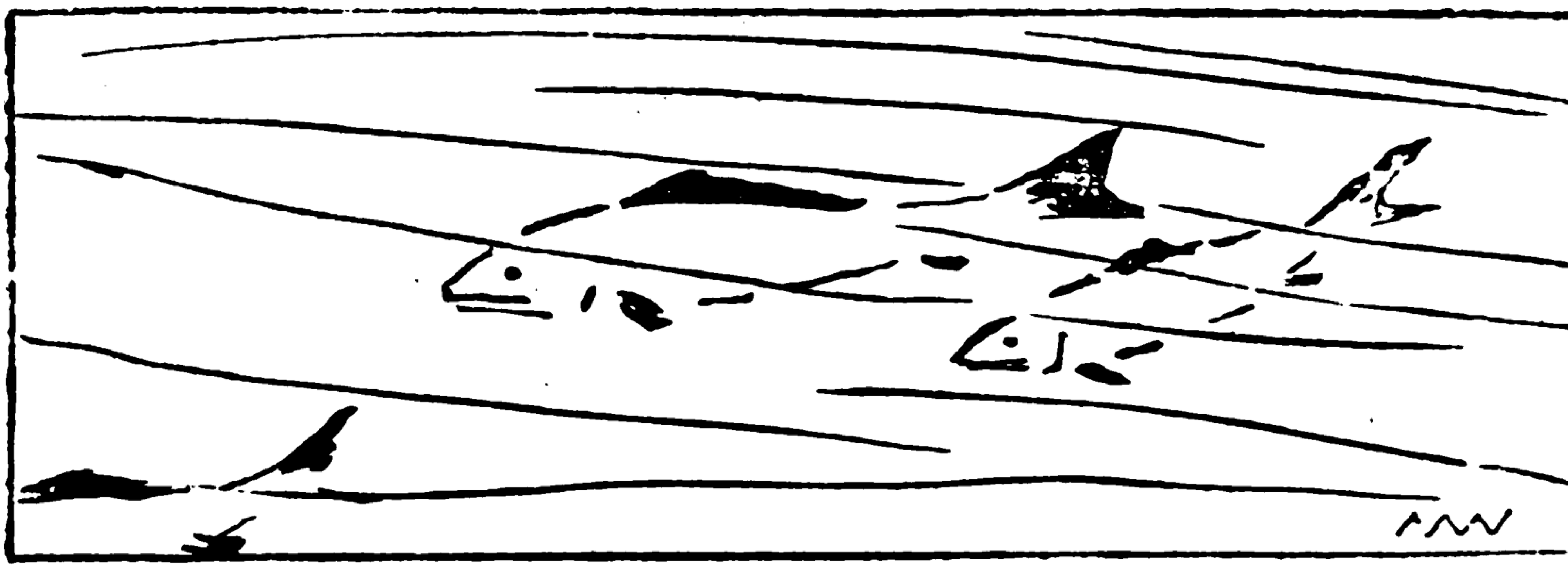
お花はその儘氣絶したのを、お松は棄てゝ置いて、廊下をばた／＼と母屋の方へ駈け出した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

川桝の内では一人も殘らず起きて、廊下の隅々の電灯まで附けて、主人と隠居とか大勢のもの丶騒ぐのを制しながら、四疊半に來て見た。直ぐに使を出したので、醫師が來る。巡査が來る。續いて刑事係が來る。警察署長が來る。氣絶してゐるお花を隣の明間へ抱へて行く。狹い、長い廊下に人が押し合つて、がや〳〵と罵る。非常な混雜であつた。

四疊半には鋭利な刄物で、氣管を横に切られたお蝶が、まだ息が絶えずに倒れてゐた。ひゆう〳〵と云ふのは、切られた氣管の疵口から呼吸をする音であつた。お蝶の傍には、佐野さんが自分の頸を深く剜つた、白鞘の短刀の柄を握つて死んでゐた。頸動脈が斷たれて、血が夥しく出てゐる。火鉢の火には灰が掛けて埋めてある。電灯には血の痕が附いてゐる。佐野さんがお蝶の吭を切つてから、明りを消して置いて、自分が死んだのだらうと、刑事係が云つた。佐野さんの手で書いて連署した遺書が床の間に置いてあつて、其上に佐野さんの銀時計が文鎭にしてあつた。お蝶の名丈はお蝶が自筆で書いてゐる。文面の概略はかうである。「今年の暮に機屋一家は破産しさうである。それはお蝶が親の詞に背いた爲めである。お蝶が死んだら、債權者も過酷な手段は取るまい。佐野も東京には出て見たか、神經衰弱の爲めに、學業の成績は面白くなく、それに親戚から長く學資を給してくれる見込みもないから、お蝶が切に願ふに任せて、自分は甘んじて犠牲になる。」書いてある事は、ざつとこんな筋であつたさうだ。

川桝へ行く客には、お金が一人も殘さず話すのだから、此話を知つてゐる人は世間に澤山あるだらう。事によると、もう何かに書いて出した人があるかも知れない。(完)



親

水野葉舟

一

母は新しく裁つた大島紬の袷に、黒い斜子の紋の付いた羽織を着て、床の間を背にして坐つて居た。長男の主人は、少し着古した黒い地のフランネルを着て、無雑作に背を机に凭せかけて、眠の足りない、少し腫れぼッたい目をして、母の顔を見て居る。

書齋も、客間も兼ねた八疊の室で……母は何か心の中で用意をして居た土産でも持つて來たやうに、何處かに静かな落付いた表情をして居る。玄關を上ると、平常のやうに默つて、どし／＼この室に入つて來た。居間からその足音を聞き付けて、慌てて出て來た長男の嫁が手をついて挨拶をす

るのに、型のやうに一寸、大樣な樣子をして頭をさげると、「平常の通りまだかい？」と聞いた。輕く可笑くなつて來たやうな笑ひを見せて居る。嫁は心持赤い顏をして
「ハア」と言ふと、そつと立つて起しに行つた。
　すると、母は隣の室の唐紙の方を向いて
「オイ何時まで寢てるの？……もう、お晝だよ。」と太い聲で言つた。長男は、い丶心持に眠つて居たのを、妻君の慌てた調子で起された。すると、その母の聲が耳に入つた。子供の時から聞き馴れて居る太い女らしい優しみの無い聲を聞くと、子供の時から何時でも感ずる、何とも名の付かない恐れるやうな、貝が蓋を閉めてしまふやうな心持が、さッと影をさした。
　そして、隣の室で母に返事するでも無く、
「フム……」と獨て自分を笑つたやうな聲を聞かせた。
　着物を着て、顏を洗ひに緣側に出ると、まだ露が日に光つて居た。
「いらつしやい。まだ早いぢやありませんか……今朝はすてきに早いや。」と言つて、洗つた髮を分けながら、長男は室に入つて來て坐つた。母はそれをぢつと見ながら
「相變らず、早起きだね……」と言つたが、唇の邊が堅くなッて居た。長男は一寸甘へるやうな笑ひ方をして見せながら
「何處かに往らッしたの？……宅からすぐですか？」と聞いた。

「すぐ來たんだがね……今日はね、お前に少し話さうと思ふ事があつてね。」

母は強い目をして長男を見た。

「何です？」長男はものものしくそれを胸に響かした。

「何つて事も無いんだがね、不思議な話があるんだよ。私はね此頃……」母は自然と聲をひそめるやうにした。「高野さんつて言ふ人を信仰してるんだがね。それは不思議だよ」

「何です？……その高野さんッてのは」

長男は驚いたやうに口を尖らせた。

「まあお聞きなさい……」母は思はず手をあげて長男を靜めたが、澁い、見下げるやうな表情をした。

「その高野さんッて方はね。もう私位ないゝお婆さんなんだよ。そのお方が觀音樣を信じてね、その信念で人の病氣を治しなさるんだ。」

「へえ……」長男は目で微に笑つた。

「これだけ言たんではね、それはお前なんかは馬鹿にするかもしれないけれどね。それは本當に不思議なんだよ。たゞ氣合ひでね、人の病氣をすつかり治しなさるのだがね。中々よく治るのだよ。高野さんの言ひなさるのはね、これは決して私の力ではありません。皆(みんな)日本の神樣が、私達にして下さるのだ、だから、この術は誰でも出來るつてね。私も、此間からその術をさづかッたのだよ。」

「母(かあ)さんが？……」

「まあ……それてね、私も初めの中は、何だか變だッたけれど、それは本當に不思議なんだよ。」と母は言葉を切つた。

「此間もね……」と言葉をついだ。長男はその顏を前から見詰めて居た。子供の時分から、始終何か話をする時には、必ず母の目が重くものを思ひ詰めたやうになる……少し角のある目で、怒るとその目が憎むやうに光る……よく、その目で叱られた。長男は母の目を見て居ながら、この叱られた時の事を思ひ出して居た。その間にも、强味のある、すんだ母の話聲が耳に入つて來て居た。

「……その先生の方と一緒に、淺草の觀音樣にお參りに行くとね。それはまあ、氣の毒な……もう六十を餘程越した、宅の祖母さん位な爺さんが、杖をついて、やつと歩きながら、お詣に來て居るんだよ。それを見ると、高野さんて方が、本當に氣の毒てはありませんか、あの人も、昔はどんな事をしたのか知れないが、あんなになッて、觀音樣を信心してるんだから、あれは治して上げたくッちやいけない、ッて言つてね、その爺さんをね、すぐ傍の一寸した家に連れてッてね、その術をすると、お前、すぐその足が輕くなッたッて言ふんぢやないか……爺さんは、淚をこぼして、まあ、これは全く觀音樣のお引き合せだ。何と言つてお禮を申し上げてい〻か分りませんて言ふんだらう……」母は自分の言葉に動かされて、もう淚ぐんて來た。

「ふう……」長男も、母の話につい引き入れられて居た。「そんな事もあるかもしれませんね。」

「それて、高野さんは、何もお禮をして下さる事はいらないから、もし思召があッたら、澁谷の道場に

お詣りに來て下さればいゝッて言つて、別れて來たがね……本當に不思議ぢやありませんか……」母は滿足したやうに話を終つた。

「ふむ……」長男は、薄く髭の生えかゝッた口を、何か考へさせられて居るやうに堅く結んで居た。頭の中には、基督や、高僧の傳記に書いてある奇蹟の事や、催眠術の實驗の事などが思ひ浮べられて居た。

母子は暫く、言葉をとぎらせて居た。すると、母は

「それでね。今日は一つお前だちにも爲て上げようと思つてね。」と言ふと、一寸長男の目を覗くやうに見た。

「さうですか……」長男はつい笑が口の邊に浮んだ。すると

「まあして御覽……お前達は何とか思ふかもしれないがね。それは本當だよ。」

「母さんも、もう出來るのですか。」長男は又輕く笑つた、面白いものを見るやうな顏をした。母は辯解するやうに、

「いゝえ、高野さんがね。この術は誰にでも出來る事だ。たゞ、信念さへあれば、子供でも出來る事だつてね……私にも、宅では父さんにも授けて下すつたの……」

「さうですか……」長男は妙な氣がしたので口を噤んだ。この母が、何を見て來たのか、それがすぐ心に領かれなかッた。すると

「如何だい？……お前達は嫌かい？」と言つた母の顏は曇つて居た。長男は母の心持が重い石のやうに

感じられた。

「嫌ぢやありません……だけど、一寸變だッたから」

「何が變なの……」母は笑つたやうな澁い顏をした。

「だッて、母さんがそんな事をするッて言ひなさるんだもの……思ひ掛けないぢやありませんか。」

長男はばつを合はせるやうな目をして、母を見た。

「何にも變な事はないさ……おや、すぐ爲よう……お才をお呼び。」と氣忙しく言つた。

「お才、お才」長男はまだ何處か腑に落ちないやうな顏をしながら、呼び立てた。臺所の方で、嫁が「はい只今」と艶のある聲で返事をするのが聞えた。

「此間から、又脚氣だッて言ふぢやないか？……どんなだい。」と母は手を輕く膝の上で組んで、人を待つて居るやうな樣子をして聞いた。

「大した事でも無いでせう。少し心臟の鼓動が高いつて言つてましたね。」長男は無頓着さうに言つた。

「さうかい。ならいゝが……ひどくなられると厄介だからね。それにこの術は、脚氣にはそれはよく利くのさ……私も此間お勢さんの處で、近所の人だつて言ふのを爲たんだよ。もう脚氣で一月も寢てるんだつて言ふ人だつたが、一度してから三日ばかりして行くとね。大變いゝんだよ……」

嫁は直ぐ臺所から出て來なかつた。母はふッと言葉を切ると、氣が苛つたやうに

「何をしてるんだらうね……」と言つた。

「何か、たさいてるんては無いのてすか？……」
「そんな事はいゝのに、早く來ればいゝぢやないか。」
「お才」と長男は大きい聲て呼んだ。
「ハイ」
才子は隣の室て返事をした。そして、唐紙を開けて入つて來ると、蒸氣の立つて居る、プリンを盛つた菓子皿を持つて入つて來た。
母の後に少し離れて坐ると
「一寸、つまらないものを作へてましたもので、つい遲くなりました。」と言つて、それを出した。
「まあこんなものは如何でもいゝのに……それよりか、さあ一つ爲ませう。」と、母は氣忙しさうに言つた。
「母さんが、不思議な術を覺えなすッたさうだ。それで病氣が治るんださうだからね。それを今やつて戴いたらいゝだらう。」と長男が言葉を添えた。
「はあ……」才子は飽氣にとられたやうな聲を出したが、目て訴へるやうに、ぢッと夫の顏を見た。
「さあ、此方にお出……」と母が急した。
「は……」と言つたが、才子は一寸遠慮するやうに母の顏を見て、「如何しますんてす？」と、夫に聞いた。

「そんな事はまあ後で分るから……さあ、もつと、私の前にお出て」

才子は腑に落ちない顔をして、母と夫との間ににぢり寄つた。母は膝を立てると、才子の背に廻つて深く息を吸ひ込んで、手で背から腰を幾度もなで降した。そして

「エイッ」と氣合をかけると、指を組んで、ぢつと何かを念じた。才子は少し腑目になつて、途方に暮れたやうな顔をして、目を沈ませて居た。が、身體をおもちやにされるやうな氣がした。

母は背を一通り撫でると、才子を横にして、

「脚氣だつて、何?……何方の足が重いの?」と聞いた。

「左の方ですの……」才子は一生懸命でこらへて居た息をヤッと、吐き出したやうに、嗄れた聲で言つたが、夫と夫の母との間に長くなつて居るのが如何にも、氣づつなかつた。

「此方?……」と母は才子の左の足の膝を押へた。

「えゝ……」と、倦い足の筋を押されたので、太い眉の間に微かに皺を寄せた。母は、その筋を押してゆるく揉むやうにすると、又氣合をかけた。

二十分ばかりして、それがすむと、母はヤッと氣が落ち付いたやうに。

「これで。いゝんだよ。如何?。足が輕くなつた?……」と滿足らしい目をして、微笑した。

「えゝ……」才子は急いで居ずまゐを直すと、手をついて禮を言つたが、まだ腑に落ちないやうな、困つた顔をして居た。

母のする事をぢつと見て居たが、長男はそッと笑ひ度いやうな氣がした。才子が困つた顏をして居るのを見ると、可笑しい心持が、隱せなくなッて、笑ひ顏になッた。て、母と顏を見合せると

「さう言ふ事をするんですか？」と言つたが、何だか自分の笑つて居たのを母に見られたやうなので、

「まあ一つ、この菓子をおあがんなさいな」と先づ皿の傍につけてあつた、匙をとつて、自分から、プリンの端を一匙口に入れた。

母は氣がぬけたやうな心持がした。手持無沙汰な感じをしたが、嫁が居るので、默つて菓子の匙を手に取つた。

母と、長男とは暫く何方からも、ものを言ひ出す機會が無かッた。と、才子が折を見付けたやうに、母に一禮をすると、茶の道具を持つて立つて行つた。母は目でその跡を見送つたが、

「お前さん達は人の爲る事を、けなしてお出だけれど……まあ信じてごらん。」と言つた。長男は

「えゝ、信じますがね。僕には、まだよく腑に落ちないんです。」と言つて、氣にしないやうに、橫を向いた。

朝の食事をしないので、長男は腹が空いて居るやうに、一心にその菓子を食べた。その中に、母は急に歸ると言つた。長男は、慌てたやうに菓子の匙を置くと、懷つこい目をして母を止めた。すると母も和い聲をして

「本當にお前はまた御飯前だッたね……そんな事をしてはいけませんよ。私はこれから、本郷まで行く用があるんだから……また來るよ。」と言つて立ちかけた。

「やッぱりその用で？……」

「いゝえ、これから行くのは、そらあの何さ。お勢さんの從兄の……木村の事さ。」

「う……木村つて、あの跛だとかッて言ふの？……あれが、如何かしたのですか？」

「如何するッてお前、宅に向つては如何しよう事は無いけれども、此間、お勢さんが來てね。それは可哀さうなんだよ。主婦さんがね、この薄寒いのに、紺絣の單衣一枚で出て來て、金を借りに來たのだとさ。木村はそんなて、碌に役にも立たないからね、此間まで小使をして居た病院の方も止されてしまッて、何をする事もなし、主婦さんが、少しばかり店に駄菓子を並べて居るんださうだよ。何になるもんかね。」

母は又何時かそこに腰を落ち付けて居た。長男はその話を聞くと、急に眉に皺を寄せた。

「僕はまだその木村ッて言ふのには逢ッた事が無いが……隨分ひどいんですね。」

母もそれに連れて眉に皺を見せたが、

「本當に困るんだよ。あんな人ばッかり居て」と、何か考へるやうな顏をした。が、すぐ

「さ、まあ往きませう」と言つて立つた。長男も何となく滿足して一緒に立ちながら、才子を呼んだ。才子は馳け出して來て、次の室の間に膝をつくと

「あら、御飯を召上つていらッしやるやうに、仕度しとりますが」と言つた。それを振り返つて見ながら大様な笑を見せて

「今日は急ぐから‥‥それはこの次までお預けしませう」と言つて、母はずん／＼出て行つた。

「他處に廻りなさるんだとさ。それだから‥‥」と言つて長男は「僕、そこまで送つて行かう‥‥」と母に隨いて出て行つた。才子は玄關まで隨いて來て、二人を見送つたが、何處か茫然として居た。

二

暫くして歸つて來て、玄關を上らうとして、長男は才子と顔を見合せた。その拍子に

「阿母さんは又妙な事を始めたもんだな‥‥如何だッた、お前くすぐッたかッたらう？‥‥」と言ッて血色の美い、苦勞の無さゝうな顔が、ぱッと笑つた。才子もそれを受けて、そッと目の邊に笑を含ませたが、

「くすぐッたいなんて事は無かッたけれど‥‥」と言ひさした。

「けれど、可笑かッたか？」

夫は戯けるやうな表情をして、才子を見た。そして、ずッと座敷の方に通つて行つた。その後に隨いて入りながら、才子は默つて考へて居た。今でも恐ろしく殘酷な事をする手で、わざと柔かく撫ぜられた後のやうな氣がする‥‥

て、座敷に入らうとする處で斯う言つた。

「………たゞ、申し譯の無いやうな氣がしましたわ。」
「ハヽハヽ……」と夫は高笑をした「巧いなあ……お前はお世辭者だよ。その調子を阿母さんの前でもやつてほしいもんだね。」
「お世辭ぢやない……私、本當にさう思ひましたのよ。」そして、才子は薄く白粉の付いた頰を赤くした。
「何でもいゝが、阿母さんは醉狂だな。」と言つて、夫は口を噤んだ。暫くすると
「あゝ、今日はたまの日曜だ。何處かに出て行くかな。」と言つて、大欠伸をした。才子は驚いたやうな目をして、その顏を一寸見たが、默つて坐つて居た。

　それから二日ばかり經つた日の午後に、長男の亮一郎は、務め先きの銀行の事務室に居ると、電話口に呼び出された。受話器を耳に當ると、母の聲がした。
「如何してます？……あんまり來ないから、今日あたりは銀行の歸りにお寄りなさい。父さんにも逢はないといけませんよ。」
「つい、御無沙汰をしました。今日は伺ひます……つい、一寸勉強してる事があッたものですから、」と答へると、電話を切つた。そして、自分の倚子に歸つて來ると、
「チョッ！」……と低く舌打をした、「今日は何かお小言だな。成程、親父の顏を一月も見なかッた」と呟いたが、髮の眞白な、目の鋭い親父の、素氣なく、口を噤んだ顏が思はれると、思はず力のない目をし

た。何となく氣がとがめるやうな、おどおどした心持になッた。

て、四時が打つと、急いで机の上を片付けて、銀行の門を出たが、氣が進まないやうに、チョッキの下を幾度も引つ張つて見て、

「チョッ……とにかく親父の歸つて來ない前に行つてゝやらう。さうしないと尚ほ、ばつが惡いからな。」と自分で自分を紛らして見ながら日本橋から電車に乗つた。

赤坂の父の家に上ると、久々て廣い座敷を一寸覗いて見た。母は離室の間に居ると言ふので、どし／＼緣側を音をさせて通ると、廊下の曲り角でばッたりと出くわした。亮一郎はすかさず

「や、御無沙汰をしました。」と言つたが、母は何か含んで居るやうな顔をして見せた。「まあ此此方において……父さんのお歸り前に來てくれてよかッたよ。」と言ひながら、先き立つて、離室の方に引き返して行つた。

「僕もさう思ひましてね。隨分御無沙汰をしてしまッた。」

「本當だよ。」

と言ひながら、離室に入ると、母はそこにある坐布團をとつて、長男に敷いてやッた。亮一郎は無雜作にそれに坐ると、ばつを隱すやうに、にや／＼して母の顔を見た。

「まあ、お前は如何して居たんだい。」母は見据ゑるやうな目をした。

「なあに、ついうか〳〵して居たんですよ。」長男はフッと、うるささうな顔をした。

「うか〳〵したぢや無いよ…本當に親の事なんかまるで忘れてしまッてるんだね。」母の言葉が尖つて來た。

「さうぢやないんですがね…」

「さうぢやないも無いぢやないか、今日も私が留守に行つて見ると、才は此間は有難うございましたとも言やしない。だから、此方から、如何かッて聞くと、ハア、大變ッて言つたきりだ…本當にお前達には駄目だね」母は惜むやうに、深い色の目をして長男の顔を見た。長男は微に唇を慄はしたが、

「今日いらしッたんですか?…そして爲てやりなすッたんですか」と言つたが、味氣ない氣がした。こいつだ。こいつを喰はされるんて、長男の身て、無理に別居したんだ、とすぐ、二年前に別居した時の事を思ひ出した。暗い、冷い母の目を見ると、長男はたゞ身體が慄えるやうに、母の人を憎む心持を感ずる。

母は少しして、素氣ない言葉付きて

「爲には來たがね。何だか迷惑さうだッたよ」と言つた。母は思はずぢれた聲を出した。長男は困つたやうに、

「そんな筈は無い。誰も迷惑さうに思つてやしませんよ。才も大變好いッて喜んでましたがね。」

「それても、お前達は駄目さ!…全く信ずる心が無いんだもの」

長男は厭ふやうな顔をして口を噤んでしまッた。そして母の顔を見て居たが、ふッと、親から付き離されてしまッたやうな、寂しい氣がした。急に胸がどき／＼して、母の前に坐つて居る、大きい身體が如何にも無作法な、きまりが惡いやうに感じられた。て、そッと窮屈な洋服を着た膝を、坐り直さうとする時に、どし／＼と廊下に足音がした、弟の哲二が日に燒けた大きい顔を出した。

「や、兄さん、いらッしやい。」と言つて坐つた。母は默つて居た。亮一郎も默つて灰をなめたやうな顔をして居たが、やッと氣を換へて

「久し振りだね。」と、無理にしたやうな薄笑ひをして見せた。

「僕も此間から一寸行かうと思つてたんですが……」哲二は兄と母との顔に見える不快な表情を見ると故と蟠りのない調子で言つた。そこへ、父の車が、門で止つたベルの音がしたので、三人ともごた／＼と立つて行つた。

　父の居間になつて居る六疊で晩餐がすむと、兩親の前で亮一郎は溶け合はない顔をして、手持無沙汰に坐つて居た。父は脇息に依りかゝつて、食後の爪楊枝を前歯で嚙みながら、目の前に居る家族が目に入らないやうに、何か考へて居た。父の後は一間の床の間で、その上には、瓶にダリヤの花が一束、摑み挿しに挿してある。タンタラムの電光が、眞白な唐紙に反射して、人の顔を鮮かに見せる。母は父の傍に、背を圓くして眼鏡をかけて新聞を見て居た。が、ふッと顔を上げると、長男を見た。

「それでも、才は私の爲たのが利いたッて言つてるのかい。」と言つた。もう餘程、和らいだ調子だッた。

亮一郎は澁い顏をして

「さう言つてましたよ。」と言ふと、思ひ付いたやうに時計を出して見た。「もう、八時だ。僕は今一寸した論文を書いてるんです。學校の講師が主幹してる雜誌に載せて貰ふ約束で……」と、誰に言ふとなく言つた。父も母も答へなかッた。

「では、御免蒙ります。今夜はもう歸ります。」と言つて父に挨拶をした。父は形ばかりに頷いた。母は長男が立つと一緖に立つて、後から追ひかけるやうに歩きながら、

「良かッたら、良いッて、電話ででもお知らせよ。それに、才もちッと顏を出させなさいよ。」と言つた。

亮一郎は

「えゝ、えゝ」と言つて逃げるやうに家を出てしまッた。

三

才子はそれから、二三度、足繁げく赤坂の宅に行つた。

母はその度に、大低その高野さんの會に行つて居ると言ふので留守であッた。四度目に行つた時には、母は珍らしく父の居間で縫ひ物をして居た。才子の入つて來たのを見ると、意外に機嫌のいゝ笑ひを見せた。

才子が、形のやうな挨拶をすますと、ひよいとしたきッかけを作つて、母はすぐ、例の高野さんの話

を始めた。澁谷の道場で使はれて居る下女なども、高野さんの感化で、實に傍から見ても、感心する程獻身的に仕へて居る。高野さんはそれに向つて……」あれもね。本當にこの信念のおかげて、いゝ人になりました。私はありがたい、ありがたいと言つてお禮を言つてますよ。」と言つたとか、近頃大阪の方に旅行した、やはりその道場の人が、歸つ來る道で、汽車の窓から――その時には丁度汽車が濱松の海岸を通つて居る時であつたが、海の方に當つて、紫の雲がたなびきその上にちやんと觀音樣のお像が見えたと話をした。それを聞かれると、高野さんは「皆さん、そこですよ。お信じなさいよ。別の邪道に迷はないやうにして、よくこの御先祖の神樣をお念じなさいよ」と言ひなすッてね……とか、話して居る中に、自然と聞いた事の無い高野さんの聲色まで使つて話した。

才子は、如何思つて好いか分らない樣に、默つて聞いて居た。家の中はきちんと片付いて居て、少し距てた臺所で、低い話聲がする外には、人の氣も無いやうに靜かだ。室の中の裝飾から、何もかも、落ち付いた感じをさせるやうになッて居る。母は父の脇息に輕く身體を凭せかける樣にして話して居た。才子は耳がしんとなつて居るやうで、それに何となく氣をとられながら、夫の母の話を聞いて居た。話が、丁度、今のこの現に身體が生て居るとは、もう全て昔の昔の時に起つた、不思議噺を聞いて居るやうであつた。

て、折ふし、ふつと母を見ると、色の淺黑い、母の顏に、小さい目が強く光るやうに自分の顏を見て居た。て、思はず視線を反らして、俯し目になつて、謹んで聞いて居た。母はだん／＼自分の話の興に

乘せられて來た。

「此間もね‥‥それは恐ろしいやうだつたよ」と、又次の話に移つた。「才さんなんかも、よく聞いて置いた方がいゝんだがね‥‥その高野さんの御亭主つて言ふのは、それは困つた人ださうてね。高野さんとの中に、六人も子供があるのに、他に妾見たいにして、女を置いてあるんださうだよ。そんな人だもんだから、高野さんの方て、見限つてしまつて、別居して居たが、男の方では、まだ高野さんに未練があつてね。何かごた／＼して居たんだが‥‥」或る晩に、高野さんと、別に三四人の人が集まつて、祈つて居ると、障子が俄にぱつと明くなつて女の影が映つた。すると、高野さんの亭主は眞靑になつて、懺悔して、すつかり改心するッと言つた‥‥

「その女の執念なんだよ‥‥」と言つた。才子はたゞ「はあ、はあ」と餘儀なく返事をして居た。

室には、初秋の頃の午後の日が、障子に明々と映つて居た。母は如何にも、氣が落ち付いて居るらしく、身體をゆつくりさせて、話して居る。

「才さんも、一つその道場に行つて見ては如何？‥‥そこには隨分種々な人が來て居るよ。學生ばかりの會もあるしね、婦人ばかりの會もあつてね。此先きの大町さんつて、伯爵の華族さんの若い奥さんも見えるし‥‥一週間に一度だけだからね‥‥才さんも信念を持つて御覽よ。」

「はあ‥‥」才子は身體をもぢもぢさせた。

「その時には、芝のお寺の方から、お說教もあるしね。それは爲めになるよ」

「はあ……」

「まあ歸つて、亮一郎とも相談してごらんなさい……私も、だん〳〵入つて見ると、本當に有難い敎だしね。高野さんも、今は私達が熱心になつて、やれば、この敎はそれこそ立派になつて行くつておつしやるし、それに何より人助けだし……私もね」

母の心の中には、この事より外に考へて居ないやうに言つた。

亮一郎と才子とは、母が、如何して何を信じて居るのか一向分らなかつた。それて、兎に角、成る可く身體を遠くの方に置いて、母の言ふ事を聞いて居る事にした。才子が言はれた、道場行きも何とか口實をつけて有耶無耶にする事にした。

しかし、才子は母の目が恐い。肉が落ちて、髮が薄くなつた、淺黑い母の顏が、高野さんの話をする時には、目の底に重い强い力が籠つて來る。それを見ると、母の顏が計る事の出來ないものを含んで居るやうに思はれる。才子は何と名も付けられないがそれを恐れた。亮一郎も母の此頃の事を考へると、母が何か遊戲でもして居るやうに思はれた。何でも始めると、必ずむきになつてしまふ人てはあつたが、今度のやうに夢中になつて居る事は見た事が無い。で、本氣には出來ないが、逢つて母の顏を見ると、何だか何とも知れぬものに脅されるやうな氣がされる。

て、別れて來ると、必ず種々な事を考へる。母顏身體の中に、盲目の或る暴力が働いて居て、それて

母が引き廻はされて居る姿が見える。

或日、夜になッて歸つて來ると、亮一郎は、不愉快な憤を含んだ顏をして居た。室の電燈をわざと明るい球に換へて、坐ると、前に坐つた才子を見て、ふッと口を切ッた。

「困つたな。阿母さんは遂々おれ達を飛んでも無い親不孝ものにしてしまッた…………」才子はすぐ不安らしい目をして夫を見た。亮一郎は才子と向き合つて坐つて居ると、胸にあるだけの事を言はずには居られなくなつて、返事をせぬのもかまはずに言葉を續けた。

「阿母さんは自分だけて怒つて、好きな事を言つてるから困る。僕達の身になッて少しでも察してくれる心持があるといゝんだがな。…………今日又、やられちやッたよ」と聲をおとした。すると、その顏に微かに和かい、落ち付いた表情が浮んで居る…………「おれ達は今に罰が當る。親の事なんか忘れてしまッてる…………ッて言ふのさ。僕もつい、その言はなくッてもいゝ事を言ッてしまッたのでね…………」

亮一郎は言葉を切つた。そして默つて考へるやうな目付きをした。才子は初めから胸を躍らして默つて居た。母の怒つた顏が胸に浮んで居る。亮一郎はむかれた、憎くさうに自分を見た母の目を思ひ出した。まだ恐ろしいやうな、反抗せずには居られないやうな氣持がした…………

或日、才子が一人て居ると、母がふッと入つて來た。亮一郎は出勤した留守なので、才子は慌てゝ、奥に通した。だが、何故か襲はれるやうな恐ろしさが感じられた、隨つてはき〳〵出來ない心持がした。

母は何か氣負つて居るやうな調子て、坐るとすぐ才子の身體の樣子を聞いた。そして、だん〳〵その術が上手になッて來る手柄話をした。もう氣が乘り切つて居る調子て、

「さ、前において、今日も爲て行から」と言つた。才子は、默つて母のする儘にさせた。母はそれをすますと、まだ物足りないやうに

「才さん、誰か近所に身體の惡い人は無いかい?……あなたの知つてる人てあるなら、ついでに爲て行から」……と言つた。才子は

「はあ……」と言つて半信半疑な顏をしながら暫く考へて居たが「えゝ、それでは一寸、呼んでまゐりませう。此頃知り合になッた奥さんの方て、身體が弱いッて、始終ぶら〳〵してゐらつしやる方がありますから……」と、母の意を聞くやうに、その顏を見た。

「それては、その方を呼んてらッしやい。」と、母はすぐ言つた。才子は、母の氣負つた樣子に追はれるやうにして、家を出た。

暫く、母は室の中に獨りて坐つて居た。胸の中には何にも思つて居なかッた。何か氣が忙しいやうな爲る事が山程あるやうな……これから歸つてする、家の事を時々思ひ出したり、前にあッた集會の時に座に居た、或る海軍の高官の令夫人のものの言ひ振りやら……落ち付いた、重々しい、貴族らしい調子

など が胸に浮んだり消えたりして居た。すると、門の格子が開いて、廿一二の女が、才子と一緒に入つて來た。

座敷に入ると、その女は取り澄したませた様子をして挨拶をした。鼻の處が鋭く瘦せて、美しい大きい目が、少し濁つて疲勞して居る様子が見えた。身體はたせて小さかッた。

母はそれを見ると、先づ自分の嫁の才子より美しい事を感じた。

「飛んだ事て、お呼び立ていたしました。」と柔かく言つた。「如何お惡いのです?」

「えゝ……あのう、ずッと以前から身體が惡いのでございますが、近頃は分けて胃がいけませんので……」女ははッきりした聲て言つた。

「あのね、私は變な事を致しますやうて、腑に落ちなくお思ひなるかも知れませんけれど、この術て大層病氣が治る方がありますのですから、御安心なすつて……たゞほんの、斯うして身體を撫てるばかりですから……」と、斷るやうに言つて、瘦せた背を撫て始めた。

女は亂れた髮て、少し俯向き加減になつて坐つて居た。始終、姿をくづさぬ様にちやんと坐つて居た。

母は終ると

「はあ……」と言つて、輕く背に手を當てた。女は、丁寧に辭儀をして、坐り直したが、初めの通りに取りつくろッて、自分の顏にばかり氣を取られて居るやうに坐つて居た。そして、折ふしそッとこの老夫人の顏を見た。

母も默つて、目を才子の胸の處にやつて居たが、暫くすると、

「才さん、亮一郎は此頃忙しいんてすか？」と何氣ない樣子て聞いた。才子ははつとしたやうに、

「何て御座いますか頻に書ばかり讀んてらッしやいます。」と答へた。母は心の中て頷くやうにして居た。

そこへ、次の唐紙をそッと開けて、下女が手をついた。

「奧樣……」と、目て相圖をするやうに、才子を見た。才子は少し、氣が上づッたやうな聲て

「あ……」と言ふと立つて下女の前に來た。そして重さうに大きい皿に、壽司を盛つたのを、兩手に抱へて入つて來た。

「一寸、お間にと思ひまして」と言つて、母と客との間に置いた。

「あ、丁度いゝ事……だが、此處等てはお肴は古くはないかしら」と母はそれを檢査するやうに見た。

「四谷ても、此處まて來ますと、本當に場末だもんてすから……新しいのッて申し付けましたが、いけませんてせうか？」

「いゝえ、そんなても無いやうね。」と言ふ處に下女が、小皿と箸とを持つて來た。

母は、皿の中から、海老の截つたのと、蛸のと、それに海苔のを添えて、客に進めた。そして自分の皿に取ると大きい皿を、才子の前に押しやッた。

そして

「さあ、どうぞ、御一緒に戴きませう。」と言つた。客はそれを見たが、箸を取れなかッた。

客が歸ると、やがて母も立つた。才子は途までと言つて、母を送つて出た。屋敷町の生垣の中を歩いて行くと、秋の日が、まぶしさうに照らして居た。傘を持たずに日の中に出たので、才子は、眩しさうに、手を目に翳して歩いた。母は氣が付いて、傘をさしかけようとしたが、ずッと背が低かッたので、才子は笑ひながら辭退して少し身を離して歩いた。暫く行くと母は

「今のは如何言ふ人の奥さん？」と聞いた。

「軍人の方ですの」

「綺麗な人だね。姙娠かもしれないよ……」と言つたが、ふッと、飽まで取りすまして居た目付を思ひ出すと、急に群々と憎くなッた。

「今の若い人は、何でも私達のする事をけなしてしまふけれど、さうばかりのものでは無いよ。才さんも、本當にそんな宅にばかりぶら／＼して居ないで澁谷の道場に行くがいゝのに……」と言つた。才子はちらとその顔を見た。母はもう強く口を結んで居た。

「それから、良いなら良いッて言つておよこしなさいよ。」

「はあ……」才子は、おど／＼した。

二人は又默つて歩いた。通りの電車の停留場まで來て別れようとする時に、母は

「あの、それから亮一郎にも、又あんまり來ないぢやないかッて言つて下さい。」と眞面目になッて言つ

た。

五

もう、夜は薄い外套が如何にも身體にぴつたり着いたやうに思はれる頃に成つた。亮一郎は、銀行の歸りに、友達とレストーランに入つて、氣樂さうに話して居た。すると、ふつと、赤坂の家に行つて見ようと思つたので、持つて居たフォークをそこに置くと、ものを考へて居るやうな目付きをして、友達に別れてその家を出た。

外にはもうすつかり燈火がついて居た。電車の處まで急いで行くと、そこに來た車に乘つたが、ふいと、母が例の信念で興奮して居る顏を思ひ出すと、思はず、躊躇するやうな心持になつた。で、葵橋で電車を降ると、車に乘つた。

家の門には立派なゴム輪の車が一臺待つて居た。門を開けて、平常入るやうに、庭の木戸を開けると正面の座敷には明く電燈がついて、十二三人の客が圓くなつて坐つて居た。亮一郎は皆の視線から避けるやうにして父の居間の緣側の方に歩いて行つた。その時にちらと、座敷の中程に父が窮屈さうに坐つて居るのを見た。で、何事だらうと思つて、上にあがると、そこに居る弟に

「何があるんだい？」と聞いた。

「高野さん……」と弟は簡單に言つて、ふつと立つて行つた。

と、母が小刻みに馳けて出て來た。

「あゝ丁度いゝ時だつた。高野さんが來てらつしやるから、お前もお目にかゝつて置き……」と、口早に言つて、又座敷の方にもどつて行つた。

亮一郎は、そこに立つて暫く考へて見たが、そつと座敷に來ると、席の末の處に坐つた。長い十疊の正面に、小作りの黑い紋付の羽織を着た端正な顏をした老婦人が居た。その人の前に、老人が坐つて例の術を爲して貰つて居た。亮一郎は窮屈さうにズボンを穿いた足を曲げて、橫坐りをしながら席の人を一順ずつと見た。その視線が父の顏に行くと、父はぢつと見返した。

老婦人に近い人が、一人づつ術を爲して貰つて居る間、目を離さずに、高野さんを見て居た。亮一郎は疑問の集點を見て居るやうな氣がして居た。

「や！」と冴えた、透る聲が折ふし耳に來る。

やがて、それがすむと、座に居た三四人の人が老婦人に辭儀をした。老婦人は、何處かに鋭い冷い顏に、勝ち誇つたやうな笑を浮べた。そして、傍にある袋を引き寄せると、その中から煙草の道具を出して、一息吸つた。

〔と、亮一郎の後に弟が來て坐つた。亮一郎はそれに押されて前に出た。そして正面から老婦人の顏を見た。

坐は暫く誰もものを言はなかつた。すると、母が

「御疲れてございましたてせう。」と機嫌をとるやうに言つた。
「いゝえ、なあにこれ位ては……」老婦人は冷い顏に、慢つた笑ひを浮べて言つた。そこへ
「あのう……先生」と座の一方から聲をかけた。痩せた、脊の高い三十七八の夫人が、身を少し斜にして、片手をついて居た。
「今日は、私共の下女を連れて參りましたが、如何かよく、おつしやり付けて頂きます。」と言つた。
「ハア、さうですか」と言ふと、老婦人は、心持、身體を伸び上らして、席の末の方を見た。亮一郎はその顏を目たゝきもせず見詰めて居た。
　すると、
「私のこの敎へては、一體人の身體は壞れたら、本から修復が出來るのてございますが、日本の神樣はちやんと、それを敎へて、その法を授けて下さいましたのに、今の醫學ては硏究々々と言つて、その大本を忘れてしまつて居るのてございますね」……老婦人は透つて響く聲をして、柔かい、丁寧なものの言ひ振りをした。亮一郎はふッと母が近頃これに似たものの言ひ方をするのを思ひ當つた。
「森さんの女中、よく聞いてお置……」と、老婦人は一段聲を高めた。「私は今お前の身體を治して上げたが、私にはその身體を壞す事も出來るよ！」と、睨み付けるやうな聲をした。と言つて、ふッと傍を向くと、最前の夫人の顏を見て、柔かく
「さうて、ございますね。ちやんと修復が出來るのてすから、それを壞す事も出來る筈てございませう

？」と言つた。その時に

「はあ……」と言ふ強い力に押されて居るやうな聲が、母の口からも漏れた。

亮一郎は自然と目が鋭くなつて、強く老婦人を見詰めて居た。

やがて、客も、老婦人も歸つて行つた。家族のものは、ほッとしたやうにどやどやと、居間に入つて來ると、亮一郎は、父に向つて坐つたが

「變な婆さんですね……」と思はず言つた。と

「本當にお前は仕樣の無い人だ。」と母の聲が突發した。「高野さんが、お前をぢッと見て居なすッた。それだのに、正面に坐り込んで、腕組みなんかをして……だから、高野さんが、森さんの下女にもあんなに言ひなすッたんだ。きッと高野さんの目にはちやんと、お前の惡い處が映つてるに違ひない。あれでお前を誡めなすッたんだ……」

母の目が凄いやうな、ものを憎む光を見せて居た。

「私が、何を思つてわざ〱四谷邊りまで行つてやるとお思ひだ？……才は禮一つだッて言つた事は無い……親不孝ものだね。」

母は叩くやうに言つた。亮一郎は默つて聞いて居た。そこに居た父も弟も默つて居た。

（完）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

八月號

婦女界

一冊十五錢郵税一錢五厘六冊九十錢十二冊一圓七十五錢

東京神田 同文館

◎美人論

▲時代から見たる美人……佐々醒雪
▲整齊の美……白柳秀湖
▲体育は美人を生む……井口あぐり
▲表情は美人の一資格……藤島武二
▲注意すべき婦女子の姿……田代義徳
▲美人とは如何なるものか……久保田米齊
▲遺されたる京美人……大道雷淵
▲美人に對する各國人の理想……桑谷定逸

◎女と宗教　平岩愃保

▲海事思想と主婦の責任……肝付中將
▲踊は立派な藝術である……田中博士
▲再び向氏の忠孝論を排す……加藤學士
▲親に對する娘の希望一定の開放を望む　野路の雨

◎見合ひ論　宮田脩

◎月夜　泉鏡花
◎とみくじ　内田魯庵

◎臺所の經濟は如何にすべきか　大西よし子
◎千倍に擴大したる人の顏　安藤秋三郎

△小兒衛生……豊福醫學士
△文藝其月々　沼波文學士
△英詩と婦人　若月文學士
△名書解説　瀧村文學士
△英詩『海邊』　仙石四郎
△夏の流行△豆腐料理

懸賞新題　一等五圓　外等數　◎　和歌 俳句 習字 繪畫　一等三圓　其他等數

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

○壹冊定價 金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘（海外郵稅拾錢但清國を除く）

冊數／國別	内國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓七拾貳錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓參拾四錢
	以上郵稅共	

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本鄉西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料壹錢を加へらるべし然らざれば御送金の内より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵劵代用は必ず壹割增に送らるべし

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし次の前金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず字まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十四年七月廿八日印刷納本
明治四十四年八月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 天野耕一

東京市本鄉區駒込西片町十番地
發行所 反省社
振替口座東京三十四番
電話下谷九一九
電信略號ハンセイ

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場

關東大賣捌所

所在	店名
東京神田表神保町	東京堂
仝 神田裏神保町	上田屋
仝 京橋尾張町	東海堂
仝 京橋元數寄屋町	北隆館
仝 本鄉本富士町	盛春堂
仝 京橋西紺屋町	良明堂
仝 日本橋本石町	至誠堂

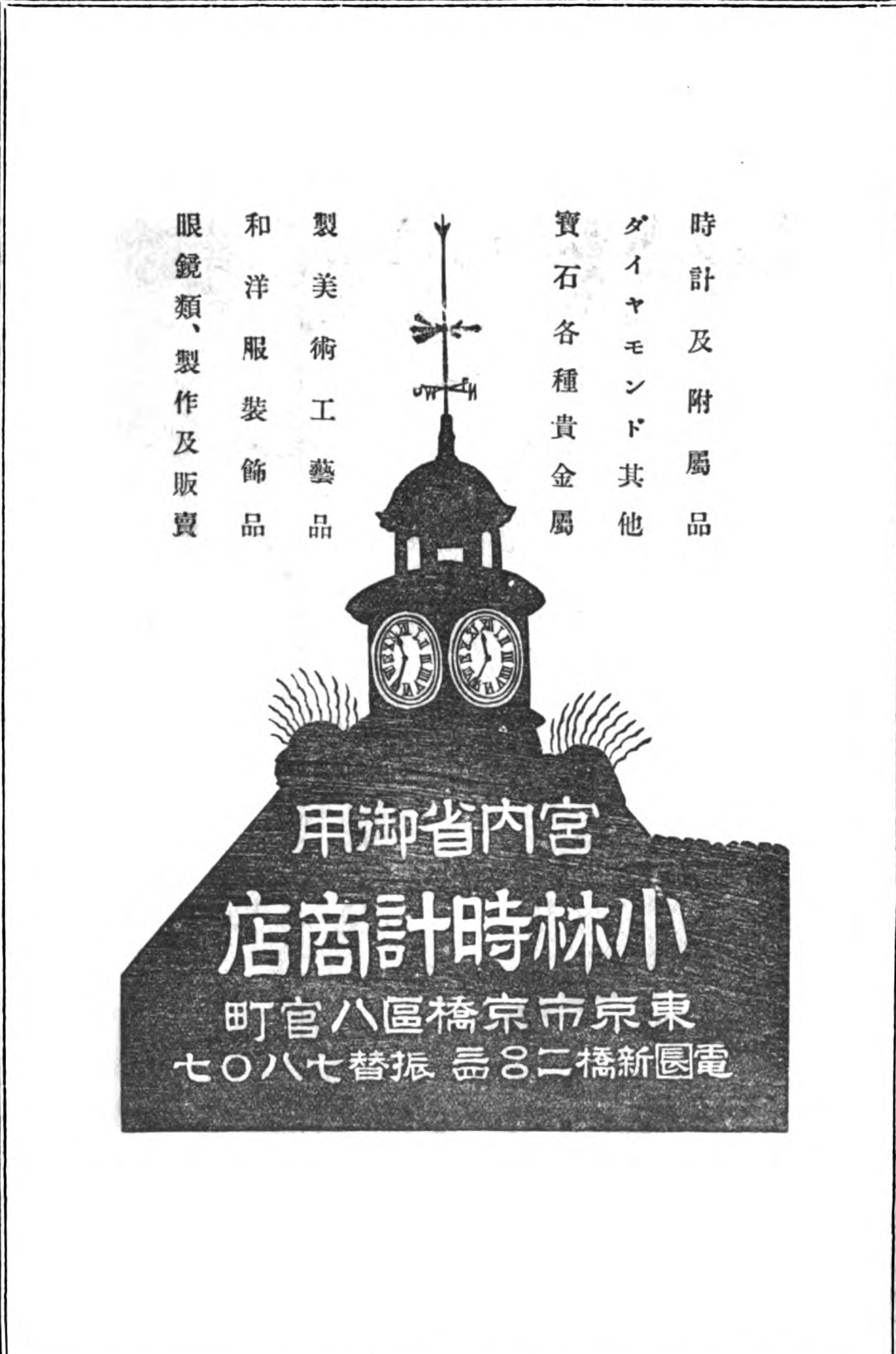
關西大賣捌所

所在	店名
大阪東梅田町	盛文館
仝 京町堀	太華堂
京都佛光寺	東枝書肆

中央公論廣告料

半頁（普通場所ニ限ル）	一回	金拾圓
普通	一頁、一回	金拾五圓
表紙の三、目次ノ一、	一回	金貳拾圓
表紙の二、目次の四、	一回	金貳拾五圓
表紙の四	一頁、一回	金參拾圓

廣告一手取扱 神田三河町一丁目 博報堂


時計及附屬品
ダイヤモンド其他
寶石各種貴金屬
製美術工藝品
和洋服裝飾品
眼鏡類、製作及販賣
宮內省御用
小林時計商店
東京市京橋區八官町
電園新橋二呂嵒 振替七八〇七

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE HANSEI-SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
明治四十四年八月一日發行（毎月一回一日發行）

中央公論第二十六年第八號

MADE IN JAPAN